Justicia

犬之神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｊｕｓｔｉｃｉａ

【Ｎコード】
Ｎ１３５７Ｐ

【作者名】
犬之神

【あらすじ】
今は２０９０年。
科学も大幅ではなく少しずつ進む中、世界は５０年前からあることが変わってきていた。
５０年前の７月１５日、原因不明の光が世界を覆った。
別に新種の兵器という訳でもなく、死人などはなかった。ただ――”超能力者”が出現し始めたのだ。
大小様々な能力を世界の十分の一ほどの人間がその日を境に能力に目覚める。

それだけなら問題はない。能力を使い、その能力を社会に役立てる”善人”
もいるのだから。
しかし、”善人”がいるのなら当然”悪人”もいる。
悪人は手に入れた能力を使い、私利私欲の為に使う。
普通の警察などでは太刀打ちできない能力犯罪者達。
そんな犯罪者達に対抗する組織をある一件を経て、同年、12月29日にスペインは立ち上げる。
通称”正義の城”。
犯罪者を”殺す”為に作られた”能力者”が8割を占める組織である。
”正義の城”のメンバー、通称”正義の使徒”は一人ひとりが犯罪者に思うところがあり、自分の信じる”正義”の為に犯罪者を”殺す”事を躊躇わない。
主人公、火向仁矢(ひむかいじんや)もその一人。
彼は大切なたった一人の家族、愛理の為に自分だけの”正義”を掲げ、犯罪者を殺し続ける。
今日も、いつものように仕事(ころし)を終わらせる。正義の城、日本支部第一部隊隊長として。
そして、その日、隊長格全てが呼び出される。
緊急の会議らしい。
そして、全ての隊長格が集まり、王城最(おうじょうさい)が、口を開く。

「日本に――アノマがいる事が分かった」

それは、世界で最も悪で、最も異常な犯罪者の呼び名。
そして、火向仁矢の全てを狂わせた存在。

その日から、全ては始まった――。

序章　ハジマリ（前書き）

基本中二が書く厨二病みたいな小説です。
戦闘も結構あります。
不出来ですが読んでいただけると嬉しいです。
ちなみに、Ｊｕｓｔｉｃｉａはフスティシアと読みます。

序章　ハジマリ

ズガガガガッ！！！
ある繁華街の裏路地に銃声が響く。一人の男がもう一人の男に銃弾を浴びせた音だった。銃弾を浴びせられた男は息をしておらず、虫のように動かない。

「ふぅ・・・」

赤い瞳に金髪の髪が目立つ、異様なオーラを出す男は返り血を浴びた正義の城のスーツを気にもせず、少しため息を吐く。
男の名前は火向仁矢（ひむかい じんや）。犯罪者を殺す組織正義の城の日本支部第一部隊隊長であり超能力者でもある。正義の城全体を見ても間違いなく最強の男だ。今、犯罪者を任務どおり殺したのだった。

「おわったか～？仁・・・いやジード？」

路地裏の隅から男ひょっこり出てきてのんきな声で言う。
ジードというのは正義の城での仁矢の仕事名のようなものだ。任務関係のみは仕事名で呼ばれる。コレを”使徒名”というちなみに仁矢の使徒名は”嵐のジード”である。
一方この男は木戸大河（きど たいが）。正義の城日本支部第一部隊副隊長だ。超能力者である。使徒名は”幻想のシュードラ”仁矢の学園のクラスメートでもある。

「あぁ終わった。時間をかけたな、帰るぞシュードラ」

へいへいと木戸は適当にうなずく。
5分後一つのヘリが到着した。正義の城第六部隊のヘリだ。主に使

徒を任務の場所に送る部隊だ。

「ご苦労さン。さっさと乗れ～。」

ヘリの中からメガネをかけたボサボサの男が言った。年齢は２０代後半の青年である。

彼の名前は期才十（きさい じゅうじ）。使徒を仕事の場所に、正義の城の高速ヘリで送り届ける第六部隊の隊長だ。

使徒名は”鬼才のバトラ”であり正義の城歴代初の異例の超能力を持たない隊長。普段は六部隊にも関わらず、戦闘能力が高いゆえに送検などはせず殺すために前戦に出るはずなのだがと思い仁矢はたずねる。

「なんで隊長のオマエがわざわざ？」

「いや～なんか今から隊長会議らしくてよ？急ぐからこの俺がきてやったわけよ。あ、副隊長は今回会議はいいらしいぜ」

そうか、と仁矢たちはヘリに乗り込む。乗って数分。木戸は言った

「にしてもなんなんだろーな？隊長のみの会議とか？バトラさんなんか聞いてねえ？」

「わかんねぇな～。ただ支部長がそぉとぉ急いでたな。よほどのコトなんだろきっと」

正義の城のヘリは速い。わずか数分で話している間にもうついた。正義の城日本支部。見た目は５０階建ての普通のビルだ。ココには各使徒の部屋があったりもする。隊長格の部屋はそれよりも広い。

（隊長、副隊長の部屋）

「さっさといくぜぇ仁矢。５０階の支部長室だ。多分もう他の隊長は集まってる。任務もなかったようだしな」

「ああいくか。大河、オマエは部屋に待機してろ。後で連絡する」
エレベーターに乗り、木戸は４８階の第一部隊専用の自分の部屋へと行く。
そのすぐ後、５０階についた。他の隊長はもうそろってるようだ。
「おぉーきたかジード、バトラ」
声を出したのは支部長の王城最（おうじょうさい）。使徒名は”神童のスカージ”超能力者である。赤髪で長髪の２０代に見えるのだが、恐ろしいことにとっくに４０は超えている。
「すみません。仕事中でしたので」
別にイイさ、と最は言う。
そこに。
「遅い。遅すぎよ。嵐のジード。それでも第一部隊隊長？さっさとやってきなさいよ仕事は」
悪態をついた見た目１９歳くらいの髪留めを髪に左右対称にしてつけているツインテールの茶色の髪の女は甲ノ宮風歌（こうのみやふうか）。第二部隊隊長。使徒名は”憤怒のフィア”。女であり超能力者である。第二部隊は第一、二、三部隊と同じく戦闘部隊。二部隊の特徴は遠距離系の殺しを得意とする。
「そうだな。善処する」
仁矢の冷静な対応に甲ノ宮はわずかに苛立ちの顔を見せる。

「いきなりだから仕方がない。そう言うな。フィア」

フォローをしたのは第三部隊隊、長九条豪。使徒名”冷戦のクレイ”。顔の右側全体に包帯をつけているとてもゴツい男だ。年齢は３０代前半だろう（性格はかなり優しいのだが）三部隊は主に近距離の殺しを得意とする。さらに、

「任務お疲れ様です。怪我はありませんか？ジードさん。」

身を心配してくれた優しい雰囲気のする黒髪の女は第四部隊隊長、心情愛。使徒名は”聖母のマリア”第四部隊は医療系の部隊である。なお、一番穏やかな部隊といえるだろう。

「ああ大丈夫だ。というか俺の能力なら治療は必要ない」

と答えると

「まぁその前に兄貴はそんな能力なくても大概無傷だしなァ」

仁矢を兄貴と呼んだのは、第五部隊隊長の戦始終牙。使徒名は”狂乱のボギー”。荒々しい風貌でバンダナを髪に巻いていて、そこから荒々しい棘のように髪の毛が出ている。
殺しの後始末などを担当する部隊なのだが、戦始とその副隊長は非常に戦闘能力が高く、戦始はこの支部では仁矢、最と並んで強い。ある一件で仁矢に尊敬しているがその件は後ほどに。

「まっジードはつぇぇからな」

と適当に期才は言う。そこに

「ふふ～さすがジードくんだね～。私がほれるだけはあるね～♪」

右手を頬に当てながら顔を赤くしながら言ったピンク色の髪のエロイ雰囲気を持つ女は榛原優香（はいばらゆうか）。第七部隊隊長の女性だ。使徒名は”遠集のメルト”。情報を収集する部隊であり隊長ともなると相当な情報量を持つ優秀な女性。なのだが仁矢にベタボレしているため、その能力を仁矢の情報集めに使うことも多い。

そんな榛原を華麗にスルーし

「で？一体なんなんですか？スカージ支部長。」

その一言で全隊長の視線が最に集中する。最は深呼吸して一言。

「日本に――アノマがいることがわかった」

その日の一言から、全てが始まった

第一章　狂い始める世界

「――――――」

その場の殆どの人間が絶句した。無理もない。
犯罪者にはランクが存在する。危険度の高い順にS、A、B、C、Dだ。危険度のレベルで言えば簡単に説明するとDは人殺しは人殺しだが一人を殺したことのあるレベル。Cは連続殺人などというレベル。ここまでなら捕まえ、殺すのに問題はない。問題は次からだ。Bは一つの都市を潰せるレベル。Aは国一つを潰せるレベル。Sは世界を混乱に陥れるレベルの犯罪者。そしてSランクの危険性の高い犯罪者は世界に3人しかいない。
アメリカで発見された犯罪者―不明（アンノウン）。世界”最恐”の犯罪者。
日本で発見された犯罪者―斬（キリ）。世界”最低”の犯罪者。
そして―
スペインで発見された犯罪者―異常（アノマーリア）。世界”最悪”の犯罪者。
通称アノマ。三人の中でも特に危険性が高く、名のとおり最も異常性の強い犯罪者だ。そして正義の城が作られる決定打になった犯罪者でもある。そんな犯罪者が日本にいるとわかったのだから絶句するのも無理はない。
しかし―
火向仁矢は笑みをこぼしていた―
仁矢は妹の火向愛理（ひむかいあいり）以外の血がつながった人間全てをアノマに13年前の日に殺されている。なぜピンポイントで狙われたのかはいまだにわからないが、彼はそれ以降、愛した家族を殺した犯罪者を憎み、妹の愛理に最悪な思いをさせたアノマを殺すために僅か5歳で正義の城に入り、犯罪者を殺し続けアノマを追い続けていた。しかし今までアノマという存在の片鱗すらつかめなかった。しかし今になってアノマが日本にいることがわかったのだ。笑みをこぼすなと

いうほうがムリだ。何とか興奮を落ち着かせ仁矢は問う。

「で？正確な居場所は。」

「大阪のとある倉庫らしい。全部隊で出動するぞ」

１０分後、高速ヘリを使い、正義の城総動員で出向く。例の倉庫の周辺に正義の城全部隊が倉庫を包囲する。

「突撃だ！いくぞ！」

神童のスカージがのろしをあげる。

１０００人もの人間が倉庫に入っていく。しかし恐ろしいほどに倉庫は静かだ。そこへ

「ヒャハハハ。来てくれてアリガトウ！そしてサヨウナラ！！」

狂ったような男の声と共にゴウッ！

大量の炎が倉庫を包み込む。それで仁矢は理解した。

「炎上する！倉庫から早く出ろっ！」

倉庫は異常な速さで燃えカスと化した。倉庫は一瞬で燃えて消え、あたりにはコンクリートの地面がただ並ぶのみ。そして倉庫があった場所を中心として燃え続けている。

そして炎の中から異様な男が現れる。

服装自体は普通だ。白いシャツ、そしてそのシャツの上下左右から黒い牙のような模様が真ん中のところまで続いており、その四つの黒い牙の模様の先にはａと書かれている、そしてジーパン、それだ

けなら問題ない。だが、前髪は長すぎて顎のところを越えている。そしてその隙間から死んだ魚のような目でいて狂気を含んだ紫色の瞳が覗く。２０代前半と思われる、人目で普通の人間でないと分かる。男は言う。

「アリャァ？一気に消せなかったかぁ。火力間違いましたかねぇ？焼きが回ったモンだなぁクソ。」

ふざけた口調で言う。ふざけてはいるがこの男はかなりの危険性のある男だ。今の炎で隊長各以外は殆どが重症だ。四部隊の人間が急いで治療をしている。

「アンタ・・・ジエル＝グラストね・・・」

榛原が言った。

「ン～？あァそぉだゼェ。俺はジエル＝グラスト。日本人だから本名でもなんでもない偽名だケドなァ。ぶっちゃけ偽名とかあんま意味ないかねそういえば」

ジエル＝グラスト
かつて幾つかの国を燃やし、破壊した犯罪者だ。危険性の高いＡランクでもトップ１０の中に入る男だ。そんな折、当然の疑問を仁矢はする。

「アノマーリアは・・・アノマはどこだ。」

「あぁアノマねぇココにはもういねぇぜ。国内にはいるけどな。テメェラが来ると分かったから俺が残ってみたんだよ」

王城も質問する

「オマエとアノマの関係はなんだ？」
ジエルはカンタンに答える。
「んー関係ねエ。仲間っつうには友情度が足りねえっすねー。計画の協力者てトコかな俺は」
規則性のないふざけた喋り方でジエルは割と重要なことを話す。
「協力者？アンタ達は一体何をやろうとしているの。場合によっては撃ち殺すわよ」
甲ノ宮が拳銃を構え言う。
「あ～悪い悪い。ココまで言っといてなんだが言っちゃイケネエンだった。生殺しで悪ィナア。ホントすみません」
「まあいい、殺して脳の中をメルトの手で解析すればいいだけだ。」
九条が殺意を見せ言う。
そんな殺意にも全く動じずジエルは言う。人差し指をまっすぐ顔の前に持っていき、
「さて問題デス。俺ことジエル＝グラストくんはなんでこんなに余裕なんでしょうカ？」
？とジエル以外の全員が疑問を顔に出す。その瞬間。
グアッ！！！
見ている風景全てが歪みを起こした。
（？！なん・・・だ？これは・・・！！）

「バカだよねえオマエラア。ベラベラ喋ってりゃ目測狂わせることもできるっつの。」
「ま・・・さか・・・熱で・・・空気を・・・」
「そおそお！大正解っ！熱で蜃気楼を生み出し、光の屈折率を大幅に変えて・・・今の状況の出来上がりってワケさ。まあ要するにテメエラの目測は完璧に狂ってる。」

楽しそうにジエルは言う。もう余裕だ。しかし無理もない、目測が歪んだ今、正確にジエルを狙うことなど誰にも不可能だ。

「デ？さっさと殺しますかね。追っかけられてもメンドだし」

ジエルはもはや警戒をする必要もないとばかりに背中を見せる。そこに、

「死ね」
「？！」

ドガァッ！
血が流れる。ジエル＝グラストのものだ。左腕からかすったようなかすり傷が出来ている。今起こったことは単純。ジエルが背中を見せた、その隙に仁矢がどこからか取り出したナイフを使い心臓を狙った、しかし寸前でよけられ左腕にかすった程度だった。問題はそこではない。

「オイオイ・・・なんで目測狂いまくってんのに正確に俺の心臓を狙えるわけよ・・・？」

ジエルは不気味な笑みを浮かべ言う。

そうなのだ。仁矢は目測が完璧に狂っていた。それは間違いない。だが、今仁矢が何かをし、目測を完全に直した。そうそれを意味するのは蜃気楼を消し、元の状態に戻したのである。

「オーイオイ・・・完璧にミナサン元通りかよ・・・」

目測を直された今、隊長格たちも今完全に戦える状態にある。なにをしたかはわからないが、目測を完全に直された今、同じ手は使えない。そう判断したジエルは、

「オイオイオイ・・・面白えけどさあ・・・人がせっかく決めてる顔してたのにムカツクことしてんじゃねぇぞクソがあ！！！」

ふざけた口調とは裏腹に怒りが隠れた罵声と共にジエルは大量の炎を生み出す。そして炎が広範囲にわたって広がる。

一斉に隊長格たちは避け、次の反撃を狙う。

しかし

ジエル＝グラストは消えていた。

＊

そのころジエルはある場所にいた。その倉庫周辺から少し離れたとある廃ビルの中だった。

「・・・」

なにかを考え込むジエル。そこに、

「で？アノマの命令を無視してまで何か得られたか？ジエル＝グラスト」

スーツ姿の男が現れた。水色の髪に、平均的な背丈、ルックスがいい外国の人間だ。年はジエルと同じくらいだろう。
しかしその顔には表情は全くといっていいほどない。その男の問いにジエルは答える。

「なんだ・・・オマエも戻ってきたのか、ラス。」
「なんだではない。倉庫での用を果たし、次の場所に移動すると言ったのに、一人残るとはな・・・で？もう一度聞くぞ、何か得られたか？」

ジエルはその問いに一瞬考えるようにして、ラスと呼ばれた男に言う。

「そうだな・・・火向仁矢・・・アイツは面白ソォだなってコトぐれぇっすかねぇ」
「アノマの言っていた奴か・・・プランの障害にやはりなりえそうだな」

そうだな、とジエルは言い、ラスに再び言う。

「気ぃ変わった。最初のプランは俺がやってやるよ、バナムと小谷とな。プランリーダー様、いや、ラス・ウィディア」
「そうか、期待しているぞ、プランメンバー、ジエル＝グラスト。その能力でアノマのプランの役に立て」

役者たちがそろい始め世界は狂い始める。

第二章　援軍と始まりの炎

倉庫街にてジエルと遭遇してから一週間・・・日本ではジエルが行ったと思われる犯罪が三件も起きていた。三件の内容は全て同じで、東京の大都市（正義の城日本支部のある場所でもある）で大企業のビルが３つが全焼したのである。負傷者は合計で１０００人以上、死者は３００人は出た。正義の城総出でジエルを探したが、いまだ見つからない。アノマの手がかりさえも見つけられない。

（正義の城のある場所で堂々とやるなんてな・・・ナメてやがる）

そんな状況に歯噛みしていると隣から声が聞こえた。

「大丈夫ですか？兄さん」

火向愛理（ひむかいあいり）、仁矢の実の妹である。仁矢とは違い髪の色が水色な美少女だが、仁矢が髪の色を金髪に染めてあるだけなので問題ない。仁矢と同じ神正学園に通っており二年生である。仁矢の唯一の家族であり最も守りたい少女だ。

「ん・・・ああ大丈夫だ。少し考え事をしていた」

「久しぶりの学園なんだから安らぎをちゃんと得ないとですよ？」

そう、仁矢は学園三年生の身ではあるが正義の城隊長。学園に行く時間など早々ない。忙しいときは一週間以上も学園には行けず、現に今までは一週間学園を休んでいた。今日は久しぶりの学園なのだ。正義の城支部長の王城から

『ジエルのコトはあるけどよ・・・最近オマエ休みないだろ？ちっ

と休め。ジエルと殺りあう時にもたねえぞ』

といういらないお節介をうけて、現在東京都内の学園へと続く街中を二人並んで歩いている。よくよく考えてみるとここ最近、仕事が多くて愛理とも時間がとれなかったのでこうして王城の好意に甘えておくことにしたのだ。

「・・・愛里は学園うまくいってるか？ここの学園は特殊なヤツ多いからな・・・心配だ」

その質問に右から愛理が答える。

「大丈夫ですよー。確かにちょっと話しかけづらい人もいますけど仲良くやってます。ところで今日は木戸さんも来るって言ってましたけどなんで今いないんですか？」

そう。火向兄妹の通う神正学園は普通の学園とは少し違う、簡単に言うと警察関係の人間が多い。

神正学園は元々、警察関係者の為に作られた学園だ。５０年前の犯罪者の急増から、世界は大量の鍛えられた警察官が必要だと考え、将来警察となるものをこの学園に集め、鍛えるために出来たのだ。

しかし、とは言っても、

（いくら鍛えても凶悪なＢ，Ａ，Ｓの能力者の犯罪者には無能力者など全く役には立たないだろうがな）

役にたたないからこそ、能力者が８割をも占める正義の城が作られたのだから。正義の城が作られた今、警官だけではなく一般の人間も入れるようにもなった。

とは言っても体は鍛えておくに越したことはないし、何より愛理と

学園に行けるのなら、ということで仁矢は神正学園に通っている。
仁矢は正義の城の使徒であり、日本支部の中でも学園に通える年齢の使徒とのこともあって体を鍛えるためにというのとたまには生き抜きできる場所をとという二つの意味でこの学園に入るように王城に言われ入学した。（年齢若く見える甲ノ宮と心情は去年卒業し、榛原は２０代前半）
それにしても、と仁矢はふと思った。

（王城さんから学園に通わせてもらったのはいいがいつのまにか３年生か。・・・大して登校もあまりしていないしあまりいい学生時代ということにはなりそうにないな。まぁ俺達を前面負担してくれてる王城さんに感謝はしてるし文句はないがな）

火向兄弟は１３年前の７月２６日に血のつながった頼れる人間全員を殺されている。当時５歳の仁矢と３歳の愛理には頼れる場所が無かった。
そして家族全員が殺され、殺人現場となった家を警察が捜査し終えた翌日、当時正義の城日本支部第一部隊隊長だった王城が来た。そして王城は言ったのだ。仁矢と愛理の二人を正義の城で養うと。何故王城が養ってくれるようういってくれた理由は分からないが。
そしてその日から二人は正義の城に部屋を用意された。仁矢は家族を殺し愛理を悲しませたアノマへの復讐の為にその日から王城に鍛えてもらい、今に至るというわけである。

（王城さんにはいずれ必ず恩を返さないとな・・・）

と、考えにふけっていると愛理が不満そうな顔で見ているのに気づく。

「あのー・・・質問に答えてその後質問したのにその無言てどー

なんでしょう？」
「ああ、悪い。そうか、馴染めてるならいいんだがな。大河は今日は来るが朝あまりにも起こしにくい素敵な寝顔で寝ていたからそのままにしといてやった」

木戸大河も学園に通える年齢であり通っている。

「やっぱり兄さんは優しいですね」

朝に大河を起こそうとしてると遅刻になるし何より面倒くさかっただけだがな、と仁矢は心の中で付け加える。

「素敵な友情をありがとうよー！親友ー！」

声に驚き愛理が後ろを向くといつの間にか木戸がいた。その顔には汗をかいている。気のせいか少し呼吸も乱れている。
そのまま仁矢の左隣へと行き仁矢と肩を並べると木戸は言った。

「いやー少しくらい待ってはくれないもんかね？親友」
仁矢はため息を一つ大きくつく。

「オマエは起きるのが遅いからな。待つ暇はない。今日だって遅刻レベルまで寝ていたんだろ？どうせ」
「そりゃなー。起きたらもう遅刻レベル。まあ能力使ってセーフだけどなー☆」

その発言に仁矢は少し呆れる。そんなことのために能力を使うな馬鹿が、とでも言いたげに。

「オマエはバカか・・・で？何を生み出して間に合わせたんだ？」
「そりゃあ俺の足が”速くなる”って可能性を現象として起こしたんだよ」

相変わらず便利なんだか便利じゃなんだか分からん能力（ちから）だ、と思いながら仁矢は軽く注意をする。
木戸の能力は正義の城本部から命名された名前で”幻想起動（ファンタシア）”という。
”思い描いた、可能だと思われる現象を発動させる能力”だ。自分が目にしている”物”と”自分”で可能だと思われる現象のみを発動する。例えば、不発の爆弾が道にあるとする。これは当然爆発する可能性は低い。しかし、低いだけで爆発する”可能性”はある。つまり爆発するのは不可能ではなく、”可能”だ。そこで木戸が”爆弾が爆発する”という現象を脳で思い浮かべた瞬間、爆弾は爆発する。
これだけを聞くとかなり応用性の高い能力だが実はそうでもない。一つ目に現象の発動は当然、その場で不可能だと判断される現象は起こせない。そして二つ目に、一度に一つの現象しか起こせない。そして最大の欠点が一つ。
現象を一度発動して発動した現象が終わるか、破壊されてから時間にして十秒経たないと能力は再び発動できない。
「難しい能力なんですねー木戸さんの能力は」
愛理に言われ、木戸はなぜか笑いながら答える。

「そーなんだよ愛理ちゃん。制限きつくて辛いぜー。まぁ、でもこんなことも出来るからいいけどな？」

ブワッ
愛理のスカートが風でさらされる。理由は単純。木戸が愛里の”スカートが風の影響を受けて見える”という可能性を現象として作っ

たからだ。
そのとき一瞬で愛里がスカートを恥ずかしがって直すのと仁矢が木戸の顔面を全力で殴るスピードが同調した。
ドガァシャァツ！　と木戸は地面に崩れる。街中を歩く人達が遠巻きに見ながらそれぞれの道を歩いていく。
仁矢は恐ろしいほどの殺意を見せ、笑顔で木戸に聞く

「遺言は？」
「いやー・・・この殴られる現象を殴られずに避ける現象に変換できたらなー・・・って思い・・・？！ごぶぶべがっ！ちょっ・・・うごぉ！まっ！ぐはぁ！ちょっ！そこ急所ォォォォォオオオオオオオオ！？」

高速のパンチが繰り出され、木戸は一瞬で屍と化した。もうピクリとも動かない。それを確認した仁矢はゆっくりと振り返り愛理に優しく言った。

「大丈夫か愛理。性犯罪者（木戸大河）は粛清した。安心しろ」
「う・・・うん。でも大丈夫なんですか木戸さん？なんか動く様子がないですけど・・・」
「ほっておけ」
「す・・・すんま・・・せんでし・・・た。畜生・・・このパンツめくりは今日の転入生にでもするか・・・」

転入生というキーワードに少し引っかかった仁矢は聞く。

「転入生？」
「ああ正義の城・・・出る前に聞いたんだけどよ・・・榛原さんにな。美少女で外国人らしい」
（あの女は本当にいろんな情報を持っている・・・。というか俺の

関係する場所の情報は特に多い気が。気のせいか、気のせいだよな）
あまり深くは考えたくもなく、頭をスッキリにし、新たな疑問が頭に浮かんだのでそれを問いかける。

「どこかの関係者か？」
「正義の城・・・本部の人間・・らしい・・・ぜ。う・・・」

木戸は力尽きた。急所のダメージが大きかったようだ。
力尽きた木戸を完全無視しながら仁矢は思った。

（アノマの件で来たか・・・にしても学園に通う必要性はないと思うが・・・どういうことだ？）

＊

学園に着き、学年が違う愛理と別れた後、教室に入り、自分の席の窓際の一番後ろの席に座る。木戸はその前だ。
ＨＲが始まる頃にボディーガードのような風貌の担任が告げる。

「えー今日からこの神正学園に入る、アリサ・ニーズ・フィアッカさんだ。挨拶を」
「今日からご一緒する、アリサ・ニーズ・フィアッカです。よろしくお願いします」

丁寧な言葉の日本語で挨拶をするアリサ。

「うほー・・・すごい美人だな・・・なあ仁矢？」

木戸が仁矢の席の前で言う。（急所はなんとか回復したようだ）
無理はない。金髪の髪に黄色い瞳のポニーテールの美少女。男なら誰もが憧れそうな美少女だ。

（・・・あれが、か？）
「席は・・・そうだな火向の右隣があいている」
「ハイ」

アリサが歩いて隣まで来る。そして綺麗な日本語の小声で言う。
「よろしくお願いしますね、火向仁矢さん、改め”嵐のジード”」
「やはり正義の城関係か・・・」
「ええ、正義の城本部第七部隊隊長アリサ・ニーズ・フィアッカ、日本の言葉で訳すなら”電網のリア”です」
（隊長格か・・・情報部隊とはいえこの年齢で本部のか。たいしたヤツだな）

そういう仁矢も人のことは言えないのだが。

「詳しい話はまた後ほど」
「ああ」

＊

学園が終わり、仁矢は家に愛理を送ると、早速木戸と共に正義の城の支部長室へと集まった。中には隊長、副隊長がずらりと集まっている。
王城は言った。

「さて・・・今日から新しいメンバーを紹介する。正義の城本部第七部隊隊長アリサ・ニーズ・フィアッカ、使徒名”電網のリア”だ。」
「本部から対アノマーリアのために送られてきたアリサです。よろしくお願いします」

相変わらず綺麗な日本語だ、と仁矢は適当に思いながら、ある一つ

の疑問を考え口にしようとするが、甲ノ宮がその疑問を先に口にする。

「世界で三人だけの凶悪犯罪者に対して何故一人だけなんですか？」

その問いに王城はうんざりした様子で言う。

「本部は本部で忙しいらしくてな・・・。それにスペインには今、もう一人のSランクの犯罪者、アンノウンがいる可能性がある。下手に戦力を出してしまってその間に万が一アンノウンが出現したら困るだろう。ここ10年は活動してはいないから可能性は低いとは思うが、ゼロじゃあない。それでアリサ一人だけを送るのが精一杯だったらしい。まぁこれでもまだいい対処だろう。本部の情報隊長を送ってくれたんだからな。それとメルト、リアはオマエの部屋に入れてやれ、同じ第七部隊だろうし一番やりやすいだろう」

「了解でーすっ☆」

陽気な調子で答える遠集のメルトこと、榛原優香。

気楽な上に20代前半がなんだそのテンション？と仁矢は思うが面倒くさくなりそうなので口には出さない。女に年齢の話はタブーだ。そして王城は思い出したかのように言う。

「そうだ、最近ジエルの火災犯罪・・・それと、いくつか別件の事件が起こっている。その事件がある犯罪者二人と酷似している」

「小谷亮（こたにりょう）とバナム・ステファニーですね」

一秒もかからず答えたのは仁矢と同じ第一部隊で、木戸等の副隊長と並ぶ権力を持つ、作戦隊長、水並綾（みなみあや）だ。正義の城の正装の上にセーターを羽織っており、足を動かせないため右腕には機械性の杖が

握られている。大人しい雰囲気の可愛らしくもあり大人らしくもある少女だ。年齢は仁矢と同じなのだが足の事もあり学園には通ってはいない。

「そう、かつて様々な建物を壊し、破壊活動をした犯罪者、小谷亮と人間の精神を壊す犯罪者のバナム・ステファニーが起こした事件だと思われる。ビルを一つ斬られ、１０人の人間が精神を壊した後殺される事件も起きている」

小谷亮、バナム・ステファニーはジエルには及ばない危険性だがＡランクの犯罪者である。

「以上だ。いずれ奴らは見つかる。休め！解散！」

こうして会議はお開きになり、仁矢は自分の部屋で仮眠を取ろうと思った。

「少しいいですか火向さん。」

アリサに呼び止められた。

「なんだ？」

「ここでは話しにくいのであなたの部屋へ。」

そういわれ、二人は４８階の仁矢の部屋に行く。とても広く、ホテルの一番高い部屋のような豪華さだ。ちなみに愛理の部屋は隣にあり、そこも同じようなつくりになっている。

仁矢は話を切り出す。

「で？なんだ話は？」

「単刀直入に言います。」

アリサは一息つくと真っ直ぐ仁矢に視線を向け、言った。

「火向仁矢さん、私はあなたを本部に引きずり込むために来ました」

その発言の意味を理解し仁矢は質問する。

「何を言っている・・・？」

「アノマの件のついで、ではありますが本部から伝令されているので、あなたには本部に来ていただきます」

淡々とアリアは話す。まるで決定事項のように。

「俺は本部に行くような人材じゃない。」

その事にまともに取り合う気もなく、仁矢は適当に答える。しかし

「謙遜することはありません。あなたの戦闘力は間違いなく、最強と言えるレベルでしょう。加えてその能力、”瞬間再生（レヘネラシオン）”も。本部は最近戦力不足です。個人的な感想とするとこの日本支部のほうが戦力は上でしょう。本部はアナタをほしがっているのです」

褒めるでもなく、アリサは事実だけを告げる。

仁矢の能力は名のとおり、心臓と脳についた損傷以外なら一瞬で再生するという能力だ。

「なるほどな・・・なんで学園にも来たと思ったが・・・俺をいつでもどこでも勧誘しやすいようにってワケか」

「ええ、それでどうでしょう？」

アリサの問いに仁矢は迷うことなく答える。

「・・・悪いな、断るぜ」

別に、仁矢は昇格などには興味は無い。アノマを殺すために今の動きやすい隊長という位置にいるのだ。これ以上昇格しても動きにくくなるだけでメリットはない。

「そうですか・・・それでは仕方ないです」

アリサは背を向け、言った。

「力づくで入ってもらいます」

「？」

「ここにはトレーニングルームがあるでしょう。そこで私と武器無し能力なしで戦ってください。先に気絶したほうの負けで負けたら本部に入ってもらいます」

成る程な、と仁矢は思う。

正義の城では引き抜きの際、拒否権がある。そして拒否された場合でも引き抜きたい場合は今アリサが言った引き抜き戦闘が行われるのだ。負けた者は引き抜きを余儀なくされる。実力主義の正義の城の常識の一つだ。（とは言っても引き抜きなどめったにないし、拒否するものもほとんどいないのだが）

「別に能力は使っていいぞ。負ける気は無いからな。そしてオマエが負けたら？」

ゆるぎない声でアリサは目を閉じて言う。

「なめてくれますね・・・しばらくは勧誘はしません。」
（しばらくは、ということは諦めはしないのか）
多少うんざりしながら、まぁそれでもいいかと仁矢は思い、告げる。
「いいだろう。いくぞ」
広さにして半径５００メートルほどの地下一階のトレーニングルームにつき、二人は構える。
「さあ来いアリサ。教えてやる。絶対に俺には勝てないってな」
言葉に全く反応せずアリサは考える。
（勝てる・・・彼の戦闘能力はその武器にある。大量の暗器を体に隠し、それを駆使して殺す。それが今は使えない・・・そして余裕を見せている今がチャンスですね）
「いきます！」
ゴォッ！
アリサがすさまじいスピードで走り仁矢との距離を一瞬でつめる。
そして右腕の拳を思い切り仁矢の腹へと突き刺す！
それを仁矢は後ろへ下がることで避ける。そして拳を叩きつけるのに失敗した反動でアリサは揺らぐ。
（今の速さをあんな簡単に避けるなんてっ・・！）
そしてアリサよりもすさまじい速さで仁矢は近づき、アリサの懐へともぐりこむ！

（まずいっ・・・！みぞおちを・・・！？）

狙いに気づいたアリサは反動でバランスがとれず避けることは不可能と判断し、両腕を体を守るために使う。その両腕に仁矢の重い拳が突き刺さり、反動で後ろへと押される。そしてアリサは距離を３０メートルほど開ける。

「ぐっ・・・！」

「情報部隊の隊長にしては勿体無いくらいの動きだな」

余裕の態度を崩さない仁矢に対してアリサは寒気を覚える。

（何なんですかこの人は・・・！あの無防備な体制で私の拳を避けた上に私に一撃を・・・！武器を使ったら一体どこまで・・・！）

そう寒気を覚えながらもアリサはもう一つのことを思う。

（流石は正義の城全体から見ても最強なだけはありますね・・・まぁだからこそ本部に欲しいのですが・・・ねっ！）

バリバリバリバリッ！！！！　とアリサから雷のようなものが吹き出る。それを見て仁矢は言った。

「なるほど・・・電力操作系か」

「ええ、私の能力は雷力（トゥルエノ）行使。最大出力はそうですね・・・・軽く１００億Ｖは超えると思います」

「そんな能力を俺に振るおうなどという気は無いよな？」

その問いに何を当たり前のことをとでもいいたげにアリサは言う。

「ええ。死なれてしまったら元も子もないですし、条件どおり気絶レベルで済ませます。本部に引き込むために」

そうか、と仁矢はつぶやき、挑発の言葉を発する。

「底力見せてみろ、本部隊長」

そうですか、とつぶやき、アリサは電気を発生させ仁矢へと狙う！！！

バチィィィッ！　音とともにその雷は仁矢に触れ、仁矢は気絶する。

ハズだったー

「なっ・・・！」

目の前の光景にアリサは信じられないといった様子で声をだす。

今起こったことは単純。まずはアリサの雷が仁矢に触れた。ここまではいい。問題なのはー

「何で・・・雷に触れて気絶をしない・・・！？いや、それよりも・・・」

そう、一番ありえないのはー

「何で私の発した電気を操れるっ・・・！？」

そう、アリサが飛ばした電気は仁矢に触れると、まるで仁矢が操ってるかのように仁矢の周りに消えずにうねり続けている。

その不可解な現象を起こした仁矢は特に表情も変えずに告げる。

「そうだよな、お前達からしたら不可解だよな。単なる瞬間再生(レヘネラシオン)しか持たない俺は電力を操るなんてな」

そう、仁矢の有する瞬間再生(レヘネラシオン)は心臓、脳以外の損傷なら一瞬で治せる便利な代物だが逆に言えばそれだけ。傷は回復は出来るが意識の回復はできないし、体力だって回復もしない。そして何より電気を操るなど不可能だ。だからこそアリサは理解ができない。

「一体どうやって・・・！本部の使徒記録書にはそんな記述は書いていなかった・・・！」

頭を悩ませるアリサ。その様子を見ながら仁矢はため息をつきながら言った。

「・・・アリサ、教えてやるよ少しだけな。瞬間再生(レヘネラシオン)なんてのはな」

？と訳が分からないという顔でアリサは仁矢に顔を向ける。そして仁矢は告げる。

「俺の能力の”一部”に過ぎない」

「まさか・・・！」

その言葉を理解したとたん、仁矢のまとっていた電気が消える。そして

ゴウッ！　という音と共に仁矢は駆け出す！さっきのスピードとは比べ物にならない速さで、３０メートルの距離を一瞬で詰める。そして握り締めた右拳を再びさっきと同じように今度は腹へと振るう！

「っ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！」

またしても避けられないと判断したアリサは攻撃を選択し、電撃を繰り出す。

しかし電撃は仁矢にダメージを与えるどころか、仁矢に少し触れただけで雷撃の軌道が大幅にずれ、見当違いの方へと飛んでいく。そして仁矢の拳がアリサの腹に届く！

瞬間、ドガッ！　という音がした。普通ならありえないが、仁矢の拳が当たったことでアリサの体が１００メートル以上吹っ飛ばされた。やがて部屋の壁に体を打ちつけ、意識を失う。

それを見届けた仁矢は自分の部屋へと帰るべく背を向ける。そして独り言のように言う。

「悪いが・・・引き抜かれる気はないんだ。愛理の為にも、な」

＊

正義の城日本支部近く、東京の街で男三人が中よさそうに歩きながら談笑していた。

一人一人が異様な雰囲気をかもしだしているが、気に留める者などいない。人は他人には冷たく、いかに雰囲気が怪しくても何も言わない人間が殆どだからだ。異様な雰囲気を持つ一人の男が口を開く。

「それにしても、本当にやるのか？俺達の目的は目立つことではないぞ？」

真剣みのある声の男はバナム・ステファニー。犯罪者である。真剣みのある口調とは裏腹に顔にはふざけた仮面と、その上服装は作業服だ。がたいがよく、慎重も１９０はあるだろうと推測される３０代前半の男だ。

そしてその声に賛同するようにもう一人の男が口を開く。

「僕はそーいうのは嫌いじゃないけど後でラスに怒られるのが少し怖いなあと思ってみたりするんだよね」

男の名は小谷亮。同じく犯罪者である。三人の中でも一番雰囲気は普通だが、やはり変だ。大人しい顔の２０代前半の黒髪好青年といった印象の男だが、なぜか服装はタキシードである。

そして小谷とバナムの言葉に反応するように三人の中でも最も異常な雰囲気を出す男は告げる。

「イヤイヤぁ、ノリ悪すぎやしませんかね？バナム＆小谷。べっつにイイだろォガ。殺すのはどんなやつでもよろしーらしィし、どうせ殺すなら邪魔な奴らでしょォオ。確かに後々ラスちゃんからのお叱りはこえーっぽいけどたまには怒られてもいいだろー」

服装は普通。ジーパンに、へそがすこし出るシャツ。しかし、異常な髪の長さ、狂気を孕んだ紫の目。歪んだ笑み。そしてふざけた規則性のない口調。

それが、犯罪者、ジエル＝グラストだ。

「え、ジエルってそっちのケあったんだ・・・！」

小谷はふざけて言う。それに対してジエルは激しく反応する。

「イヤイヤイヤイヤイヤイヤ！小谷待ってよ待ちなさいよコノ野郎！俺は別にＭとかそーいうんじゃアリマセンよ！」

そのやり取りを眺めながらバナムは呆れながら問う。

「やるなら早くしろ、ジエル」

その言葉でふざけた雰囲気を消すジエル。

「わーってるよ。んじゃ・・・ヤリマスカっと・・・・！！！」

ゴウッ！　という音と共にジエルから大量の炎が噴出される。周りを歩いていた歩行者が逃げ惑う。
そして辺りを焼き尽くし、次々と様々な建物に引火させていく。
その様子は正義の城にも見えているというのに。
いや、むしろ見せ付けているかのようなジエルは笑いながら発狂しながら叫ぶ

「さー来いよ正義の使徒共オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！ジエル＝グラストはココですよ
おオオオオオオオオオオオオオオオオオォ！！！」

叫びと共に悪夢は始まる。大量の炎と共に開戦を告げる。

第二章　援軍と始まりの炎（後書き）

えー…もしも読んでくれてる人がいたらありがとうございます
後で、キャラが分かりやすいように挿絵をいくつか追加します^^

第三章　それぞれの戦い

ビーーーーーーッ！
正義の城全体に取り付けてあるスピーカーから大きな音が鳴る。
榛原のあせったような声が響く。

『第七部隊隊長遠集のメルトより情報報告！正義の城付より、１ｋｍ離れた街、黒地丘市に大規模な火災発生！火災原因は放火！付近にジエル＝グラストと、小谷亮、そしてバナム・ステファニーと思われる者を確認！』

＊

「犯罪（クソ）者共が…なめているのか…わざわざ姿を見せるとは」
アリサとの戦闘後、４８階の自室に戻ってきた仁矢は軽く舌打ちをする。

「奇妙だよな…今まで隠れて３件ものビルを燃やしてきた奴がこんな派手に…」
部屋のベッドの近くのソファーに座りながら木戸は言った。部屋には水並もいる。二人は息抜きがてらに仁矢の自室へと来たらしい。
そして水並も口を開く。

「それより…いつ出動命令がくるんでしょうか？早くしないと…」
正義の使徒は基本、支部長の出動許可が下りないと仕事には出向けない。今はずっと待機の状態だ。

（遅い…！まだか…！）

仁矢は苛立つ。そこに――

『こちら神童のスカージ！遅れて悪かったな！敵の犯罪者はＡ級が三人！その内一人はＡ級の中でも最も危険な１０人のうちに入る！第一部隊、第二部隊、第三部隊は総出で当たれ！現在の人員は殆どが仕事に出払っていてお前達三部隊を合わせても計３０人しかいない！全力で当たれ！』

その言葉を合図に、正義の使徒達は動き始める。

「よしっ…！いくぞ！大河！水並！」

「はいっ！」

「おう！」

嵐のジード率いる第一部隊　現在人員３人

＊

４９階の第二部隊室。中はよくドラマで警察官達が会議をする場所のような作りになっており、一つに何人かが入れるような縦長の机が複数あり、その一番前にはブラックボードもある。

そこでは第二部隊の使徒たちが準備を整えて出発しようとしていた。

「さあ、私達も行くわよ…！」

第二部隊隊長甲ノ宮風歌率いる戦闘遠距離部隊。その内の一人が問いかける。

「配置はどうしますか？フィア隊長」

第二部隊副隊長、天草回(あまくさかい)だ。使徒名は模倣(もほう)のヌル。両目にバンダナをつけ目が見えていると疑問に思う風貌の２０代後半の色白の男だ。

「今回は配置に使える人数は殆どいない。適当な配置でいいでしょう。さぁ行くわよ！」

憤怒のフィア率いる第二部隊　現在人員７人

＊

同じく４９階の第三部隊室。作りはやはり殺風景で、第二部隊と変わらない。そこでは第三部隊達が集結していた。

隊長である九条豪は隣にいる少女に尋ねる。

「ロット。準備は？」

「はい、大丈夫ですね。私はもちろん他の使徒も準備は完了です」

彼女の名は楠舞(くすのきまい)。使徒名は静観のロット。第三部隊副隊長の２０代前半の女である。

「そうか、では行くぞ！我が第三部隊！犯罪者(てき)を確実に殺すぞ！」

冷戦のクレイ率いる第三部隊　現在人員２０人

＊

都会の雰囲気をかもしだす、昔の名前は忘れたが、今は黒地丘市(くろじおか)と呼ばれる１０ｋ？の街。

正義の城本部、そして神正学園も属する、約５０ｋ？ほどの面積を誇る都市の儀波山市(ぎなみやまし)の、隣町である。

正義の城は儀波山市と、黒地丘市の境界線の付近にあるため、黒地丘市、儀波山市のどちらもある程度見渡せる。

黒地丘市は、東京に属する割には、緑が豊かな都会の街だった。沢山のビルや店や人がいるものの、木が所々に生えている、不思議な感じのする街。

今日も、正義の城からは黒地丘市の、綺麗な街が見られるはずだった。しかし――
黒地丘市の十分の四は炎の海となっていた。近くの建物は焼かれ、沢山の緑も焼かれ、人は焼かれ、すべてが燃えている。全てが燃える世界。そこで佇む三人の犯罪者。その内の一人、小谷が口をあける。

「相変わらず派手な能力だねー。ていうかこれでもう目的の半分くらいは殺せたんじゃないかなって僕は思ってみたりするんだけど？」
その声にけだるげに反応するジエル。

「バカいってんじゃねーっすよ。今まで３００人殺せたとしても今のはたぶん１００人すら届いてねぇんジャネーカネェ。なんかやったらと逃げる反応早かったしねえ」

ジエルはそう答えると地面に寝そべる。その様を見てバナムは呆れたように言う。

「さっきのあのテンションはどこに行ったのだ…」
「いやぁだってさっきからずっと放火しまくってんのに誰一人来てくれねぇんですものぉ。そりゃあぁテンションも下がるぜバーカ」

まだ3分程度しかたってないがな、とバナムは思う。その時
ズガァンッ！　という音と共に銃弾がジエル達を狙うべく襲い掛かる。
そしてその一発を合図に大量の弾丸が次次と放たれる。
それを見たジエルは特に焦ることも無く、自分達を覆うように灼熱の炎を発生させた。
大量の銃弾がそれに触れた瞬間、銃弾は一つ残らず溶けていく。そ

れを見ながらジエルは笑みを広くしながら言った。

「炎ってのは温度によっちゃー燃える前に溶けちまうんだぜ。知らなかったヤツはお勉強しましょうネェ」

ジエルが言い終わった瞬間、ズガァンッ！　という音と共に複数の弾丸が一つの方向から放たれる。
また溶かされるダケでしょぉがバカ、とジエルは思い再び炎の膜で溶かすまで、と思ったがその判断は一瞬で変わった。
なぜならその弾は、普通の銃弾ではなく、エネルギーの塊で出来たような銃弾だったからだ。

（エネルギー砲・・・？あんなモン燃えんのかよ？）

なんとなく普通の炎では不安だと思ったジエルは炎の防御を展開させながら、広範囲の大量の炎をエネルギー砲全てを覆うように焼き尽くす。
ハズだったのだが、その複数の弾丸は触れた一部の炎を消すようにしてジエル達へと襲い掛かってくる！

「マジ…かよっ…！オい…！」

ジエルが言葉を放った瞬間、ジエル達の体を複数のエネルギー砲が打ち抜く！

＊

ジエルが焼き払った街周辺で生き残ったビルの屋上。ある企業のビルで、小、中ぐらいの企業なのか階数は２０階ほどだ。ビルの中は元々は人がもちろんいたのだが、ジエル達が出現したので、世界では一般とされる正義の城での避難命令の合図の特殊な閃光弾丸を空に向けて撃ったので、住民は全員遠くに避難しているため今はもの

けの空だ。ジエル達と約３００m以上は離れているそこに第二部隊隊長、憤怒のフィアの名を持つ甲ノ宮風歌はいた。

「あっさりしすぎね…」

第二部隊の今いる人員たちを各ポイントに配置し銃弾襲撃戦法を行った甲ノ宮だったが、予想通りジエル達にはきかず、効く可能性のある自分の能力を使った訳なのだが、簡単に死んでしまったので拍子抜けをしているのだった。

甲ノ宮の能力は本部から付けられた名称では”感情装填（センティメント）”と言う。能力自体不思議なものはあるが、甲ノ宮の能力はその中でもかなり不思議な能力だろう。

”感情”に応じて効果が変わる”エネルギー”を噴出することが出来るのだから。

さっきのジエル達に向けての弾丸は”殺意”であり、殺意の弾丸は殺意を向けた人物、その人物と直接関係するものを破壊する。

だからジエルの生み出した炎は触れた部分を破壊されたのだ。ジエルの操る炎だったのだから破壊される理由としては十分だ。

とは言ってもジエル達に関係しない地面などには何の効果も破壊力も無い弾丸となってしまうのも欠点ではあるが。

甲ノ宮は少し右腕にある銃をいじると独り言の様に呟く。

「さて、と。まさか私達第二部隊だけで終わるなんてね…。待機していた第一部隊と第三部隊達の出番はなかったわね。さて、さっさと支部長に連絡ーー」

「一体何の連絡をするつもりなのだ？」

瞬間、声が背後から聞こえ、甲ノ宮はすばやく下がる。

屋上の扉の手前。そこにいたのは、殺したハズのバナム・ステファ

ニーだった。

「何で生きてんのよっ…！？」

甲ノ宮は驚きと殺意に満ちた目で問う。その問いに一秒もかからない速さでバナムは答える。

「ジエルは炎を使い、目測を狂わすことも、蜃気楼を作ることも出来る。思い出してみろ。お前達はジエルを以前逃がした。そのとき何故逃げられた？」

その答えに甲ノ宮は理解すると、忌々しげに呟く。

「さっきまでのアンタ達は…全部蜃気楼だったってワケね…！」

「そうだな。正確には途中からだが。ちなみに炎は蜃気楼ではないぞ。ジエルは座標さえ分かれば見えないところにでも炎を発生させられるらしいからな。もちろん蜃気楼もだ」

いらない情報を喋るバナム。その態度からも余裕が見られる。そして何故蜃気楼を長時間使ったのかを甲ノ宮は考え、答えを出す。

「なるほどね…。私らがあの蜃気楼と遊んでるうちにあんたらは私達の場所を捜索してたって訳ね」

その一言に、バナムは頷く。そして雰囲気を一瞬で変えた。それは犯罪者の狂気の雰囲気だった。

「さぁ死ね、正義の使徒。俺達の”プラン”の礎となれ」

その言葉に甲ノ宮も戦闘準備を整え言葉を放つ。

「正義の使徒なんて名前じゃないわ。本名は犯罪者に名乗る必要はない。名乗っておくわ犯罪者（クズ）。憤怒のフィアよ」

その言葉を合図に甲ノ宮が銃を放つ。心の中で一つの疑問を思いながら。

（プラン…？）

＊

ガキィンッ！！！

音が響く。音が響いた場所はジエルの蜃気楼が作られた所から５００ｍほど離れた、東京には珍しい一つの空き地である。空き地といっても元はどこかの会社が潰れた後、何も作る予定がなかったので、そのまま放置してあるだけなのだが。

ずいぶん放置していたのか、地面には草が沢山生えており、半径１００ｍ程の空き地の一部には足を覆うほどの草もある。空き地の外の周りにはいくつかの建物がある。

そしてその空き地で、第三部隊隊長、九条豪率いる第三部隊と、小谷亮は激突していた。さっきの音は小谷の持つ、ナイフと九条の拳がぶつかった音だった。二人は距離を一旦５ｍほどとる。

愉快そうな顔で小谷は言う。

「んん…拳でナイフとやり合うとか、正義の使徒ってのは随分と無茶苦茶なんだねって僕は思ってみたりするんだけど」

「…貴様に言われたくはないな、犯罪者。俺とやり合っている間に１８人もの人間を潰す貴様にはな…！」

そう、今立っているのは三人だけ。

一人は九条、そして二人目は副隊長の楠。そして小谷。

近距離での殺しを得意とする能力者などが主な第三部隊。まともに近距離で戦ったら右に出るものなどいない第三部隊だった。一斉に

攻撃を仕掛け、様々な能力と体術を駆使した隊員達。しかし小谷はそれらを軽くあしらい、九条と戦いながら、あろうことか近距離戦で彼らをナイフで斬りつけ蹴散らせた。隊員達は死んではいないが、ナイフに体が麻痺をする薬でも塗っていたのか隊員達は意識はあるが、全く動けず死亡寸前の蝉のように地面に這い蹲っている。
その様を見て九条は怒りを必死に押し込め、殺意に満ちた目で小谷に問いかける。

「それにしても犯罪者（クズ）にしては甘いな？麻痺状態にするだけで殺しはしないとはな。無論殺したら貴様は殺すだけでは済まさないが」

その、並の犯罪者ならすくむレベルの気迫に、小谷は特にすくみもせずマイペースに答える。

「まー普通なら殺すんだけどね。流石にキミとやり合いながら確実に殺すのはキツイんだよ。それなら動けなくしといて後で殺したほうが楽とも思ってみたりもしたし。毒は即効性のじゃないと無駄に暴れられて面倒くさいし」
「…犯罪者だけあってよく考えているな…。だが」

そこで言葉を区切る九条。そして九条に近づく楠。そしてその右拳を振り上げると空き地の地面に勢い良く振る！
ゴバァッ！　という音と共に九条と楠のいる場所以外の周りの地面がめくれあがり、周囲に生えていた地面の大量の草が勢い良く抜けて飛んでいく。

「…ぐっ！？」

めくれあがった地面から大量の砂や泥が出てきて、小谷の視界を一時的に潰す。そしてそれを九条は見逃さない。途中に吹き飛ぶ草や

砂などを上手く掻き分けながら５ｍ程の距離を一気に走る！
そして小谷の喉を狙うべく、右腕の拳を勢い良く振る！
それを辛うじて右手に持っていたナイフで防ぐ。ナイフから拳の反動と衝撃が回り、小谷は少しぐらつく。
それを見逃さず、九条はすかさず空いている左拳で腹を殴る！

「がぁ…っ！？」
バランスがとれず、そのまま吹き飛ばされ、地面に投げ出される小谷。信じられないことに、九条の拳が強すぎたあまり、１０ｍは吹っ飛んでいく。
大量の吹き荒れた砂や草がようやく収まる。
そして九条は言葉の続きを紡ぐべく言葉を放つ。

「いくら策を張り巡らせても貴様は殺される。そこだけは理解しておけ犯罪者」

その言葉に反応するかの様に、殴られ、１０ｍも吹き飛ばされたにもかかわらず、ダメージをあまり負っていないような顔で小谷はゆっくりと立ち上がる。タキシードや髪についた泥を払ってから不機嫌そうな顔で小谷は言う。

「痛いなぁ…。でも流石は第三部隊隊長。強いね。こりゃーそろそろキミも本気になってきちゃったのかなって思ってみたりするんだけど？」
「そうだな、そろそろ本気で殺す。この冷戦のクレイの名に掛けて」

言うと、九条は小谷の元へと駆け出す。殺すために。
そして小谷も駆け出し、九条の元へと駆け出す。殺すために。
ガキィンッ！という音と共に再び二人は激突する。

＊

十分の四が灼熱の炎に包まれた黒地丘市。
最初に、全てを燃やし、そして蜃気楼を発生させ、正義の使徒達を混乱させた場所、そこにジエル＝グラストは再び存在していた。
燃える街の中、火で焼け落ちた大木に座るジエル。誰に言うでもなく、独り言の様に彼は呟く。

「…これでいいんだよな…」

普段のふざけた口調とは違い、その言葉には規則性があった。あるいは、それが彼の本来の口調なのか。
そしてどこと無く哀しそうな顔つきだった。犯罪者とは思えないほどに。そこに――
感慨にふけっているジエルの思考を中断するように、シュバッ！という音が後ろから聞こえてくる。
ジエルは後ろも見ずに、炎の膜を自分の後ろに展開する。
飛んできた、およそ３０本以上はあるだろうナイフが次々とジエルの炎に触れ、一瞬で溶けて、燃えていく。
ナイフを飛ばした本人を確かめるため、ジエルは立ち上がり、首だけを後ろに少し向ける。
１０ｍ程はなれたそこには、正義の城第一部隊隊長、火向仁矢と副隊長、木戸大河がいた。
彼ら二人は殺意の瞳をジエルに向けていた。その瞳に何を思ったか、口を歪ませると、ジエルは言葉を放つ。いつも通りの、不規則なふざけた口調で。

「オオイ、そんな目を１８歳ぐらいの男の子がするもんじゃぁありませんよ？将来目がおかしくなっちゃうぞって思うぐれぇ怖い目ーしちゃってマア」
「最初も思ったが相変わらずふざけているな、ジエル＝グラスト。今から殺されるというのに流石は犯罪者。頭がイッてやがる」

ふざけた口調のジエルにイライラするように言う仁矢。そのイライラを見て更に挑発するかのようにジエルはふざけた口調で言う。

「エ？殺されんのですかい？やっべーそれは予想してませんデシタよ。てか頭イッてるとかひっどいなぁもうー。そんな事言われたら――」

言葉を区切るジエル。
そして顔面全てを歪ませ、狂ったような顔で言い放つ。

「ムカついちまうだろーがよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

その瞬間、ゴォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！　という音と共に半径５０ｍにも及ぶ炎が仁矢と大河の周りに出現し、迫ってくる！
「っ！シュードラァ！」
「わかってるっ！」

木戸は仁矢の叫びに反応すると、己の目をジエルが放った炎の、約１００ｃｍの”一部分”に集中する。
そして正義の城のズボンの右ポケットに手をいれ、すばやく水の入ったペットボトルを取り出す。
そして木戸は能力を使う条件を整える為、脳を回転させる。
（幻想起動（ファンタシア）！。幻想内容を選択、幻想内容は”少量の水で１００ｃｍ程の炎を消す”。幻想起動条件に”水”を選択！）
能力発動条件を整え、木戸が水を炎の一部分にかけると、１００ｃｍ程の炎が消える。

その消えた場所を突き進むようにして仁矢と木戸は１０m先のジエルに向かって走る。その様子にわずかに驚くジエル。
しかし、すぐに笑みを取り戻し、楽しそうにジエルは言う。

「オンモシロォ！そんな水で俺の炎を消すなんてよォオォ？！もう一度見せてくれよほらほら？！」

大量の炎と挑発を自分に向かって走ってくる仁矢たちに向ける。
そして走りながら仁矢は言う。

「…ふざけやがって…！調子に乗ってんじゃねぇぞ犯罪者！そんな炎なんざ…テメエごとまとめて消してやる！」

全ての戦いは始まる。
ほんの序章に過ぎない、戦いが――

第三章　それぞれの戦い（後書き）

えー…もしも読んでくれてる人がいたらありがとうございます
後で、キャラが分かりやすいように挿絵をいくつか追加します^^

第四章　十人の害悪者（ディエス・ディアブロス）（前書き）

ジエル、小谷、そしてバナムと交戦する正義の使徒達。
バナムと交戦する甲ノ宮率いる第二部隊。
交戦するバナムから衝撃の話が語られる。
そして甲ノ宮、彼女の過去の片鱗も……

第四章　十人の害悪者（ディエス・ディアブロス）

ズガァンッ！！
ビルの屋上にて、甲ノ宮が銃弾を作業服姿に、仮面といった格好の犯罪者バナム＝ステファニーに向けて放つ。
その弾丸にこめられた感情は”殺意”。バナム＝ステファニーの関連する全てを破壊する、銃の中で圧縮された、普通の銃弾と同サイズのエネルギーの塊だ。
そのままもろに当たれば、その時点でバナムの死は遅かれ早かれ確定する。
それなのに――

「エネルギーの塊……。そして弾切れなしか……。全く、派手な能力だ。それに当たれば一発で致命傷とはな」

バナムは、避けるそぶりも特に見せずそこから動かない。
銃弾がバナムの心臓にそのまま一直線に進む。
しかし、それでも動かない。そして銃弾はバナムの緑色の作業服の胸の部分までたどり着く。
その一撃は一瞬でバナムの胸を突き破り、殺すはずだった。
それなのに――
シュパァンッ！　という音と共に銃弾はバナムの胸に触れた瞬間、唐突に力を失い、消える。

「？！何故っ……！？」

その事実を信じられず、甲ノ宮はもう一度、銃弾を放つ。今度は一発ではなく、数百発を。
しかしやはり、銃弾は先程と同じように音を立てて、全てが力を失

い、消える。
それを見たバナムは、がっかりしているようでいて、敵を楽に殺せそうなことに嬉しそうにしているような声で甲ノ宮に向かって言う。
「どうした？そんな弾だけで俺を殺せるとは思っていないだろう？まだ俺とお前の殺し合いは序盤だ、さっさと他の手を使ったらどうだ」
甲ノ宮は焦る。
なぜなら甲ノ宮は今まで、全ての犯罪者を純粋な”殺意”の弾丸で殺してきた。犯罪者に向ける感情など甲ノ宮にとってはそれぐらいしかないのだから。いや、恐らく正義の使徒なら誰もがそういう感情しかないだろう。
しかし、ここにきてなぜか初めて”殺意”の弾丸が効かない。それはつまり。
（奴（バナム）に攻撃する手段がない……！）
そんな甲ノ宮の心中を察したのか、バナムは、呆れたような口調で言う。
「……序盤だというのにもう手がないというのか。日本支部の第二部隊隊長は随分と甘いな」
甲ノ宮はそんな中でも考える。何故、銃弾が効かないのか、どうすれば効くのか。そう考えていると——
バタァンッ！　という音と共に、バナムの少し後ろの屋上の扉が開く。扉の先には、第二部隊の副隊長、模倣のヌル、そして天草回とも言う男が引き連れる第二部隊がいた。

「遅くなりました、フィア隊長！」

言葉と同時に、扉の中から、ズガガガガガァンッ！　という音が響き、大量の銃弾がバナムめがけて発射される。

「ようやく来たのねっ……！遅いわよ！」

「……第二部隊の使徒達か……」

呟くバナム。その瞬間、銃弾全てがバナムの体に当たり、バナムの体が穴だらけになる。しかし――

ズズズ、という音と共に、穴が出来た箇所全てが、元から穴などなかったかのように元通りに再生していく。

その様子を見て、甲ノ宮は訳が分からなくなる。

（何……！？火向の奴の瞬間再生（レヘネラシオン）と同種の能力……！？けれど、さっきは再生どころか、銃弾が効かなかった！やはり能力！？）

考える甲ノ宮。そこにバナムが声を放つ。

「人数が増えてしまったか、厄介だな。相当に早いが仕方ない。そろそろ終わりにしてしまうか」

そうバナムが言った瞬間、異変が起きる。

「ぐぁっ！」

扉から出て、扉付近を固めている屋上の扉の付近にいた使徒の一人が倒れた。使徒名をオリグルと言う青年だ。（使徒名の、～の、という使徒名が貰えるのは隊長格のみ）それを見て、天草はすぐに使

徒の下に駆け寄る。

「大丈夫か！一体何が……ッ！？」

良く見ると、使徒の背中から血が吹き出ている。何も刺さってもいないし、撃ち込まれてもいないのに、だ。その痛みに耐えかねて、オリグルは屋上のアスファルトに気絶し、倒れる。
オリグルが倒れた瞬間、天草は素早く他の使徒に指示を飛ばす。

「リールッ！急いで第四部隊に連絡をしろ！オリグルが危ない！」

リールと呼ばれた中年の域に差し掛かりそうな体格のいい男は、すぐさま、ポケットの無線を取り出し、連絡を取ろうとする――

「余計な援軍を呼ぶ事は許さん」

その瞬間、扉の正面に配置されていたリールの体が急に後ろに吹き飛び、屋上の扉の中、つまり階段の中へと吹き飛ばされたリールは階段を転げ周り、階段の中間のフロアの壁に勢い良くぶち当たる。
その強すぎる衝撃を受けて、リールの意識が途絶えた。

「ッ……！ウーラは連絡を！クリペイド、アルゴは攻撃態勢を！」

他の使徒に素早く支持をした天草。しかし、その支持に反応するものは一人もいなかった。
ウーラと呼ばれた使徒は、いきなり、体が一回転し、屋上のアスファルトに頭から落ち、気絶。
クリペイドと呼ばれた使徒は、オリグルとは反対に、体の正面からいきなり血が出血し、倒れる。
アルゴと呼ばれた使徒は、いきなり、何かの薬でも打たれたかのよ

うに昏倒する。
残ったものは、甲ノ宮、天草。そして一歩も動いていないバナムのみ。

「嘘……でしょ……！？」

驚愕する甲ノ宮。甲ノ宮は今までA級の犯罪者と戦った事は何度かある。それら全ては多少は苦労したものの、殺せた。
しかし、このバナム・ステファニーは違う。苦労とか、そういう前に殺すための糸口すら見つからない。A級の中でも特に危険性の高い”十害”の一人ですらないのに、明らかに今までのA級とは犯罪者としての危険性が違う。

（アノマーリアのヤツはどんだけ最悪な奴らを集めてんのよ……！）
「さて、次はお前たち二人だ。俺達のプランの為に死ね」

また、『計画（プラン）』。甲ノ宮はその言葉の意味を確認するため、そして時間稼ぎの意味も含めてバナムに問う。

「さっきから『計画（プラン）』と言ってるけど何なのよそれは？新手の大規模犯罪でもするつもり？」
「大規模犯罪……か。大規模は合っているが、言うならば大規模革命と言ったところか。まぁそれでも違うかもしれないが……」

バナムは時間稼ぎだと気づいているのか気づいていないのか、甲ノ宮の問いに答える。
そのはっきりしない答えを聞きながらも、甲ノ宮の頭は、バナムを殺すために、バナムの能力を解明しようと頭をフル回転させていた。
そうしながらも『計画（プラン）』の内容を探るべく、バナムに再び問う。

「ハッキリ答えなさい。アンタらの目的は何？『計画（プラン）』とは何？」

その問いに、しばらく考えるような素振りを見せた後、バナムは告げる。

「そうだな、『計画（プラン）』の内容は言っても理解はできないだろうし言う意味も無い。ただ一ついえるのは――」

その言葉の続きに、信じられない言葉が紡がれる。

「その『計画（プラン）』の『過程（プロセス）』で俺達は最低１０万の人間を殺す、と言うことだ」

「――――――――――――――」

甲ノ宮は絶句する。扉付近にいた天草もだ。

（最低で１０万……！マズイ！こいつらなら、あのアノマーリアが集めた集団なら……本当にそれを成し遂げてしまう……！）

その様子を見ながら、甲ノ宮にバナムは続けて告げる。

「ちなみに……俺達の中には、お前の良く知っている『アイラー』も含まれている」

「ッ！！！」

ある一人の『犯罪者』の名前で、甲ノ宮風歌の顔色が変わる。その表情は、今までで、一番おぞましい殺意で塗りつぶされていた。

「…『アイラー』ですって……？」

甲ノ宮の銃を握る力が強くなる。
その様子を見て、その甲ノ宮にとっての『アイラー』の意味を知っている天草は驚愕する。

（ジエルにそしてアイラーだと！？『十害（ディエロス）』の犯罪者が二人も…ッ！不味い…、アノマが他の『十害（ディエロス）』の犯罪者とも手を組んでいたら…世界に壊滅的な被害が起こる！）

『十害（ディエロス）』とは、危険性の高い現時点で約３０人ほどいるＡ級の中でも、『更に危険性の高い十人の犯罪者』のことである。
Ａ級の犯罪者とは、『国一つを潰せると思われるレベル』だ。しかし、これはあくまで最悪の話の場合である。
実際に正義の城の実力者の使徒を何人か動員すればその最悪は防げる。現に今までの普通のＡ級の犯罪者の何人かは国一つを潰すテロを実行しようとしたが、その国の正義の城の対応によって防がれ、迅速に殺された者も何人かいる。
しかし、『十害（ディエロス）』は違う。この十人は、『国一つを潰すレベル』だ。
推測ではなく、確定。
現に、その十人は、この広い世界の国を一人一つは潰したことがある。
正義の城が配置されている国もだ。
一人で国一つを潰す犯罪者。世界に大きすぎる害を与える様を見て、ある者は言った。

『十人の害悪者（ディエス・ディアブロス）』

通称、『十害（ディエロス）』

Ｓ級の犯罪者には届かない危険性でありながら、Ｓ級にいずれなり

得るかもしれない程の害を与える十人。
ジエル＝グラストもその内の一人。
そして、アイラー・ステニバス。その男も『十害（ディエロス）』の一人。
『十害（ディエロス）』の二人が、手を組んでいるという事実。そして他の『十害（ディエロス）』も手を組んでいるという可能性。そしてそれを率いる世界最悪の犯罪者、『異常（アノマーリア）』。
これらが終結しているとなると、世界が歪むかもしれない。
しかし。

「……丁度いいわ……」

甲ノ宮はその事実を理解しながらも、あることしか考えていなかった。
アイラー・ステニバス。
正義の城にいる理由を作った男のことを。
自分の正義の最終目標となる男のことを。
自分の世界を壊した男のことを。

「アンタの全てを追い詰めて、壊して、吐かせてやるッ！アタシの全てを奪い、姉さんを奪ったクソ野郎の事を、全部吐かせてやる！！！」

そして、自分の唯一の家族の姉を奪った男のことを。

「……威勢がいいのはいいが、俺の能力を見破る事すら出来ないオマエに俺を追い詰め、アイラーの事を吐かせられるとは思わないのだが」

吠えた甲ノ宮を馬鹿にするようにバナムは言い放つ。
甲ノ宮は殺意と憎しみに満ちた目をしながらも、いくらか冷静な口

調で答える。

「能力……？ハッ、そんなモン関係ない。アンタの能力なんざいくらかもう推測は出来てるわ」

「……本当だったら多少困るのだが、試させてもらってもいいな？」

「ええ、きなさい犯罪者。仕切りなおしよ」

ズガァンッ！！！

中断された戦いは再び始まる。

最初と同じく、一発の銃弾で――

第四章　十人の害悪者（ディエス・ディアブロス）（後書き）

いずれ挿絵をはさむかもしれません

第五章　逆転、明かされていく計画（プラン）（前書き）

甲ノ宮の逆転劇が始まり、そして計画（プラン）の内容が少しずつ、しかし確実に明かされていく……

第五章　逆転、明かされていく計画（プラン）

「ハァッ！」

ズガン、ズガガガンッ！
甲ノ宮の銃弾がバナムへと放たれる！

「……無駄な掛け声に、無駄な銃弾。こんなもので俺の能力がわかったなど、良く吠えられたものだ」

その銃弾全てを、気にも留めず、バナムは甲ノ宮に向かってゆっくりと歩き出す。
銃弾は全て、バナムに当たった瞬間消えて無くなる。
それを見て、更に甲ノ宮は推測していく。

（簡単な話だわ……！奴の今までの犯罪は全て、被害者の精神を壊す、というもの。つまり、脳になんらかの能力を使っている可能性が高い……！それも脳にかなりのダメージを与える能力……！）

思考する甲ノ宮。その間にも、バナムは正面から歩いてくる。屋上の広さは約２０ｍといった広さ。
距離は後１０ｍ

（そして、ジエル＝グラスト達が蜃気楼だったと分かったとき、不自然だった点があった。蜃気楼で場所をごまかすのは可能だと思う。けど……！）

距離は後７ｍ

（あの時、”何で奴らの声が、蜃気楼しかなかったあの場所から聞こえた？”そして、部下達への攻撃、何もないように見えるところからいきなり噴出した血、それらが意味するのは――）

「……ッ！？何を…ッ！」

瞬間、甲ノ宮が銃口を自分の目に向け、バナムは初めて驚いた顔をする。

（バナム＝ステファニーが有する能力は、視覚と聴覚の操作！バナム＝ステファニーという存在を視認している間は、アタシ達の視覚情報と、聴覚情報は奴の思うまま！）

ズガァンッ！　という音が響く。甲ノ宮が自分の目に目掛けて銃を発砲したのだ。

しかし、甲ノ宮は倒れない、ましてや血一つも流れてはいない。

「まさか、本当に分かったと言うのか……ッ！？俺の能力が……ッ！」

その瞬間、甲ノ宮の正面から近づいてきているバナムの姿が、消え、バナムの姿が甲ノ宮の真正面にへと出現する。

「やっと見つけたわよ……この道化師が」

「……ッ！この――」

何かを言いかけるバナム。しかしその言葉は続かなかった。甲ノ宮が『殺意』の銃弾を放ち、バナムへと撃ち、バナムの体が後ろへと飛ばされたからだ。

心臓を狙うつもりが、とっさに回避したのか、心臓ではなく左腕に銃の穴ができており、そこから血が流れている。

普通の銃弾と同サイズではあるが、『殺意』の弾丸ということもあり、バナムの左腕はそれだけでもう指一つ動かせそうになかった。苦しみながら、バナムは甲ノ宮に問う。

「何故……？」

「簡単よ、アンタの能力はそうね……本部の国の言葉を借りるなら精神乱しとでもしておきましょうか。アンタの能力は、”バナム＝ステファニーを視認している者の視覚情報、聴覚情報を狂わせる”。アンタを視界に収めている間は、視界、聴覚がアンタの意のままってところでしょう？なら簡単、アタシの『殺意』の弾丸を、アタシ自身の目に撃って、アンタの能力を殺せばいい」

「被害者が精神を壊す理屈も大体は理解できたわ、そりゃぁまともな一般人なら少しエグい映像を見せれば、頭は壊れるわよね。アタシの使徒達がいきなりふっとんだり出血したのも、アンタが視覚情報を操作して、自分の幻覚を遠いところに置いたまま、アンタ自身は近づいて、殴ったりナイフでも使ったんでしょ？ほら」

甲ノ宮が扉の付近を指差す。

そこには、謎の出血をした使徒、オリグルとクリペイドが横たわっていた。

しかし、今の甲ノ宮には見えていた。二人の血が出ている箇所からはナイフが突き刺さっていた。

戦闘の隙に何かをし終えた天草は甲ノ宮に声をかける。

「フィア隊長！第四部隊に連絡しました！」

「よし、これでもう心配する必要はないわね、ご苦労、ヌル。さて……」

ズガガンッ！

甲ノ宮が『殺意』の弾丸を地面から立ち上がろうとしているバナム

の右腕、右足、左足に撃ちつける。

「がぁッ……！」

それだけでバナムは地面に倒れる、もはや勝負はついた。

「さぁ教えなさい……！アンタ達は一体何をするつもり？アイラーも加担しているというの？」

その問いに少し間を置き、バナムは語る。

「いいだろう、どうせ死ぬのだ、多少は話してもいいだろう。……50年前の7月15日の光を知っているか？」

自分が死ぬとなったら情報などすぐ漏らす、ここらへんはやっぱり犯罪者（クズ）ね、と思いながら甲ノ宮はこれからの会話を録音するよう天草に命令する。そしてバナムの問いに答える。

「50年前……7月15日、『進化の日（アバンサール・ディーア）』の……『神の光（ディオース・ルス）』のことかしら？」

世界から人口の十分の一の超能力者が出現した日、それが『進化の日（アバンサール・ディーア）』。

そしてそれを誘発したと思われる、世界全てを包み込んだ謎の光。

ある宗教団体が付けた名前だと、『神の光（ディオース・ルス）』と言うらしい。

その単語を聞き、バナムは笑う。仮面を付けているのでわからないが、恐らくその表情は笑っているのだろう。

「『進化の日（アバンサール・ディーア）』、か。いつも思うが本当に的を射た名前だ。ハハハ

……」
「どういうことよ？説明しなさい、バナム＝ステファニー」
バナムは笑う。
「なに、５０年前の光はそう、名前のとおり、神が起こした光だ、この世界に神はいる」
衝撃の一言を放つバナム。
その言葉に甲ノ宮は否定する。
「！？馬鹿な事を……。神などがいたらアンタ達みたいな犯罪者は生まれないわ。さっさと目的とアイラーについて教えなさい……！」
「神とは人を救う存在ではない、神は人を導くだけの存在だ。信じないのも分かるが、俺達は、神をこの世界に出現させる、そしてその先に俺達が望むものがある。そのために俺達は１０万人を殺す。それにアイラーも賛同している。それだけだ」
冗談で言っているような雰囲気ではない事に甲ノ宮は訳が分からなくなる。
（いくらあのアノマでもそんな馬鹿な理由で１０万を殺そうとしているわけがない、奴は自分の利益になる事しかしない、ならば……本当だというの？）
「……そう、ならその神を生み出す事と、１０万の人間を殺す事は一体どう関係しているの？そして本当だとしたら何故アイラーはそんな馬鹿げた事に付き合っている？」
バナムの言っている事を一旦真実とし、再び問う甲ノ宮。
しかし――

「悪いな第二部隊隊長。これ以上はもう喋らん、もう喋る体力もない……しな。死ぬときはそっとしておいてくれ」

その態度にいらつき、甲ノ宮は銃口をバナムへと向ける。

「随分ナメた態度ね……。いいわ……別にアンタが死んでも脳さえ残ってればメルトの能力でアンタ達の言う、『計画（プラン）』なんて全部分かる。死ね」

脳を傷つけずに殺すため、倒れているバナムの背中、心臓に位置するところに銃弾を放とうとする甲ノ宮。しかし――

ゴォォッ！！！　という音と共に、バナムの周りから大量の炎が出現する！

「なっ……！これは…ジエル＝グラストのっ！？」

扉付近で他の使徒達の応急処置をしていた天草が言う。

炎は拡大していき、その中心となるバナムの声が聞こえてくる。

その体の半分には火が燃え移っており、仮面も燃えており素顔がさらされていた。

じきに全てを燃やすだろうと予想された。

「撃たれる前ジエルに俺の場所周辺の座標を教えておいた、情報はもうこれ以上は漏らさん……。俺の体全てと共に、燃えろ……！第二部隊ッ……！」

炎が広がっていき、あっというまにバナムの体が燃えていく。そしてそれでもまだ消えない炎は扉付近にいる天草と負傷した使徒達、そして扉より何メートルか離れた甲ノ宮に襲い掛かる！

「クソッ！」

天草は逃げようとするが、気づく。途中から入ってきた天草たちは屋上の扉付近にいるためすぐに屋上の扉から下に駆け下りて逃げる事ができるが、甲ノ宮は対峙していたバナムの付近にいたため屋上全体に急激に発生する炎を回避する事ができない！

「くっ……そぉおおおおおおおおおおおおおおおお！！！フィア隊長ォォォォォォ！！！」

叫ぶ天草。
炎は甲ノ宮へと迫る。
そして——

少し遠くで、炎の爆発のようなものが起こっているのに小谷は目を向ける。

「あの炎は……！バナム……」

空き地で小谷亮と九条が戦い、それをずっと見る楠。小谷と九条が拳とナイフで攻防する中、小谷が口を開き、少しの隙が出来る。

「ハァ！」
「おっと……！」

すかさず九条は右拳を腹に突き出すが、それを小谷はなんなく避けて、後ろへとバックしていく。
そこで一旦動きを止め、複雑そうな表情で告げる。

「……こっち側にとっては残念だけど、君等には嬉しい情報が入ったよ、バナムが死んだ。まぁ自爆ってカンジだけどね」
「自爆……！まさか！」
「ああ、そうだね。憤怒のフィアって娘も死んだのかな多分？まぁ他の使徒達は無事だとは思うけど」
「……！貴様ッ……！」

その言葉で怒りが増幅する九条。そしてその様子を見ながら更に挑発するように言う。

「さっさと行かなくてもい～のかな？早く行かないとジエルの炎だと骨すら残してくれないと僕は思ってみたりするんだけど？同僚の骨は拾っておきたいでしょ？」
「言われなくてもそうする……！貴様を殺してからな！」
「全く、君が能力今まで出しあぐねてたから、同僚が死んじゃったのであって僕のせいではないとは思うんだけどね」

距離をつめるべく九条は飛び掛る。
そして目の前の犯罪者を殺す事への宣言のように、自らの能力名を叫ぶ。

「規制解除（レグラシオン）！！！」

第六章　人間を超える者（前書き）

『規制解除（レグラシオン）』、その能力は一体？

第六章　人間を超える者

九条は小谷に飛び掛り、右拳を思いきり振る！！！

「！」

いきなり身体能力が上がった九条に少し驚くも、すぐに横によける。
九条の拳が何も無い場所に振られる。
ズォッ！！　という音が、なる。九条の拳が早すぎて、威力が強すぎたため拳を振った周辺に風が起きたのだ。
その様子を見ながら、小谷は更に距離をとる。

（レグラシオン……か。正義の使徒は能力名は全員スペイン語ってラスが言ってたけど、どんな能力かよくわからないなぁ。ラスと違って僕は純粋な日本人だし。まぁ見た感じ身体能力はやばそーとは思ってみたりしたけど）

「ハァッ！！！」

再び九条が走り、小谷のもとへ走る。ただし、その速さは異常だった。

（ッッッ！！！え？嘘でしょ、ねぇ！？人間ってこんな速度で走ったら足がもたないんじゃないの！？）

そして近づき、小谷の腹に拳を突き出す。

「まずっ……！」

瞬間、ドシャァッという音が響く。九条の拳を小谷はナイフで防御

はしたが、それでも抑えきれず、地面に九条は投げ出されたのだ。

「……？」

それを見て九条は顔にこそ出さないが、内心かなりの疑問が頭の中に出来る。

九条の能力は、『規制解除（レグラシオン）』と言う。

能力内容は、そのまま、”自らの人体にかかっている規制を解除する”というもの。

人間は、どれだけ鍛えてもある一定の所からは一向に身体能力が伸びなくなる。

それはなぜか？それは何年か前明かされた科学理論、そしてこの能力を持つ九条から言わせれば、単純な事だ。

それは能力をいくら上げても、その身体能力を発揮するには、人間の肉体では全く足りないからだ。

もっとも人間の限界の身体能力まで上り詰めたものは殆どいないのだが。

能力は実際に鍛えれば鍛えるほど強くはなっている。しかし、その身体能力は人間の肉体では再現できない。つまり、人間の肉体にはある一定の上限までしか身体能力は扱えないのだ。

いくら身体能力があっても使える身体能力に限りがあっては意味が無い。

しかし、その法則（ルール）を九条の『規制解除（グラシオン）』は壊す。

自らの肉体が扱える身体能力の上限の規制を解除するのだ。

そして日々鍛えてきた肉体、人間の限界を超え、蓄えた身体能力。

それらは既に人間を超える速さ、力、回復能力などを九条は持つ。

だからこそ、九条は納得ができない――

「何故だ…？何故俺の拳を受けて貴様のナイフは傷一つつかない！？」

そう、『規制解除(レグラシオン)』使っているときの九条の拳は、一発でたいていの物は簡単に壊す力を持つ。先程、九条が小谷に向けてはなった拳も例外ではない。それなのに、小谷のナイフには傷一つつかない。投げ出された体を起こす小谷。本日二度目の投げ飛ばしを食らった事もあってタキシードは汚れに汚れている。

「んー。よくもーちょい考えてみなよお馬鹿って思ってみたりするんだけど。簡単な話さ、単純に僕の能力を使っただけ」

「俺の拳を受けて壊れないナイフを作るなど、一体どんな能力だ……！」

そこに今までずっと見ていた楠が少し離れた場所から九条に呼びかける。

「クレイ隊長！もしかしたらそいつの能力は物質の硬さを変更する能力かもしれません！！」

「へー、流石は第三部隊副隊長。見てるだけじゃぁなかったんだねって何気に感心しちゃったなって思ってみたりしたよ。そのとおり、僕の能力は……うーんそうだなキミら風に言うと、『硬質変換(ドウレサ)』ってトコかなあ？ふれた物の硬質を変化させるっていう地味な能力さ」

その説明を聞いて、九条は納得する。そういう能力ならば、先刻の件は単にナイフの硬質を極限まで硬くしただけなのだから。

「それにしても余裕だな……。わざわざ能力の解説までしてくれるとは」

小谷は大してあせった様子も無く普通に答える。

「いやー別に僕の能力って使ってればいずれバレるし？それにバナムみたいに解析されて困る能力でもないからね」
（……。一見は大したことがなさそうな能力だが……）
「お？」
瞬間、物凄いスピードで小谷の方へと走る九条。そして一気に拳を振る！

（油断はせん！くたばれ犯罪者！）
「っと、怖いなぁ。ほいっと」
小谷は足元にあった砂を右足で掘り、蹴飛ばして自らの前に展開する。

「そんな目隠しが通用すると思うか！」
それを気にもせず、九条は拳を砂ごと殴り飛ばそうとする。しかし――
ガキィィィンッ！
「……！？なっ……！」
瞬間、九条の『規制解除（レグラシオン）』状態での拳がはじかれる。なぜなら――
「そんな砂でっ……だとっ！？」
そう、九条の拳をうけたのは、ただの砂。ただの砂に九条の拳が止められたのだ。
「あー説明不足だったなあって思ってみたりしたね。僕の能力はね、ほぼ触れてる間だけなんだけど、触れてから5秒程度なら僕の能力

は生きてられるんだよ、言い忘れててごめんねーっ！」
拳がはじかれ一瞬だが唖然とする九条。そこをつき、小谷のナイフが迫る。
心臓に目掛けて、一直線に。
「ぐっオォォォオオオオオオオオオオオオオオオオ！」
ナイフが心臓へと突き刺さる瞬間、九条は右拳を思いきり自らの右のわき腹に振る！
その力に九条の体は投げ飛ばされるが、なんとか小谷のナイフから逃げ切る。
しかしそこへ小谷が左のポケットから拳銃を取り出し数発を素早く打ち込む！！
「っ！？」
未だ倒れたままの体勢で、九条は転がりなんとかそれをよけながら、起き上がる。そして再び凄まじい速度で走りだす。
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！」
「っ！」
一瞬で距離をつめ、小谷に殴りかかる。それを見て小谷も右手に握られているナイフを使い思い切りさしにかかる。
ドガッ！　という音と　ズバッ！　ことという音が交差する。
九条の拳をもろに腹に受けた小谷は思い切り何mも投げ飛ばされ、空き地と周りのビルとの境界線をたてている壁に思いきりぶつかる。
同時に九条もその代償として小谷から恐らく麻痺薬つきのナイフをわき腹に食らった。

（……結構な傷を受けたが『規制解除（レグラシオン）』の恩恵で自己回復力も上がっているから麻痺もそこまでは効いてないな……。何にせよ、二回目の一撃だ。今ので奴は意識を失っているだろうし関係は無いか）

そう、九条は今ので二回目の拳を小谷に食らわせている。最初に、地面を抉り飛ばし、その隙をついた一撃。実は九条はあの瞬間『規制解除（レグラシオン）』を使っていた。一発だけでも致命傷となる九条の拳。それを食らい、そして今、二度目の『規制解除（レグラシオン）』の状態での拳を食らわせた。

（しかし俺の全力の拳に二度も耐えたのは小谷（ヤツ）が初めてだったな……。まぁいい、さっさと殺して――）

ズドッ！！

「なっ……！？」

そう考えた瞬間、突然ナイフが飛んできて九条の腹に思いきり刺さり、更にそれを貫通し遠く後ろの空き地とビルの境目の壁までたどり着きそれすらも壊し、破壊を起こしていく。

ビルの硬いはずの壁すら壊して、重要な箇所に当たったのか、バランスを失ったビルが音を立てて崩れていく。時間にして五秒程度でようやくナイフの破壊の進行は収まる。

「クレイ隊長っ！？」

「くっそ……。馬鹿か、俺はっ……！？」

苦しむ九条。それを見て驚愕し、叫ぶ楠。そしてナイフが飛んできた先に目線を移しながら、九条は憎憎しげな表情をしながら見据え

る。その先は、小谷を思いきり殴り飛ばした場所。そして考える。

（そうだ……！何故俺は、奴が一発受けて倒れない事に疑問を持たなかったッ！！考えれば、奴の『能力』を考えれば……すぐに分かった事だったというのに！）

視線を移した先、壁に倒れるように寄りかかっていた小谷がゆっくりと立ち上がる。先程と同じように、全くダメージを受けていないかのように。

そしてタキシードについた汚れを手で軽く払い終わった後、気軽に口を開く。

「いやー危ない危ない。実際流石にまずいんじゃないかと思ってもみたりしたよ。”『硬質変換（ドウレサ）』で服の硬質を変えておいてよかったよ”」

そう、小谷の能力は物質であればいかなる物でも硬さを変更できる能力。

それは自分の服に適用させればいかなる物理攻撃も防ぐ最硬の防御となる。

たとえ、人間を超えた全力の拳でも、だ。

「この……ッ！最初にダメージを全く受けていないように見えたのも、同じ様にやったのか……！」

「うん、そうそう。あ、ちなみにー隊長さんが受けたナイフすごかったでしょー？あれね、ナイフの先の硬さをめいっぱい硬くしたんだぁ。超硬くしといたからビルすらも一撃！」

自分の能力を自慢をするかのように誇らしく語り、ゆっくり歩いてくる小谷。

それを見ながら九条は不味い、と思う。

（いくら『規制解除（レグラシオン）』の状態での回復力を得ているとはいえ……血を流しすぎた！それに麻痺も結構今ので回ってきた……！このままでは確実に死ぬ……ッ！クソッ……！”まだ本命は使えないのか！？”）

「さってーとー。多少時間はかかってしまったなーって思ってみたりしたけど、ま、終わりか」

麻痺、そして大量の出血で動けない九条の目の前まで迫り、予備の折りたたみのナイフを右ポケットから出す小谷。そして言葉を放つ。

「じゃーねー♪」

音が、響く。

そして、一つの人の影が、地面へと倒れる。

第七章　続く戦い、終わる戦い、そして――（前書き）

戦いは続く
戦いは終わる
そして――

第七章　続く戦い、終わる戦い、そして――

「アぁハハッ！ハハハウフフハァヒャハァハハハハハハッ！！！」
おぞましい笑い声と共に、ジエルの大量の炎が仁矢と木戸を狙う。
それを難なくかわす仁矢と木戸。

「……はっ！」

そして仁矢はその体のどこから取り出したのか、大量の武器を取り出し、ジエル目掛けて走りながら複数の方向から勢い良く投げる。
それはナイフ、手榴弾の二種類、しかし投げられた数はおよそ１００にも達する数。
それを薬物でもやっているかのようにイカれた紫色の瞳で見てジエルは怯えるどころかさらに興奮するかのように激しく笑いながら叫ぶ。

「怖いヨォオオオオオオ！！！助けてぇぇぇ！？アハッ、ウハァハハハハ！！！アヘハファハッ！」

踊るようにジエルが動き、大量の炎が展開し、投げられた武器全てを燃やす。否、溶かす。
その様子を見て仁矢は冷静に犯罪者としてのジエルを分析する。

（コイツ……ふざけたように見えるが相当頭がキれる野郎だな……。あの数をあせる事も無く難なく処理するとは……。それにコイツの能力、ベタな念発火（パイロキネシス）、いや……本部の言葉で言うなら『念発火（フラマ）』、と言うところだろうが、発現する炎のでかさ、温度、範囲が桁違いだ……。恐らくアメリカのゴルパス支部長より上……、世界最強の

念発火能力者……、か。アノマの野郎もめんどくせぇ奴を集めやがる）

そう考えた後、すぐさま攻撃を開始しようとする仁矢。そして木戸。

「ジード隊長、シュードラ副隊長、聞こえますかっ？聖強のイミナです」

しかし突然正義の城の服にあらかじめ仕込んである超小型の無線機から声が聞こえ、一旦やめる。

聞こえてきたのは、はるか上空の、第六部隊の操縦するヘリに乗っている水並の声。（使徒名は聖強のイミナ。ちなみに能力は持っているが、足のことと、ある事情があって戦線には直接はなかなか出られない）

その瞬間、再びジエルの炎が発生する。仁矢と木戸は連絡に集中するためあえて攻撃はせず、それを避け続ける。

「なんだー？イミナ？こちとら結構やばいから早くしてくれぃ」

木戸が炎を避けながらいつものように気軽に言う。それをに応じるように水並は言葉を素早く紡ぐ。

「……、第二部隊が、全滅した可能性がありますっ……、ジエルの放った座標指定大規模火炎で、バナム・ステファニーごとっ……！」

「！？さっきのあの火炎はやはりっ……！？だが、アイツ等が死ぬわけが――」

「憤怒のフィア隊長の無線の反応が消えました……。ヌル副隊長、そして他の隊員の無線機は生きているようですが、反応がありませんっ……！」

無線機は、心臓に最も近い、ネクタイの中に仕込んである。普通にしていれば壊れる事はない。壊れるならそう――
心臓付近に損傷を受けた場合などしか。そしてそれが意味するのは――

「オオオオオオオオオオオオオオオオオォァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

その意味を理解した途端、仁矢の何かが切れ、咆哮する。

「おぉ？いいですねえ！何だかドMでもマゾでもないのに感じてきちゃイマシタヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

咆哮する二人。そして、殺し合いは勢いを増していく。

第三部隊と小谷が激突した空き地。
そこでは、今まさに一つの影が、地面へと倒れようとしている。
その影の正体は――

「がっっ……！？」

小谷だった。
今日何度目か分からない、地面へのダイブを無様にする小谷。

「……？」

『硬質変換（ドウレサ）』でダメージは全く受けてはいない。しかし小谷は自分におきた事が一瞬わからなかった。

ナイフで九条を刺して終わりにするつもりが、急に横から強い衝撃を受けて、地面に倒れた。それを理解し、次のステップに移り、自体をようやく完璧に理解する。
九条の前に、立ちふさがる一人の女性。
楠舞。使徒名を静観のロット。第三部隊の副隊長である彼女が、自分を突き飛ばしたのだと、理解した。
それを見て、立ち上がり、小谷は馬鹿にするような声で笑いながら告げる。

「不意打ちには驚いたけど……今更ここでなんで君？ずっと見てただけの君が。僕にはとぉっても不思議に思ってみたりするんだけど」
楠は、答えない。ただ、力強い目で小谷を睨み付ける。

「間に……合ったか？ロット……っ？」

そして、大きな損傷を受けながらも、楠の後ろに立っていた九条が楠に問いかける。その問いに、安心させるような声で楠は答える。

「大丈夫です……、クレイ隊長。”もう、能力の準備は整いました”」
「何を――」

その言葉に疑問を抱き、口を開いた小谷の言葉が途切れる。
なぜなら言葉を放つと同時に、楠がいつのまにか持っていた真剣を思いきり小谷に上から振り落としたからだ。
小谷はそれを『硬質変換（ドウレサ）』で極限まで固めたナイフで防ぐ。

「……刀なんか持ってたっけ？てか結構剣の腕いいね？なんで最初からこれでこなかったのって疑問に思ってみたりするんだけど」

余裕の態度を崩さず、気軽に質問する小谷。それに、楠も同じように余裕の態度を崩さず、問いに答える。

「……、これは君が倒したウチの隊員の持ち物だよ。それと、剣の腕がいいわけじゃないんだよね。今から知る事になると思うけどっ！」

言葉と同時、剣を一旦離して距離をとり、走り、再び突っ込む楠。それを見ながら冷静に小谷は考える。

（やっぱり隊長さんと同じで肉体の力の増強とかかな？それなら簡単、いくら強くても僕の『硬質変換（ドウレサ）』は砕けない！）

近づき、真剣を振り下ろす楠。その瞬間、素早く先程と同じように極限まで固められた砂の防御が前に展開される。

「！？」

その瞬間、何を考えたか楠が剣を離し、小谷の砂の前へと放り出し、後ろへ少し退く。そして――

ドゴォッ！　という爆音が響く。楠の剣の先には小型の時限爆弾がついていたらしく、それが起爆したのだ。剣の先が欠け、爆風で、砂が舞い、視界を奪う。

爆発を辛うじて避けるも、爆発の余波で小谷のタキシードが少し燃える。

絶対的な防御を誇るハズの服が。

（やるねえ……！僕の能力は『硬質』を変えるだけで、『性質』は変えられない、物理的なのならともかくそれ以外はあんまり役に立

たない事も多いんだよねえ。……まぁけどだからなんだって僕は思ってみたりするけど！）

砂が舞う中、小谷は正確に楠のいる場所を見極め、ナイフを勢いよく突き刺そうとする！

（砂のせいでまだ気づいてないみたいだねぇ！それじゃばいばい！）

勝利を確信し、小谷は笑う。そして右手に持つナイフは楠へとさらに迫る。こちらに気づく様子も無い。

それなのに――

ナイフが楠に刺さる瞬間、楠の体がグルンッ！　とまるで自分の体で無いかのように動き、小谷の方へと視線を向ける。その視線は、今やっと小谷に気づいたかのような驚きの視線だった。

「え……っ」

それを見て、小谷の動きが一瞬鈍る。

――何故、全く気づいていなかったのに分かった？

そう考えたのがいけなかった。

楠はその隙を突き、いつのまにか右手に持っていた銃を小谷に突きつけ、先程の爆発で僅かに服が燃え、肌が露出しているタキシードのわき腹部分に正確に放つ。その一連の動作は、やはり自分の体ではないかのような機械のような精密な動きだった。

「ッ！……がァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァあああッ！？」

絶叫する小谷。その右の横腹からは決して少なくは無い量の血が出てくる。

そしてそれを冷たく見据え、もがき苦しむ小谷の元へと近づいてゆく。

「なんで……だっ！？なんでっ……！気づいたっ……！？」

後ろに後退しながら、小谷は自らを陥れた原因となった疑問を問いただす。

その問いに、楠は相変わらず自分の体ではないかのように動いていた体を少し止め、口を開く。

「私を君は、さっき”ずっと見てだだけ”って言ってたよね。けどね、それが私の能力『自動殺人（アウトマティカメンテ）』を発動させるために必要な事だったんだよ」

その言葉の片鱗を聞き、痛みに耐えながら小谷は思考する。

（アウトマティカメンテ……、意味は、自動ってラスが言ってたような……。まさかっ！さっきのあの機械的な動きはっ……！！）

一つの答えにたどり着いた小谷。そしてその答えを肯定するかのように続きを楠は話し続ける。

「私の能力はね、ホントに殺しにピッタリの能力なんだよ。『何十分か特定の人の様々な動きを見続ける事でその人の行動のパターンを読み取りその人に最も最適な行動を選択して自動で動く』って言う能力何だけどね。例えば対象の人がどこかの偉い社長さんならその社長さんの仕事の動きを何十分か見てれば私はその人の仕事の動きに一番最適な事を自動で行えるすごい秘書になれるね。休憩のパターンに合わせてコーヒーをタイミングばっちりに持ってきたり、ね。スポーツのマネージャーもできるかな？まあ普段は使いっぱし

りみたいなことしかできないけど、今は違うね。君の戦闘パターンの一通りを見て、君を殺すために最適な動きも自動で行える。その分自分では全く動けないのが辛いけどね」
「じゃあっ……！」

その答えに最悪の想像をし、小谷の顔が青ざめていく。そこにさらに畳み掛けるように楠は言葉を放つ。

「うん。犯罪者、小谷亮。君を殺すための動きはもう全自動（フルオート）で行える。クレイ隊長との交戦でもう十分動きは見た。君はもう、死んだも同然」
「っ……！」

出血のせいか、自分の死を覚悟したからか小谷の顔はいっそう青ざめていく。そして楠より少し後ろに立つ、九条が自分の出血をした箇所をポケットに常備していた包帯で巻きながら口を開く。

「俺との戦いに集中し、ロットを甘く見ていたのが貴様の敗因だ。地獄で噛み締めろ。……ロット！」

言葉に反応し、再び楠は動く。まさしく全自動と呼べる動きで。小谷に、徐々に近づいていく。

「くっそがァァァっ！！」

ズガンッ！
咆哮し、小谷は左手に持つ銃の弾丸に触れ、それを装填し、撃つ。
それは、最硬の硬さを誇る、全てを打ち抜く最強の弾。
それを楠は、ゲームのＮＰＣのような生きてる感じのしない動きでたやすく避ける。

そして、避けながらも小谷に近づく楠。その手には、先程小型爆弾が設置されていたと思われる剣がある。先の方が爆発の影響で欠けてはいるが、人を殺すには十分な刃。

「終わり、だよ。犯罪者、小谷亮。……死ね！」

そして、それを思い切り小谷の首目掛けて突き刺そうとする。慌てて小谷も右手に持つナイフを楠に刺そうとする。そして。

ズドッ！という音が響く。

楠の剣が、小谷の首にめり込んだ音だった。首から大量の血が吹き出ている。そして、小谷のナイフは楠に刺さる事なく、ただ空にさらされるのみ。

「ぁ……はっ……も、う……離脱……かぁ……あ、はぁは……残……念……」

喉を潰された影響でまともに声が出せないはずなのに、声を絞り出した小谷だったが、やがてその声は途絶え、小谷の体から力が失われてゆく。

それを見て、楠が剣を抜くと、首の出血がさらに激しくなり、そのまま小谷の体は人形のように地面に崩れ落ちてゆく。

それを見届けると、楠木は『自動殺人（アウトマティカメンテ）』を解いたのか、その体が自然な動きへと戻る。そしてずっと後方にいた九条に声をかける。

「……仕事終わりましたよー。クレイ隊長。お怪我の具合はどうですか？」

「ああ、大丈夫だろう。だが血が足りん。第四部隊の助けが欲しいな……」

九条が言った瞬間、その言葉に反応するように、上空から第四部隊の隊員が乗っていると思われるヘリが空き地の真ん中へと下りてくる。そのヘリは第四部隊専用の事もあって他のヘリより大きく、最低でも５０人は乗れそうなヘリだ。もはやそれはヘリとは呼べないでもないが。

「随分とタイミングがいいな…」

「というより待機してたんですよずっと。私達の戦いが終わるまで、ずっと上空にいましたよ？一緒に戦ってくれたらいいのに」

まあ第四部隊は医療系能力者ばかりで隊長格以外は戦闘に不向きだから仕方ないんですけどね、などと付け加える楠。

そしてヘリから降りてくる第四部隊。その数はおよそ２０ほど。普段は２００人はいる第四部隊からすれば少ない方だが、他の仕事の方に行っているのだろう。そして１９人ほどが倒れている隊員達の下へと駆け寄り、治療を進めていく。

そして、残った一人、一際大きい巨漢の男が出てくる。その大きさはバナム・ステファニーと同等か、それ以上。そして、正義の使徒のスーツは着ているものの、それ以外の地肌が見えそうな部分は全て包帯で覆われており、唯一見えるのは両目の部分のみ。そして、その男は九条に向かって話しかける。

「……大丈夫ですか、クレイ隊長。私の能力は必要ですか……？」

「ストラ副隊長か……。いや、大丈夫だ、『規制解除（レグラシオン）』で傷は塞がった。ただ血を失いすぎた、輸血を頼めるか？」

男の名は遊動街（ゆうどうがい）。使徒名は包吸のストラ。第四部隊の副隊長の男。

九条の頼みに答えると、遊動は片手に持っていた担架を地面に置き、そこへ九条を横にさせて、輸血を開始する。

九条は輸血されながらある事が気にかかり、遊動へと問いかける。

「ストラ……。第二部隊は、どうなった……？」
小谷から、死んだと聞かされた第二部隊。しかし、それを信じる訳にはいかない。だから、九条はその答えを知るべく遊動へと聞く。
その答え尾を楠も真剣にまつ。
その問いに遊動は笑顔で答える。
「……大丈夫ですよ、彼女達は生きています。先程、救助に向かったもう一方のグループから連絡がありました」
その言葉に安堵し、表情を柔らかくする九条と楠。
しかし続けて放たれる言葉に二人の顔は少し曇ることになる。
「……多少のダメージを受けてはいますが、ほぼ全員は能力で治せるでしょう。……ただ、憤怒のフィア隊長は、少々マズイですね……」
「どういう、状態なんだ……？」
「はい、それは――」

バナム・ステファニーが自爆したビルの屋上。ジエルの超遠距離発火でビル全体が焼け焦げているものの、第二部隊に死者は一人としていなかった。負傷者はいるものの、後に駆けつけた第四部隊の面々が現在、傷の処置を行っているのでそちらもあまり気にする必要は無いだろう。
そんな中、第二部隊隊長の少女は屋上の地面に体をあおむけにしてグッタリと倒れながら、考えていた。
（……死者、出なくて良かった……。ま、その代償として、かなぁ

りキッツイ状態だけどね……。結局バナム・ステファニーの脳も体と一緒に燃えてしまったし……、無線機は炎の熱でやられちゃうし……心配かけたかもね……）

ジエル＝グラストの超遠距離発火。本来はそれにビルごと飲まれ、甲ノ宮の第二部隊は跡形も無く全滅するハズだった。
だがそのとき、甲ノ宮はジエル＝グラストへと関連する全てを消す『殺意』のエネルギーを銃からではなく、体全体から放ったのだ。その結果、普段の銃弾のサイズとは桁違いに違うエネルギーが炎全てを消し去った。それは問題は無かった。しかし。

（やっぱ……体全体からエネルギーを出すのは辛いわね……。自分の体が自分の体と思えないダルさだわ……）

甲ノ宮の能力、『感情装填（センティメント）』は、自身の身体から感情のエネルギーを生み出すというもの。その理論に基づけば、体全体からエネルギーを出す事が出来る。しかし、普段は自身の手からエネルギーを出し、そこから銃弾サイズに圧縮して銃に込めて撃つついう使い方をしている。それは何故か？それは、身体全体からエネルギーを出すと、甲ノ宮の脳にダメージを与える危険性があるからだ。
甲ノ宮の『感情装填（センティメント）』は、名のとおり自身の感情を生み出す能力。そして能力とは、自分の脳で自分しか分からない能力の発動の組み立てを頭の中で構築して生み出す物。そして、感情とは脳から生まれる物。つまり、甲ノ宮の能力は普段の能力の構築に加え、感情を脳から出す作業の二つを行うため、脳への負担が大きい。普通の能力者ならいくら能力を使おうが問題は無いが、甲ノ宮の場合は違う。体の一部に集中して放つのなら負担は殆ど無いが、体全体となると能力の構築と感情の生産、その二つが莫大な負担を生む。
よって体全体から放てないわけではないが、甲ノ宮の脳に莫大なダメージを与える可能性がある。現に今、その後遺症が現れてきてい

る。

（……。体が動かない……。脳の命令を届けるところがやられちゃったのかしら……）

「大丈夫ですか！？フィア隊長っ！」

自身の体の異常を冷静に理解していたとき、自身の隊の副隊長の声が聞こえる。声が聞こえた方向へと首を動かそうとしたが、脳からの命令が行き届いていないのか、動かせない。そして副隊長の天草が走って来て、甲ノ宮の視界に収まるように上から見下ろす。そのすぐ後、やさしい雰囲気のする少女が歩いてきて、天草と同じように視界に収まるように甲ノ宮を上から見下ろす。その少女は第四部隊話隊長である心情愛（しんじょうあい）。使徒名を聖母のマリアという自分と同年齢の少女は甲ノ宮を心底心配するような声で話しかけてくる。

「大丈夫ですか……？フィアさん。ヌルさんから聞きましたが、体全体から能力を放ったんですよね？どんな症状が自覚できますか？」

その問いに答えるべく、口を動かそうとした甲ノ宮だったが、どうやら口への命令すらも行き渡らないよことに気づき、『感情装填（センティメント）』を発動し、自身の体の一部、頭からエネルギーの丸い塊を出す。その塊は『感情』そのもの。その『感情』の塊は甲ノ宮が思っている全てを語る塊。脳が疲れてる中、能力を行使したせいで甲ノ宮は苦しむが、それすらも動きには出せず、心の中で思っただけだった。

『……見ての通り、脳からの命令が行き届かないわね、全部の部分に』

高音質でクリアな音楽のような声が塊から聞こえる。甲ノ宮の思っている事が、甲ノ宮の口の変わりに飛び出す。

「そう……。待っててね、今すぐ私の能力で助けてあげるから――」
『待って。マリアの能力、今の私に使うと少し眠る事になるでしょ？その前に聞かせて。残りの二匹は、もう死んだ？』
心情の言葉をさえぎって『感情』の塊から声が発せられる。その問いに心情は、自分の身を案じない甲ノ宮に呆れるかのような表情で返す。
「……脳の事を気にしてるの？……ちょっとは自分の体を案じてよね、もう。けど安心して。小谷亮はさっき第三部隊が始末したらしいから。脳もちゃんとあるよ。ただ、ジエル＝グラストは、まだみたい……。第一部隊からの連絡も無いんだよね……」
『……援軍は？』
「ああそれは大丈夫だよ。今、リアさんとスカージ支部長が直々に向かってるからしいから」
『そう……。なら心配は要らないわね。それじゃマリア……頼むわね』
「ん、ＯＫ。……『時間再生（レペティシオン）』」
心情の腕から丸い光が出現し、甲ノ宮の頭を覆っていく。その光が完全に甲ノ宮の頭を覆った瞬間、甲ノ宮の意識が途絶えていく。

「ぐっッ！？がァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！？」
絶叫が響き、王城最の体が地面へと投げ出される。
正義の城から数百メートル離れた道路、ジエル＝グラストのいる場所へと能力を使いながら走っていた使徒、神童のスカージと電網の

リア。そんな時、突然誰もいなかったはずの道路の前方から人が現れた瞬間、能力を行使していたハズの王城が吹っ飛ばされたのだ。そして、飛ばされなかったアリサはその人間の特徴全てを見て、驚愕をする。

ボサボサの、どこか火向仁矢と似たようではあるが色は違い、銀色の髪。整った二枚目な顔立ちに青い瞳。５０は超えてるハズの年齢に一致しない、青年にしか見えない見た目に身長、そして無邪気な笑み。青年である事を強調させるように、その服装も上はチャックが付いているフードつきの服に、下はジーパンという組み合わせ。しかし、その普通な様に見える男が纏う雰囲気は、ジエル＝グラストよりも異常だった。当然だ。なぜならその男は世界で誰よりも異常な男だったからだ。

その男の名は、異常（アノマーリア）

世界中を混乱に陥れる3人の内の一人。

「っ……！」

男を見た瞬間、アリサは恐れてしまった。犯罪者を殺す正義の使徒が絶対に抱いてはいけないはずの『恐れ』という感情を。

だが、無理は無い。それは表すなら『悪』そのもの。その男が少しそこらへんを動いただけで世界が狂ってしまうのではないかとも思わせるかのような、別次元の『悪』。そのあまりの『悪』に、アリサは動けずに正気を失っていた。

「ぐっ……！テメェ……ッ。アノマー……リア……かっ……！」

そんな時、後ろから先程飛ばされた王城の声が聞こえ、アリサはようやく正気を取り戻す。

（火向仁矢と火向愛理の血族を皆殺しにしてから……13年ぶりの登場ですか……。じかに見るのは初めてですが……なんて『悪』……！）

そして王城の問いに対して、初めて男は口を開く。

「あはははっ。……世間から呼ばれてるだけで俺の本名はアノマーリアじゃないんだけど……。まあそうだね、空気読んで答えるか。そうだよ、俺がアノマーリアだ。その赤い長髪、ちょっと老けたねぇ久しぶり、神童のスカージ」

「……久しぶりだなアノマ……。ずっと貴様と相対することを待ち望んでいたぞ……！」

日本の正義の使徒全てを従える男の膨大な殺意。それを受けてもアノマーリアという男の表情はニコニコしたままで変わらない。

「あ～神右のセアリス殺したのまだ根に持ってたんだ？別にいいじゃん、そのお陰であんたは支部長になれたんだか――」

アノマーリアの言葉が最後まで続く事は無かった。

何故ならその言葉が終わった瞬間、今までアリサの後ろにいたはずの王城が、一瞬でアノマーリアの元へと移動し、殴り飛ばそうとしたからだ。アノマーリアはそれを見て、一瞬驚いたような顔をするが、すぐに元の笑顔に戻り、一言告げる。

「吹っ飛べ」

その言葉と同時、ハリケーン級の風が周囲から巻き起こり、二人ごと吹き飛ばそうとする。だが。

（五十年前の事件の資料に載っていた……そして哀歌さんの時の暴風か……。だが、甘い……！風の重力を変更すればこんな風などたやすい……！）

日本の正義の使徒全てを束ねる神童のスカージの能力は『重力無視（グラベダド）』。”自らの体を覆う能力膜に触れたものの重力を操る”というもの。その能力を使い、風の重力を操り、直撃を避けようとし、風に触れる。しかしその瞬間――

バキィンッ！

「！？」

耳を裂くような音が鳴りひびく。そして、王城は、ありえない事に気づく。今の音は、”能力構築が失敗した音”だということに。

（馬鹿なっ……！？なんで失敗しやがったっ！？能力構築が失敗するなんて、脳が損傷してる場合以外は絶対にねぇはずだろ！？）

そう考えた瞬間、ハリケーンはアノマーリアと王城に直撃しようとする。

「っ……！はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

それを見て、すかさず王城を助けるべく、アリサは『雷力行使（トゥルエノ）』を発動し、大規模な落雷級の電撃を風に浴びせる。その雷撃は、風全てを跡形も無く、消滅させるほどの力をもっていた。それなのに

「すっごいねー。ジエルが世界最高の念発火能力者なら、あんたは

世界最高の念……なんだ？念、電気能力？……なんでもいっか。まぁ世界最強の電力系能力者だとは思うけど、意味はないと思うよ？」

アノマーリアが呟いた丁度直後に、再び、バキィンッ！という音が響き、アリサの電撃が風に飲み込まれ、消滅していく。

「なっ……」

その不可解すぎる光景を見て、アリサは間の抜けた声を出してしまう。

そして、雷撃を飲み込んだハリケーンは、王城とアノマーリアの二人を一瞬にして吹っ飛ばそうとする。

そのとき、アノマーリアの顔が少し見え、その表情にアリサは理解が出来なかった。理解できないのも不思議ではない、何故ならアンマーリアという男は、自分も飛ばされるというのに、全く他人事のように笑っているのだから。そして、王城を見て、アリサは叫ぶ。

「スカージ支部長ーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

ゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！という轟音が響き、ハリケーンが二人を包み込む。余波で車道の地面が所々へと吹っ飛ばされ、近辺の建物も耐えられず、ガラスが大量に割られ、建物が潰れていく。

もはや王城の安否を祈るしかないアリサ。祈るようにしてから十秒経ったとき、ハリケーンが消えていく。その瞬間、急いで王城の姿を確認しようとしたアリサはやっと姿を見つける。

「っ！！？」

それは上。ハリケーンに吹っ飛ばされて、上から降ってくる王城の

姿。意識があるのかはわからない。

（……意識がなければ私が助けないと……！でもどうやって！？私の能力はふってくる人間を支える事が出来るものじゃないっ！）

そう焦っていたアリサだったが、心配は無用だった。意識が残っていたらしく、王城は能力を使い、自分の体をスムーズに地面へと着地する。だが

「がっ……！げほっ！ぐっ……！」

「スカージ支部長っ！！大丈夫ですかっ！？」

余程ダメージが大きかったのか、着地した瞬間、限界が越えたのか、口から少なくは無い血を吐き出す。よく見れば、正義の城の仕事服もボロボロだ。アリサが駆け寄り、安否を確認しようとする。その時

「ふう～、何も風で攻撃する事はなかったかな？耳がまだキーンッてなってるし」

声が聞こえた。その声の主は、異常だった。彼が何故『異常（アノマーリア）』と呼ばれたのかを、王城とアリサはその姿を見て、再認識した。なぜなら。

その世界で最も異常な男は、何事も無く、ただ先程の場所に傷一つ無く存在していたのだから。

「……」

それをみて、王城とアリサは目の前のあまりにも異常な様子を見て、声が出なくなった。その頭にあるのは、ただ大量の疑問のみ。

――なんで？　――なんであの風を受けてなんで、傷一つ無い？
――なんで？　――なんであの状況で笑っていられる？
――なんで？　――なんであんな事ができた？

――異常だ

「なん、なんだテメェは……、何をしやがったっ……！なんで……テメェは傷一つねぇっ……！？５０年前の、資料からだと……テメェの能力は風を操るだけだったはずっ……！」
「うーん……やっぱ勘違いしてるよなぁ。まあ、それも仕方ないかな？この能力の詳細、あんたら正義の使徒は知らないからね。神右のセアリス……、いや、柊を殺したときは使ったけど、そん時はあんたらいなかったしね」
「……テメェみてえなクズがあの人の苗字を呼ぶんじゃねえ……」

神右のセアリス。その使徒名に、王城の顔に、殺意がよりいっそう塗りつぶされていく。

（……そういえば、アノマーリアは王城さんの元恋人を殺した人間でもありましたね……）
柊哀歌（ひいらぎあいか）。使徒命、神右のセアリス。正義の城日本支部の、第二支部長だった女（ひと）。王城の恋人であり、上司だった女（ひと）。２０年ほど前に、殉職した女（ひと）。
「ふう、苗字も呼んじゃいけないのか、酷いな。まあそんなことはどうでもいいかな。さっさと俺の目的を果たさせてもらうよ」
「目的、だとっ……？」
「うん、まぁ目的と言うほどでもないかもしれないけど。簡単な話さ。俺は仁矢とジエルとの戦闘が見たい。だからさ、あんたらが加わると嫌なんだよね。だから悪いんだけどここで倒れててもらうよ」
「……ブッ殺すっ！……ナメてんじゃねぇぞ……、アノマァアアア

アアアアアアアアアアアアアアアアアアァアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

咆哮し、獣のような形相で襲い掛かる王城。しかし、それを見ても、世界で最も異常な男の表情は変わらず笑っているのみ。そして、静かに一言。

「噛ませ犬みたいな台詞だね」

ドガアァンッ！！

世界最悪の犯罪者と、日本の正義の使徒を束ねる、二人の男が激突する。

第八章　絶対（アブソルト）（前書き）

突如現れた世界最悪の男、異常（アノマーリア）
彼の、その能力とは……

第八章　絶対（アブソルト）

「ウフフフフフフハァアアアアアアア！！どうしたのでしょうかぁ！？動きが鈍っていましてヨォ！さっきの遠吠えは何だったんよぉ！？ただのノリだったと言うんなら容赦しねぇぞぉ！ジードちゃぁあああああああああああああああああああん！！！」

ふざけた言葉と共に灼熱の炎が広範囲にわたって広がり、仁矢がいる場所と木戸がいる場所へ様々な方向から襲い掛かってくるが、間一髪ながらも素早くかわし続ける。

「うぁっ！」

「っ！シュードラっ！」

しかし、炎は避けたと思っていた木戸の右足の一部へとへと絡みつき、その足を消し炭に変えてゆこうとする。

「くっそ……！幻想起動（ファンタシア）！」

すぐさまペットボトルを取り出し、幻想起動を発動させて水を消した木戸だったが、その圧倒的な炎は、木戸の足を消し炭にはしておらずにすんだが、もう動ける状態の足ではなく、右足全体が焦げている。

そして、ジエル＝グラストがそれを見逃すハズもなかった。

「～♪」

鼻歌と共に、炎が、動けぬ木戸の後ろから襲い掛かる！

「シュードラァァァ！」

助けるべく、颯爽と走り出す仁矢だったが、間に合わない。
木戸の、幻想起動もまだ、使える時間ではない。
炎は、今その瞬間、木戸の全てを燃やし尽くすべく、近づいてゆく。
しかし――
ドゴォォンッ！　という音が響く。それは近くの炎上していたビル。
ビルは、ジエルの炎で激しく炎上しており、それが原因でバランスを崩して倒れてきたのだ。そして、ある場所へとゆっくりと崩壊し、倒れてゆく。
それは、木戸に襲い掛かる炎を防ぐかのように、炎を押しつぶし、倒れてゆく。
ズゴゴゴッ！　という音が響く。
助かった事に木戸は多少安堵するが、ある事に気づき、その安堵は消える。
そう。落ちてきたビルが、仁矢とジエル、そして木戸との間を塞ぐとてつもなくでかい壁と化してしまっていたのだ。
そして木戸は、ネクタイに顔を近づけ、言葉を放つ。無線機を使って、

「ジードっ！俺ぁ無事だ！多少は動けないが、第四部隊に連絡する！だからおまえは気兼ねなく殺ってこいっ！」
「……そうか」

そっけない一言。だが、その短い言葉には自分の部隊の隊員を傷つけられた事に対する怒りが含まれていた。

「アァァァァァァァァァァァァァァッ！」
「おーうっ！？また雄叫びぜよ？いいねいいねぇ！さぁーっ、再開しよぉぉぉぉ！」

「らぁあああああああああああああっ！」

日本の正義の使徒全てを束ねる男は咆哮し、重力無視（グラベダド）を発動し、異常な速度で走り、一瞬でアノマーリアの元へと向かう。そして、その腹に目掛けて拳を振る。

「単純な攻めだなあ。んなもん意味ないから」

それを軽く避けながら軽口を言うアノマーリアだったが、次にそんな軽口はもう叩けなくなる。なぜなら、

「……！？」

ドシャッという音が響き、アノマーリアの体が地面にめり込むようにして崩れ落ちたからだ。

そんなアノマーリアをゆっくり見下ろし、王城は殺意を込めた瞳で見据える。

「テメェの周りにある重力を少し重くさせてもらったぜ。絶対に身動きは取れねぇ。はっ、地面にめり込む気持ちはどうだ？最高だろ？」

そう言う王城に、アノマーリアの返事は帰ってこず、莫大な重力で圧迫され苦しんでいるのか、わずかな掠れ声しか聞こえなかった。

それを見て、アノマーリアは軽くその体を蹴り、しゃがみこみ、自らの右腕をアノマーリアへと近づけていく。

「いいかぁアノマーリア。オレはこれからテメェの内臓に莫大な重力を発動させる。体の内側から莫大な重力で引っ張られたらどうな

るかは分かるよな？バンッ！、だ。怯えろ、そして無様に死ね」
「……」
しかし、そんな死のイメージを与えても、アノマーリアの顔は何ら変わりなく、ただ微笑しているだけ。
その態度に完全に頭がブチ切れた王城は、即座に殺すべく、その腕を能力を使い、腹を軽々と突き破る。
「ごぁっ……！」
痛みで、叫びともいえない声をアノマーリアは出すが、犯罪者に容赦などする訳もなく、能力を発動する。
ドパンッ！！という音が鳴り、アノマーリアの体が震え、その体から臓物を吐き出し、王城の体に血を飛ばす。
やがてアノマーリアの体から生気が奪われる。
それを見て、あっけない、と王城は思った。
自分の愛する女を殺した人間が、こんなにあっけなく殺されるなんて。
（……仇は取れた、そう悲観する事もない、か――）
「スカージ支部長っ！！！避けて下さいっ！」
そう考え立ち上がったところに、アリサの焦った叫び声が聞こえる。
（避ける？一体何を――）
その答えは、すぐに分かった。
そう――自らの腹に、刃物が突き刺さった瞬間に。
「……あ？」

唐突な出来事に、一瞬間の抜けた声を出す。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

しかし、体が痛みを理解した途端、絶叫する。

しかし、そんな痛みよりも先に、王城の頭に浮かんだのは疑問だった。

（オレは今、重力無視（グラベダド）を使ってた……！こんな刃物……膜に触れた瞬間重力で押し潰されたハズっ！何故オレにダメージを与えられた！？そして何よりっ……誰が投げやがった！？）

「あ～いてて……。全くグロテスクな事してくれるなあホント」

答えは、王城の足元からやってきた。

そこには、臓物を撒き散らしながらも、笑いながら地面に座り、生きる、アノマーリアの存在があった。

「なっ……！」

「っ！？」

その光景に、アリサは勿論、王城ですら恐怖の念を抱いてしまった。

それは仕方のないこと。

内臓を隅々まで破壊して、生きていられる人間を目の前にして恐怖を抱かないはずがない。

そして、次の瞬間。王城とアリサは更なる恐怖を抱く。

グチャグチョリッ　という音を鳴らしながら、アノマーリアの体の組織全てが構築され、再生されていったのだ。残ったのは服に付いた血の痕のみ。

（仁矢の……瞬間再生（レヘネラシオン）っ……！？）

恐怖のあまり、何歩か王城は下がる。腹にくる刃物の痛みなどまるで感じなくなるほどの恐怖。

恐れてはいけないというのに、恐れてしまう、その異常すぎる光景。

やがてすっと立ち上がると、アノマーリアはそんな事に全く動じずに今までと同じ軽い口調で、

「～っ。あーやばい。ちょっと吐きそうになったよ。グロイことしてくれてさぁ」

「何なんだ、テメェはっ……！何だ、テメェの能力はっ……！何で死なないっ……！？」

暴風に、火向仁矢だけの能力、瞬間再生（レヘネラシオン）。それら二つを使いこなす能力など、無い筈なのに。

「そうだなあ。こっちだけずっと能力隠しっぱなしってのも悪いしね。教えてあげるよ」

そう言い、アノマーリアは微笑を浮かべながら、口を開く。

「俺の能力は、『この世界で出来る事に限定し『過程』を無視し、『結果』だけを発動する』能力、だよ」

「過程……？結果……？」

アリサは呟く。そして、アノマーリアは説明を補足するべく言葉を更に続ける。

「ああ、難しくて分かりにくいよな、これだと。そうだな、簡単に言うとこの世界は過程と結果だらけなんだよ。例えば、一本の剣が

あるとする。剣は当然、斬る、という結果を持っている。けど、斬れない物も当然ある。硬すぎて斬れない、とかね。この場合、剣で斬ろうとする、しかし、硬くて斬れない、という結果を邪魔して干渉する過程が存在する。けど、俺の能力はその過程を無視する」

「まさかっ……！」

「剣がもたらす結果は、当然、『斬る』ということ。しかし、その結果を作るためには様々な条件、過程がある。斬る対象が剣で斬れるものではないといけないとか、硬さとかな。だが、俺の能力を使えば、そんな邪魔な過程を取り除き、全てを斬る剣となれる。どんなに硬かろうが、これは絶対に斬れない魔法の盾だとか、ある特定の物じゃないと斬れないとかそんな漫画チックなもんですら斬れる。斬れない要因の過程を壊したそれに、斬るという結果だけを与えればね。例えば、さっきの暴風にあんたらの能力が効かなかったのは、全ての過程を無視し、元の風の性質、吹き飛ばすと言う純粋な結果が込められていたから。俺が内臓ぐちゃぐちゃにされても死ななかったのは、”何らかの原因で死ぬという過程”を壊し生きるという結果を込めたから。ちなみに今全然老けてないのも、”老いると言う過程”を壊してずっと若いままという結果にしてるから。結果に過程では抗えない」

つまり、こういうことだ。

最初に、アノマーリアが能力を纏っていたハズの王城を素手で殴れたのも、”殴れない過程”を壊し、殴るという結果だけを発動させたから。

ようするに、アノマーリアにはどんな強大な能力で立ち向かっても、殺す事は不可能に近い。どれほど強力な能力で致命傷をいくら負わせても、”殺される過程”を壊し、”生きる”という結果を作ればそれですむ。

つまり、『絶対（アブソルト）』。

無敵とも呼べる能力。この世界で出来る事では、彼に適うものなど

一人もいない。

「テメェが、ジードの瞬間再生（レヘネラシオン）を使えたのもっ……！」

「そう。この世界で出来る事、ってのには能力も含まれるからね。当然あんたらがこの世に存在した時点であんたらの能力も使える。と言ってもまだまだ不完全な能力ではあるんだけどな。沢山不具合もあるし。チートの代償のバグってトコか」

世界最悪の男にして世界最強と言ってもいい能力を持つ男は、そんな完全なハズの能力すら不完全とさげすむ。
そして、心底楽しそうに口を歪ませながら、口を開く。

「さて、そろそろ終わっとこうか？」

「ぐっ……！リアァァァァァァァァ！」

「……っ！はぁあああああ！！」

王城の咆哮に応え、アリサは、雷力行使（トゥルエノ）を各方向から最大出力で放つ。
バチィィィィッ！！バリッバチチチィッ！　と凄まじい音を鳴らしながらアノマーリアへと直撃する。
まるで漫画のキャラがオーラを纏っているかのように見えるが、そうではなく、電撃が大量に直撃しているだけだ。
その雷撃は、生物が食らえば一瞬で死にいたる威力を誇る。それなのに、

「無駄だってのに……。よくやるよね。てかこれすごいね、まるでオーラみたいだ、カッコイイー」

「……っ！？」

アノマーリアは、アリサの電撃の嵐に、ダメージを受けるどころか、

その場で立ちながら、気軽そうに口を開く。
そんな人間を前にして、落ち着けるわけもなく、アリサの全身に寒気が走る。
そんなアリサを見透かすように、世界で最も悪で、異常な男は気軽に言う。

「そんなに驚く事かな？こんなの、ただ”その状態で立つ”って簡単な事をしてるだけなんだけどなあ。まあそんなんでも過程をすっとばして結果だけを発動すれば十分なもんになるんだけどね」

そう。”その場で立つ”という動作は、過程を無視すれば、本人以外の誰にも動かせない、凶悪すぎる防御となる。

「くっ、そっ……！スカージ支部長っ……！奴の周囲の重力を――」
「もうっやってるっ！だが全然効かねぇ！クソっ！」

足掻く二人を滑稽だとでも言いたげな顔でアノマーリアは顔をゆがめる。そして、

「にしても随分時間かけちゃったな。二人の戦い見れてないし。まぁ”衣（ころも）が傍観してくれてると思うからいいけどさ”」
そう言うと、アノマーリアは右腕を少し振るう。
その瞬間、襲っていた電撃が全て、アノマーリアの右手へと収束されていき、円形になり、バチバチと音を鳴らす。

「私の……雷力行使（トゥルエノ）っ……！？」
「まずいっ！リアッ！避け――――――」

王城の声が届く事は、なかった。
円形の雷が、爆発するかのように襲い掛かり凄まじい轟音を鳴らし

ながら、二人に襲い掛かったからだ。
その雷撃は、アリサに直撃し、王城の能力膜を超えて、直撃する。
雷撃の衝撃で煙が辺りから吹き出る。
やがてそれが収まった頃、地面に気絶している様子の王城と、アリサの姿が見えた。

「さて終わりっと。そろそろ衣のトコ行って二人の戦い見ないとね」

そう言い、二人の戦いを見るべく、その場を去ろうとする。

「……ま、て……」

だが、その瞬間気絶したはずの王城の声が聞こえ、立ち止まる。

「あら、”電撃で気絶する”って結果作っとくの忘れてたな。ま、いいや。で、何？」
「何で……殺さねぇ……！」

その問いに、世界最悪の男は普段どおりな笑顔で答える。

「ああ、そっちの方が屈辱的かな、と思っただけ。犯罪者に殺されずに見逃されるってのは結構くるんじゃない？」
「テ、メェッ……！」

その言葉の通り、王城の頭は屈辱で埋め尽くされ、一言では表せない表情が出る。
その表情を見て、満足したのかアノマーリアは口元を緩め、心底楽しそうに言った。

「じゃあね、日本支部長さん。ナイフの傷は”治してあげたよ”。

大人しく助けを待ってるといい」

そう言い、世界最悪の男は眼前から消える。
犯罪者に助けられるという、王城にとって最も屈辱的な事をして、消える。

「ク、ソッ……」

肉体、そして精神を壊され、彼の意識はそこで途絶える。

第九章　激闘

「グヒャクキュクカアヒャハハハァァッ！！！」

意味不明な悪魔の様な笑い声を放ちながら、犯罪者ジエル＝グラストは自らの能力を行使し、対する火向仁矢の周りへと炎を渦を巻いた蛇のような形にして襲う。

「ふっ！」

それを難なく回避し、１００ｍ程離れているジエルの元へと駆け出す。

しかし、駆け出したところに縦横５ｍはあるかと思われる正方形の巨大な炎の塊が出現し、仁矢の走路を阻みながら、前進してくる。

「邪魔だっ……！」

それを、勢いをつけて炎の壁の上を跨ぐかのようにして跳躍し避ける。空中に仁矢の体がさらされる。

それを見たジエルは顔を気持ちの悪い笑みで、

「ハッハァ！大ジャンプで回避とか漫画かよっ！面白いですね！けど、それを待ってたんだよネえええええええええええ！！」

ジエルは吠え、その瞬間、空中で身動きの取れない仁矢の周囲に、ゴオォッ！という轟音が響き、仁矢の周り全てを赤に染めた大規模すぎる炎が出現する。逃げ場は、ない。

「……っ！？」

その大規模な炎は、凄まじい音を響かせながら、逃げ場を全て潰し、仁矢に迫りやがて直撃する。
生きれるはずなど、ない。
やがて、仁矢を包み込んでいた炎は消え、炎の匂いだけが残った。

「ひ、ひゃ、あはははははひゃはくかふはふぇひゃふはははははひゃぁあああああああああああっ！！」

それを見て、勝利を確信しジエル＝グラストは普通ではない笑い声をあげ、そしてふざけた口調で吠える。
その表情は、瞳は狂気に満ち、口は歪み、誰もが見ても悪魔としか表現しようのない笑顔だった。

「はっはぁ！何だぁあああああ！？コンナので終わりなのっ！？？！結局口だけカヨ正義の城最強の使徒ォオオオオオオオオオオオ！！！」

自らの勝利に、ジエル＝グラストは興奮し、死んだ男に罵声を浴びせる。

「黙れ、犯罪者っ……！」
「！？」

唸るような声が聞こえた瞬間、数多の銃弾、刃物、爆弾がジエル目掛けて後方から飛んでくる。

「オォッ！！」

それを、何とか反応し、自分の周囲に炎のベールを作る。
炎のベールに触れた全ての凶器は、一瞬で溶ける。

そして、ジエルはそれを投げた人物へと視線を向けるべく、後ろを向く。
そこにいたのは、火向仁矢。たった今、避けようがないはずの炎で死んだはずの男が、立っていた。

「……はっ、アハハッ！面白いよねエエエ本っッ当！最初んトキ俺の目測を破ったリさァ、今度は全てを溶かす温度の炎を直撃して無傷でーすってーかあアィ？しかもっ！そっから自分の背後に移動ゥィ！？オマエの能力、再生能力だとは聞いてマスけどよ、んなあーモンじゃないダロォ？一体ナんなんナノですかその能力はっ！ウヒャキャハクカァッ！」

殺せなかった悔しさより、その普通ではない事を成し遂げた仁矢への興味の方が多いのか、爆笑しながらふざけた規則性の無い口調で歓喜し、叫び、吠える。
そんなジエルの言葉には応じず、仁矢は両腕を軽く揺らしす。するとスーツの腕の裾の部分から、長い日本刀の刃の部分のみが真っ直ぐに左右一本ずつ突き出る。
それを軽く振り、剣の調子を確かめる。どう固定されているのか、軽く振っても全く外れる様子はない。

「っ……！」

そして、軽く息を整え、ジエルのいる場所へとダッシュする。
ジエルは向かってくる仁矢を燃やし尽くすべく、頭の中で能力を構築し、仁矢の周りに死角無しの、包み込むような炎を発生させようとする。
しかし、その炎の一部が発生した瞬間、仁矢は素早くその場から移動しながら走り抜ける。
炎は、標的を見失い、ただその空間で燃え続けた後、消滅する。

（チッ！炎の完全発生までのタイムラグを利用しやがったか！）
犯罪者（ジエル）との距離は、後、５０ｍにも満たない。
「クッキャキャフウウウウハハハッ！早いですなぁオイぃィイ！だ～けどヨオオオオオオこれならドウだよゥォオオォォ！」
そうジエル＝グラストが吠えた瞬間、ジエルの周囲に、渦を巻いた槍の様なでかい形状の炎が、数十本程発生する。
そして、ジエルが目を今まで異常に見開いた瞬間、数十本もの槍の炎が、軌跡を作りながら、走る仁矢の元へ、かなりの速度で狙い撃つ！
仁矢のいる場所へと炎の槍が全て突き刺さりゴゴゴゴゴゴゴォッ！という燃えながら標的を貫くような音が響く。仁矢に当たらなかった槍は、コンクリの地面へと突き刺さりながら、その周囲を燃やし、溶かしてゆき、役目を終えると、消滅する。
ジエルは標的の生死確認をするため、見ようとするが、辺りは煙に包まれ、視界が悪くなっていた。
（あークソォ。自分の炎で自分の視界を潰すなんてバカじゃないのかね俺ちゃんは。ヤッパァ漫画みたくはイキませんねー、チクショウが）
そう考えていると、煙が少し晴れ、やっと視界を取り戻す。そして、炎の槍が刺さった場所を見て、見つける。
火向仁矢の、正義の使徒の正装のスーツの上半身の、燃えカスを。
「おーおー惨めな姿になっちまったですねーーーーーーーー！ィヒ

ャひゃはは！でも大したモンダナー！普通、服なんて残らないハズナノニネェ！まー服だけ残って死んでりゃハナシになりマセンけどねェえぇっ！アーーーーーーーーーーーーヒャハハハッ！」

爆笑し、死者を嘲笑う。ジエル＝グラストは、興奮に身を任せていた。

だから、すぐに気づく事はできなかった。

背後から、走り、近づく存在に。

バキィィィッ！！

「ゴ、ガァッァァ！？」

背後から、いきなり後頭部を殴られ、ジエル＝グラストは悲鳴を上げ、バランスを崩し、地面へと這い蹲りそうになる。が、上手くバランスを保ちそのまま持ちこたえながら、後ろへと体を向ける。

その先には、スーツが燃やされ、上は裸、下は辛うじて残っている状態での、火向仁矢の姿があった。

瞬間再生（レベネラシオン）の恩恵か、その体には火傷一つとしてない。

「ふっ！」

そして、そのまま右拳を素早く振り、こちらを向いたジエルの顔面へと叩き込む。

「がっ！」

どうにかバランスを保っていたジエルだったが、今の攻撃で脳が揺れたせいか、そのままバランスを崩して、倒れる。

力を振り絞って、ジエルは立ち上がろうとする。

立ち上がった瞬間、仁矢の三撃目の拳がもうすぐ近くまで接近していた。
しかし、それでも冷静にジエルは考える。
（クッそ！だが、今コイツは服ごと燃やしたから、武器を持っちゃイネーんだ！焦る事はネェよ、さっさと燃やし殺して焼き鳥完成だぁ！ギャキャヒャッ！）
しかし、その予想は完膚なきまでに外れる事になる。
次の瞬間、飛んでくる仁矢の右拳から、ゴリッグチョッという音が聞こえたと思うと、その拳の手の甲を突き破って、日本刀のような物が二本ほど、血と一緒に飛び出してきたからだ。
「!？オォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォオオオオオオオオオオオオオオッ！？？！」
それを見た瞬間、初めてジエルは本気で焦った顔を見せ、その拳を本気で避ける事に専念する。
バックステップで避けるが、僅かに首に当たり、少量の血が出る。
そして、次なる攻撃に備えるべく、自らの前方に炎の壁を作り、再び数メートル程後ろへとゆく。
「は、はははぁ。オィぉぅィ、身体の中に武器隠してるとか……アタマァイカレてんじゃねぇか！？」
動揺のせいか、普段よりは普通な口調で言うジエル。
仁矢は手の中から無理やり武器を出したのにもかかわらず、痛みを感じていないのか、そんなジエルなど気にも留めないような口調で言う。

「別に驚く事でもないだろ？俺は暗器使い。身体の中に武器を隠すのも、暗器だ。意表を突いて殺そうと思ったんだが、失敗したな」

そう言い、仁矢は軽く剣が突き出ている右腕を振る。そうすると、血にまみれた二本の剣は地面に落ち、剣が抜けた瞬間、その開いた右拳の甲は凄まじい速度で再生していく。そして、自らの血にまみれた二本の剣を拾い、両腕で持ち、構える。

（ナルホドな……！いくら傷が開こうと、ンナモン再生しちまえば済むって事かよ、キタネェ！）

そう考え、ジエルは何を思ったか、敵を前にして右手を口に当て、顔を僅かに俯かせる。まるで、笑いを堪えているかのように。

「……何がおかしい？」

「イヤァ、やっぱ強いですねえって思っッてたンダよ。コリゃあもうオマエが天使（プラス）の器で確定じゃねェのカネぇホント」

「プラス……？何を言っている？」

「アアそっかぁー伝わんネーっすよね、口じゃあァ。俺達は天使と書いて、プラスと読んでるのよね」

「無線では神、今度は天使か。お前らは何をしようとしている……？」

「ああ、そっか。君らは内容知らないんでしたっけな。ひゃふっ、イイぜ、教えてやるよ。お喋りの時間だ。楽しく語って見せマスからよ、殺そうとしてくれるなよ？」

ジエル＝グラストは、語ろうとする。やけに、楽しそうな顔で。

その、内容は――

第十章　計画（プラン）の全容

火向仁矢とジエル＝グラストが対峙する中、燃える高層ビルの屋上からそれを傍観する女がいた。
それは、長い銀髪の、整った顔立ちをしている少女。
ビルは燃えて、いつ倒れても可笑しくはない筈なのに、顔には焦りはなく、ただ暢気にしていた。
どこかの学園の生徒なのか、その服は学生服だ。
しかし、年齢的にも学園生とも思える女は、学生とは思えない、口では表せない普通ではない、ジエルやアノマーリアとは違った何とも言えない雰囲気を漂わせていた。
少女は、仁矢と火向が話している様子を見ながら、屋上のフェンスに手をかけながら独り言のように呟く。

「あーあ……計画（プラン）を知られちゃうねー。だいじょぶなのかな？」
「大丈夫さ、衣（ころも）」

独り言に、声が返ってきた。衣と呼ばれた少女が声が聞こえた隣を見てみると、そこには世界最悪の犯罪者、アノマーリアがいた。

「いつからいたの？瞬間移動でびっくりさせるの好きだね。まぁいいや、で、だいじょうぶって何を根拠に？」

そんな普通の人間なら目の前にしただけでも恐怖を抱くであろう犯罪者に、衣は気軽に話しかける。
それだけで衣が普通の少女と違う事が窺えた。

「そのまんまの意味だ。別にばれようがばれなれなかろうが関係はないさ。ジエルが何をしようと揺らぎはしない」

「相変わらずジエルに甘いよねぇ……。ラスの命令破って目立つようなテロして正義の城と正面激突した上に、サポートメンバーの小谷とバナムまで死んじゃったっていうのに。貴方の能力でも生き返らすことは出来ないんでしょ？」
「この世界で今は『死んだ人間を生き返らす』何て事は出来ないからね。小谷とバナムが死んだのは残念だったけど、その代償に仁矢が天使（プラス）か、否かが早くも分かりそうだよ」
「そこはジエルに感謝ってとこなのかな。でも、”どっちなんだろうね”。見た感じ瞬間再生（レヘネラシオン）は天使（プラス）の能力の一部っぽい様な気がするけど」
「さぁね。それはここからの展開次第、って話だ」

二人は、視線を再び戻す。
これからの展開を、見守るように。

（別に、コイツの話を聞く必要は無い。コイツを殺してメルトに、榛原の元へ脳を持っていけばそれで済む）
「さって語るか。まず、俺らの目的は――」
（なら、今ここでするべきことは、話を聞いてやる事じゃねぇ……！）

そうジエルが語ろうとした瞬間、突然仁矢が数m程の距離を一瞬でつめ、両腕に持つ二本の剣で襲い掛かる。
それを、ジエルは驚いたものの、さっきのような焦りは見せず、変わりに目を少し見開く。
ジエルと仁矢の間に、二人を拒むように炎が発生する。
しかし、それを仁矢は右腕にある剣を使い、勢いよく振ると、剣が

炎で焼けると同時、炎の壁が切り裂かれる。

「！？」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

その瞬間、切り裂かれた炎の隙間から左腕に持っていた方の剣を突くようにしてジエルの首元へと仁矢は狙いをつけ、一気に剣を動かす。

狙いは、完璧だった。

「アヒャフャフアヒフフフフハハガガァッ！！ナンだよ！殺し合いながらの話がしたいでぇす先生～ってか！？アブねぇ子だなぁ！ひゃはは！」

しかし、その瞬間ジエルの爆笑と共に、炎がジエルの右拳に集まる。そして、その拳で襲い来る剣を掴む。

それだけで剣の先端が燃え、使い物にならなくなる。

そして、剣を先から徐々に燃やして行き、仁矢の持つ柄の部分まで燃やそうとした瞬間、仁矢はすかさず手を離し、軽く後ろに退く。

そして、退きながら仁矢は思う。何故ーーと。

（念発火（フラマ）能力者だからといって……自分が炎になるわけでもない、ただ指定した位置に発火するだけ。　それなのに……なんで奴はあれほどの炎を拳に纏って消し炭どころか焼けもしない？）

その考えを見透かしたかのように、ジエルは笑い、吠える。

「キャハヒャハヤギャヒャグヒャハハハハハアアアアアアッ！いくら念発火（フラマ）能力者のオレでも炎に触れりゃぁ火傷するハズって顔してんなぁ！？残念ながら俺くらいの念発火（フラマ）能力者になると炎なんて自

分にゃマァァァッタク効かネェンだわぁぁあ！ギャハハハハッ！オレをソコラの念発火能力者と一緒にシテたら超ォォ後悔しますよォォォォォオオオオオオオオオ！！」

獣のような咆哮とともに、ジェルが仁矢の前方へと獣の爪のような荒々しさを持った炎を出す。
それは、その距離では絶対に避けられない一撃。
その炎は、唯一再生できない場所のひとつ、脳天へと襲い掛かってくる。

「ぐっ、おぉおおおおおおおお！」

それと同時に、仁矢は雄叫びを上げ、自らの腹から大量の血と共に武器を取り出し、前方へと投げる。
そう。

大量の、ピンが抜かれた手榴弾を。

「っ！？」

ドガァァァンッ！！！

激しい轟音が響いた。
爆発の衝撃で、仁矢の体は後方に勢いよく投げ出されたが、それのおかげで、全てを燃やし尽くす炎からは逃げる事が出来た。
傷が出来るが、一瞬で再生していく。
爆発のせいで、そこら一帯から激しく煙が黙々と吹き出る。
そこから、間違いなく爆発に巻き込まれたハズなのに、火傷一つ負っていないジェル＝グラストが優々とし、不気味に笑いながら歩いてくる。

恐らく、炎で爆発を防いだのだろう。

「アブネぇなぁオイ。いくら再生能力があるカラって無茶ぁしすぎジャないこと？マァいいや。んじゃ、語りスタートだ。今度こそ黙ってくれよ？まず、俺らの目的は無線でバナムから聞こえたとは思うが神を、俺らでは神（ゼロ）と呼んでる存在をこの世に出現させる事だ。別に信じねぇでもいいが、それを俺らはやる」

「……随分とまともな口調に、そして饒舌になったな」

「ハハッそもそもオレの口調は作ってるからナァ。言葉っつぅのは割と大切なモノだ。言葉の特徴一つでソイツの人間性がわかる。人間性が分かる場合、能力の使い方もナントナク分かっちまうもんだろ？例えばオレが熱血野郎みてぇな口調だったら攻撃も単調だ、って予測すんだろ？　ソレを読ませないために作ってんだよ」

それを聞いて、仁矢は苛立ちながらも、犯罪者、ジエル＝グラストを流石だ、と思った。

実際、仁矢はジエルの口調のせいで攻撃を読みきれなかったのだから。

そう考える仁矢を少しバカにした様な表情を一瞬するが、すぐに表情を戻しジエルは話の続きを普通の口調で述べていく。

「マァんな事はどうでもいいよな。続きだ。んで、その神（ゼロ）ってのは流石はカミサマといった所でこの世界に出すにはかなぁり面倒クセェ事をしないといけねぇんだわ」

「面倒くさい事……？　……！　まさか、憤怒のフィアとバナム・ステファニーが無線で言っていた……」

「そう。アタリ。十万の人間を殺すってのだな」

「イカれてやがるな……。お前らは狂信的な宗教者にもなったのか」

「ハハハッ！　まぁ普通はイカれてるとは思うよなぁ。神を信じてる奴らが狂って大量殺人、くらいに思うよな。ま、オレ等は狂っち

ゃいるがそんな馬鹿げたコト、流石に確証が無かったらやんねぇしアノマにも手なんざ貸さねぇよ」

それを聞いて、確かに、と仁矢は心の中で思う。
元々、犯罪者ジエル＝グラストは、狂ってはいるものの今まで起こした犯罪はその能力を過信しない、計画的な、理論的な犯行だった。犯罪者にする評価ではないかもしれないが、多少は良識があるジエルが、流石にアノマーリアに、神をこの世界に呼び出したい、けどそのためには十万の命が必要だ、手を貸してくれ、などど言われてもジエル＝グラストは手など確証が無ければまともに貸さないだろう。まあ、そもそも、手を貸している理由そのものが謎なのだが、そこは今考える事ではない。
だから、火向仁矢は、嵐のジードはこの話を本当と、とりあえず仮定する。
そして、その仮定の中に浮かぶ疑問を、ジエル＝グラストにぶつける。

「その話は本当だと一応は認めておいてやる。……だが、それで何故十万もの人間を殺す必要がある？」
「イヤー。流石にそれは気になるよなぁ。いいぜ、教えてやるよ。まずな、神ってのはどうしたらこの世界に来てくれると思う？」
「くだらない問答なんてするんじゃねぇ。オマエはただ知ってる事を黙って喋ってればいいんだ」

そう言い、仁矢はジエルを鋭く血走った赤い目で睨み付ける。
ジエルは、その目に物怖じもせず、気楽そうにして、

「わーったよ。　ったく正義の使徒さんは余裕がねぇなぁ。……神はな、世界が危機に陥った時、人間が進化に行き詰ったとき、この世界に颯爽と来てくれる訳よ」

ジエルは、説明する。訳の分からない、説明を。

「世界の危機……？進化に……？」

それは、仁矢にも全く意味が分からなかった。

そんな仁矢に、頭の悪い子供に一から勉強を教えるかのような面倒くさそうな表情でジエルは説明をする。

「面倒くせぇが一から説明すっと、まず最初に、カミサマは、神（ゼロ）は万能じゃあない。ただ、全てを無（ゼロ）に、全てを進化（プラス）に、全てを退化（マイナス）にするという半端ねぇ能力を持っているだけ。そして、神（ゼロ）はその能力を使い、人間が進化に行き詰った時、その能力を行使し人間を進化させ導いていくんだ」

「！　進化……、まさか！」

「そうそう、気づいたみてぇだな。五十年前のあの光、神の光（ディオース・ルス）だっけか？　あの光は間違いなく、神（ゼロ）が放ったモンだ。結果としてあの日、進化（アバンサール・ディーア）の日以降、人間は進化した。オマエやオレみてぇに、超能力者って形でな」

「だが、仮に人間を進化させる事を可能だとしても……、何故一部の人間しか超能力に目覚めなかった？　神なら普通、全人類を進化させるものだろう。そして、何故五十年前は、光があった？　神なら、それ以上前にも能力を行使していたはずだ。だが、五十年前以前はそんな光など記録になど残ってない」

そう、そこがおかしい部分なのだ。

仮に神が、全てを進化させ、退化させ、無に出来るのなら、人類の発展には中途半端な数の人間を進化させるより、全ての人間を進化させた方がいいはずなのだ。

そして、本当に神が、神（ゼロ）がいるなら、それ以上前もその光が見えた

はずなのだ。
しかし、そんな疑問を嘲るようにして、ジエルは続ける。
「そう！　イイとこ気づいたな。それはな、神(ゼロ)は失敗したんだよ」
「失敗……？神が、か？」
「そう。何故か？　マズは、神ってのはな、何も突然出てきてくれる訳じゃあない」
「それはさっき言っていた、世界が危機に陥った時、人間が進化に行き詰った時と、さっきお前は言ってたはずだ」
仁矢は、ジエルの言葉を思い出し、言う。
それに、何がおかしいのか、目を閉じながら、少し笑った後、再びジエルは言葉を続けていく。
「そうだ。それは間違ってねぇ。でも、そこには過程があるんだよ。神が出てくるには、ちょっとした過程が必要なんだわ」
「過程……だと？」
その、ある犯罪者がよく使っていた言葉に、仁矢は少なくは無い苛立ちを覚え、思い出すが、何とか堪え、ジエルの話を聞く。
「世界には、天使(プラス)と呼んで天使、堕天使(マイナス)と呼んで堕天使と呼ばれる、神(ゼロ)がこの世に存在するために、能力を行使するために必要な”人間”が二人いんだよ」
「人間だと？　能力者なのか？」
「そうだ。まあオレラとは違って大昔から存在して、受け継がれていたらしいけどな。その能力を持った人間が死んだら、その血族がまた受け継いでまた死んだら次へ、ってカンジでな。と、まあそれは今する話じゃねぇか。問題は、その二人が持ってる能力と役割だ」

そう言うと、ジエルは不気味に笑い、続ける。

「天使(プラス)と堕天使(マイナス)は、神(ゼロ)の能力の十分の一のレベルを持っていた。天使(プラス)は進化の能力を、堕天使(マイナス)は退化の能力を、な。そんな二人の役割こそが、神(ゼロ)をこの世に存在させる事なんだわ。二人は神をこの世に存在させる事を役割としてて。神(ゼロ)は、天使(プラス)と堕天使(マイナス)が、ほぼ同時に能力を使った瞬間、この世に存在できる。それを五十年前の天使(プラス)と堕天使(マイナス)は、行ったんだが、ここである問題が起きた」

「問題……」

仁矢は、少し考え何となく予想がつく。

そう、神が失敗をする理由など、それくらいしか、ない。

その疑問のような答えを肯定するかのようにジエルは続ける。

「本来人間には、生命には見えないハズの光を神(ゼロ)が行使していた途中、片方、天使(プラス)の人間が死んだんだよ。運が悪い事に、な。そして神(ゼロ)を存在させるのに必要な天使(パーツ)が消えた事で神(ゼロ)に異変が生じ、光は見えてしまい、本来超能力者レベルにまで進化させるわけでもなく、ちょっと人間に知恵の進化を促そうとしたのに、能力が制御不能になってしまい大幅に、それも一部の不特定多数の人間に能力が行き渡ってしまい、結果オレラみてぇな超能力者が現れた。それで、それが最初のオマエの質問、何故十万人を殺すのか？に繋がんだ」

「それが、か？」

一体どんな理由になるんだ、と言いかけるが、それよりも早くジエルは話を再開する。

「本来オレラは、アノマは現代のどっかにいる天使(プラス)と堕天使(マイナス)の人間を見つけて捕まえて、操って神を召喚って方が楽なんだけどな。五十年前の天使(プラス)が死んだ時以来、その一族はバラけちまってな。いま

やどこに血族がいるのかもわかんねぇ。そして堕天使(マイナス)の方も、な。だぁからオレラは十万人以上の人間を殺すしかねぇってワケだ。小規模の犯罪集団がそこまでの人数を殺したら、迷わず神(ゼロ)はオレ達を人間の進化を行き詰らせ、世界を危機に陥れる存在として認識してオレ達を消しに現れにくるはず。そこをアノマが過程を無視した絶対催眠術をかけて操れば完成ってことだ。ま、今も天使(プラス)と堕天使(マイナス)の捜索は続けてるケドな。アノマーリアと、オレと同じプランメンバーの衣がな」

「それが、計画(プラン)……か。流石はアノマの考えた計画(プラン)だな。最高に胸糞悪ぃ」

神(ゼロ)なんて存在を出すためだけに、そんな十万以上の人間を殺すなど、並大抵の事ではない。

そんな計画(プラン)の全貌を知り、仁矢は激しく苛立つ。

そんな仁矢をジェルは一切気にせず、まだ話があるのか、続ける。

「ちなみに、プランメンバーってのはオレ達の中でも最も強く、最も迅速に十万以上の人間を殺せるだろうってヤツをオレ達の中から勝手にアノマが決めた七人だ。他のヤツラはサポートメンバー的な扱いだな。よし、コレでお話はシマイですよォ」

そして、全てを話し終わり、少しふざけた口調に戻るジェル。

「ああ……。聞かせてくれてありがとうな。そして」

そして、仁矢はあろうことか犯罪者に礼を言い、続けざまに一言。

「そんなふざけた計画(プラン)は許さねぇっ……！　オーケー！、まずは手始めにテメェを殺してその計画(プラン)を……壊していってやる！」

咆哮し、仁矢はおぞましい程の殺意を撒き散らし、ジエルへと凄まじく、荒れたような走りで襲い掛かりに行く。
それに対して、ジエルは先程までのまともな口調をすっかり取り外して、狂気に満ちた紫の目を見開き、見たもの全ての心を抉るような笑みをし、咆哮に応じるように言う。

「あギャハクかガカカキャハハハグニャハフェヤハハハハハハハハッ！コチラこそオーケェ！　まずあぁ嵐のジードォ！テメェエエエエエを手始めに殺して計画（プラン）を構築していくとシマショウかねぇェ！！この、プランメンバー、ジエル＝グラストがなァアアアアアアアアアアアアアァあああああああァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

戦いは、終わりへと近づいていく。
二人の、獣のような咆哮が、戦いの終わりが近づいてくるのを、表現していた。

＞:i231422―2076＜

第十一章　始まりの終わり（前書き）

始まりの戦い。
今、その戦いが終わる。

第十一章　始まりの終わり

「アギャフヒャギャキャクキャカガガガガァァハハハハッ！！」

薬物に、何かに犯されたような聞いてるだけで吐き気がするおぞましい笑い声を上げながら、ジエル＝グラストは自らの能力、念発火（フラマ）を使い、火向仁矢の周り一色全てを炎一色に染め上げる。

「犯罪者（バカ）の一つ覚えか！」

だが、それを仁矢は予知していたのか、すかさず炎が自身の周りすべてを埋め尽くす前に、ダッシュし、ジエルの元へと走る！

「おぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

そして、右腕の中から、血飛沫と共に、三本ほどのナイフが飛び出す。

深く身体の中に上手くめり込ませて固定させているのか、ナイフは飛び出たものの、地面へと落ちない。

そして、そのまま呆然としているジエルに、勢いよく右腕を振り、突き刺す！

しかし――――――

「！　これは、蜃気楼……っ！？」

仁矢が腕を振るった直後、ジエルの腹に突き刺さるはずが、ジエルの腹を通り抜けて、何もない空間をさ迷う。

「うキャかかかっ！残念でしたねぇ……！オ馬鹿のヒトツ覚え、ナ

メちゃだめですよぉぉお！ギャひぃッ！そんで、燃えて燃エて燃エテ焼けて焼ケて焼ケテ死ねっ！おもしろびっくり再生クソやロオぉぉォぉぉ！」

そして、遥か後ろからふざけすぎた声が聞こえ、振り返った瞬間、炎が発生する。

「なっ……」

しかし、それは今までの炎とは違った。
それは、圧倒的な規模を誇り、圧倒的な熱量を持っていた。
縦横、１ｋｍ以上はあるだろうと予測できる、馬鹿げた大きさ。
周囲にいるだけで、自身の体がもう燃えているかと思うほどの熱。
炎の中心で、ジエルが発狂したような目と、口で笑っていた。
その全てを包み込む炎が、仁矢に向かって、仁矢を燃やすためだけに、全方向から覆いかぶさってくる。縦横、１ｋｍを越す規模の、災害レベルの炎が。

（ぐっ……！　だが、こんなもの、急いで避ければ――）

そう思い、仁矢は、即座に走ろうとした。だが、

「っ」

走ろうとした瞬間、いきなり体が力を失い、ガクンと崩れ落ちる。
そして、ボタボタと流れる汗。そして体の状態を自覚して、仁矢はやがて気づく。

（熱中症――！？）

そう。仁矢は瞬間再生（レベネラシオン）という能力を持つが故に、自身の体のダメージを気に掛けていなかったので、今の今まで気づかなかったが、ジエル＝グラストは、仁矢と戦闘、そして会話中に、周囲に莫大な熱を発生させていたのだ。今までは周りの燃えている炎が熱いだけだと思っていたが。
その結果、脱水症状になり、そこから熱中症へと至ったのだ。もっと早くに気づくべきだった事だった。なぜなら、火向仁矢が有する、瞬間再生は、あくまで傷しか治せない。それは即ち。

「絶望的、ダヨナぁァあ？？？」

ジエルは、離れた所にもいるにかかわらず、はっきりと聞こえる声で、口を歪ませながら言った。
そして、両腕を左右に開き、大きく目を見開き、笑った後、

死ね

その瞬間、凄まじい速度で莫大過ぎる炎が、嵐のジードという一人の使徒を焼き殺すためだけに、一斉に襲い掛かる。
逃げる暇など、なかった。
炎は荒れ狂いながら、地面に立つ仁矢を燃やすために、そこらの、１ｋｍの地面ごと、丸々燃やし、文字通り炎の海となった。
轟々と音が鳴り響く中、炎を中心にして、ジエル＝グラストは両手を下げ、笑って――はいなかった。
その顔は、酷く複雑な感情で塗り固められており、憤怒とも、後悔とも、悲哀とも、歓喜とも呼べる表情だった。

「……」

先ほどまでのテンションが嘘だったかのように、落ち着いた様子で、

辺りを見回すジエル。
周りは、炎で包まれており、未だに仁矢に襲い掛かった超大規模集中放火は、消えない。
そんな炎を眺めていると、ジエル＝グラストの後ろに、一人の男が現れる。ゆっくりとした動作で、そして表情をいつもの狂ったようなモノに直して、見る。

「終わったのか、ジエル」
「つぅか生きてたのかよ、バナム」

そこにいたのは、甲ノ宮風歌、そして憤怒のフィアとも言う少女と戦い、自滅を選んだ男の姿だった。
顔にあった仮面はなくなり、厳つく、尊厳のある表情が晒されていた。

「生きてくれてるのは嬉しいがよぉ。よく生きれたな」
「まあ、な。途中、能力を防がれたせいで危なかったが、永久式ではないのが幸いした」

そう。甲ノ宮との一戦で、バナム・ステファニーは確かに絶対絶命の危機に陥った。
能力は無力化され、四肢は拳銃で撃たれ、身動きすら、とれなかった。
しかし、炎がバナムを包む直前、甲ノ宮の能力の効果が切れ、そして、炎が包み込む瞬間に紛れて逃げたのだ。だが、一つ疑問があったので、ジエルは質問する。

「なんで、無傷？」
「……アノマだ。今までのも、全部見ていたらしい」

成る程、とジエルは心の中で納得する。全ての過程を無視するというトンデモ能力を持つアイツなら傷何ざ一瞬で治せるコトを知っているからだ。
それよりも、後で命令違反のちょっとした罰ゲームでも受けるんだろうかと、ジエルは内心で考えていた。その時だった。

ゴッガァアアアアアアアアアアン！！！

突然、轟音が響いたと思った瞬間、会話をしていたバナムの姿が何かに思いきりブッ飛ばされて消えた。
視認など、全く出来なかった。
そして次に、ドガアンッ！！　という音が鳴り、音がした方向を動揺しながら見る。そして、気づいた。
音の正体は、バナム・ステファニーが、周囲の大型ビルの一つに、思いきりめり込んだ音だという事に。
しかも、めり込んだのは、単なるビルではなく、ジエル＝グラストの能力で燃やされていたビルだった。
めり込んだバナムは、今の衝撃で気絶でもしているのか、動かず、そのままビルを燃やす炎に焼かれてゆく。ジエル＝グラストは、発火をすることは出来るが、消す事は出来ない。成すすべも無く、悲鳴も無いまま犯罪者バナム・ステファニーは焼かれ、やがて塵となった。
余りにも圧倒的に、容赦のない、現実味のない、攻撃。その現象を起こしたのは。

「ぐっ……！　テ、テメェエェぇぇぇェエエエ！！　火向仁矢ァァァァアアア！！！」

ジエル＝グラストは、激昂し、叫ぶ。発狂した目を大きく見開き、獣のような形相で、睨む。
その目の先には、炎の海。そして、そこに佇む、火向仁矢。
何故か、炎に触れているのに、焼けるどころか、熱がる様子も微塵も感じられず、自然な様子で、仁矢は立っていた。

「消し炭にしてやるっ……！」

本来、炎が全く効いていない事に、違和感を覚える筈なのだが、ジエルは怒りで我を忘れおり普段の余裕が崩れており、何も考えず、一心不乱に炎を発生させる。
莫大な炎が、仁矢を再び、周囲の全てごと、包む。
これで、死なない訳がない。
それなのに。

「全く、手間を掛けさせやがる……。これは、アノマーリアを殺す為にだけ、使うつもりだったのにな」
「ーーーーっ！？」

炎の中から、声が聞こえた。それも、苦しんでいる様子ではなく、自然な様子の。
そして、声が聞こえた瞬間、炎は形を変え、炎の中から、全くの無傷で出てきた仁矢の周りを漂う。
ありえないーーとジエル＝グラストは思った。今の炎は、触れただけで全身を溶かすレベルの炎。いくら再生能力があるからといって、全身に一気に襲い掛かれば、再生の暇すら出来ない。そして何より、何故炎が火向仁矢が操っているかのよう動いている、という事に。
怒りは、圧倒的な現象に、抜け落ち、やっとジエル＝グラストに正常な判断能力が蘇ってくる。
そして、搾り出すように、一言。

「なんなんだよ……、オイッ……！　オマエの能力は……なんだっつぅんだよ……！？　それが天使（プラス）の能力なハズはねぇよな……！？」

それに、火向仁矢は答える。

余裕の態度で。まるで、先ほどまでの立場が逆転したかのようだった。

「俺の能力は、正義の城本部には、いや、日本支部以外のどこの連中も知らない事だが……瞬間再生（レヘネラシオン）何てもんじゃない。俺の、本来の能力は、そうだな。言うなら……」

そこで、言葉を一度区切り、言い放つ。

「『常識壊し（センティードコムン）』。”自分の身体及び、触れた、生物以外の全ての常識を変更する能力”だ」

「なんだよ……そりゃぁ……！？」

「この世界にある全てには、常識がある。身近な物で例えると、物には物によってそれぞれの重さが、常識としてある。これだけ言っても難しいな。物凄く簡単に説明してやると、触れた物が持っている常識……つまり機能とも言えるな。俺は、それを自由に、限界など関係なく操作できるんだ。俺の瞬間再生（レヘネラシオン）は、自らの身体の回復力の常識を操作して生まれたもの。炎に触れて何とも無かったのも、炎の温度の部分だけを操作し、0℃の炎という非常識的な常識に変更したからだ。操れたのも理由は単純だ。向きの常識を変更すれば、好きな風に動かせる」

「……」

ジエル＝グラストは、最早声が出なかった。そして、考えていた。

コイツは何だ、と。

アノマーリアの能力と、同じ位に、意味が分からなく、強大すぎる能力を持つコイツは、一体何なのかと。
そして、同時にもうひとつ、考えていた。
この男に勝つ事など、もう出来はしないという事に。
しかし。

「知るかよ……！　クソ餓鬼ィィィイイイイイイイイイイイイ！！死ねぇえええええええええええええええええええええええええええええええええええええええ」

足掻いた。このまま殺されてなるものかと、抗い、炎を全身に纏い、一直線に突っ込んだ。
しかし――。

「もう、終わってんだよ……犯罪者！！」

ゴガァアアアアアアアアアンッ！！！
火向仁矢の腕が、筋力やその他の力につながる常識全てを最大限まで変更した、人間の常識を超えた九条豪をさらに超えた拳の一撃が、ジエル＝グラストに突き刺さり、抗い事破壊し、同じように、バナムが叩きつけられたビルへと、思いきり叩きつけられる。
ジエル＝グラストは、炎が効かない。
しかし、今の衝撃で、ビルが完全に崩れ、それに巻き込まれ、大きな音を立てて崩れてゆき、姿が見えなくなる。
生死など、わざわざ考えるまでもない。
こうして、犯罪者ジエル＝グラストの死を持って、この序章にしか過ぎない戦いは終わった。
そう。これはまだ、序章に過ぎない――

第十一章　始まりの終わり（後書き）

仁矢の能力分かってくれてるかな……見てくれてる人。
アノマーリアの能力並みに分からないかな？
これからどんどん説明は文章中でしてくんで分かってもらえたらいいなぁ。

第十二章　相対

「……」

火向仁矢は、ジエル＝グラストが下敷きになった、全壊し、そして燃えているビルを見ながら、周囲を見渡す。
周囲は、被害が沢山目に写る。
ジエル＝グラストの世界最大級の念発火（フラマ）により、燃やされた建物、植物。そして今もなお燃え続けている建物。建物の瓦礫がそこらじゅうに落ちていて、瓦礫からも火が灯っているのが見える。
恐らく、今は目に見えていないが、瓦礫の下などにはもしかしたら逃げ遅れた一般人がいるかもしれない。そして、逃げ遅れてジエル＝グラスト、バナム・ステファニー、小谷亮達によって死んだ人間の死体もあるかもしれない。
都会だが、それなりに緑があった黒地丘市。それらが、たった一日で壊された。

何も、できずに。一週間もの間、ジエル達の犯罪を止められずに。犯罪の傷跡を修復、後始末などを担当する第五部隊の力があっても、全てを直すのには時間が掛かるだろう。
その事実に、火向仁矢は歯噛みする。アノマーリアの情報を聞き出せなかっただとか、計画（プラン）だとか、一時的にそんな事がどうでもよくなるほどに、心が憤った。

「畜生が……」

呟いた。しばらくの間、そうして立ち尽くしていると、後ろから複数の足音が聞こえた。
後ろを見ずとも、火向仁矢は、他の正義の使徒だ、と直感した。

足音の雰囲気が、普通の人間とは違うし、何よりも殆どの一般人は正義の使徒以外は皆他の場所に避難しているのだから。

「大丈夫ですか！？　ジード隊長！　無線が通じないので……心配しました。……あ、あの、これ、あ、新しいスーツです。その、着てください……」

最初に聞こえてきた声は、自身の隊の、作戦隊長の聖強のイミナ、もとい水並綾だった。杖をつきながら、早足で歩いてきて、恥ずかしそうにしながら、新しい正義の使徒のシャツとスーツを差し出してくる。

素早く、仁矢はシャツを着て、ネクタイをしめ、その上にスーツを着る。

その後ろには先ほど離れてしまった木戸大河が、第四部隊副隊長の遊動街に腕を貸されながら、歩いてきていた。その横には、隊長の心情愛もいる。

第三部隊隊長の、九条豪も、自然な様子で副隊長の楠舞と共に、歩いてくる。

その後ろには、他の仕事が終わり、急いで帰ってきてくれていたのか、全員ではないが第一部隊、第三部隊、第四部隊の総勢３００人もの使徒がいた。

仁矢は、水並に言葉を軽く返す。

「ああ、服ごと燃やされてな。心配かけてすまなかった」

仁矢の答えに、い、いえ、無事ならいいんです、と水並は笑顔で言う。

そして、木戸が遊動に手を貸されながら、呆れたような顔で言う。

「つーか無傷の奴に心配するこたぁないとは思うけどなぁ。服は燃

やされても傷一つなしとか、相変わらず反則だよなぁ、瞬間再生(レヘネラシオン)」
「うーん、それに傷一つなしというのは喜ばしい事なんだけど、何だか私の出番がいつも無くて、複雑です」
続いて、心情までもがそんな事を言う。
そんな事を言う二人に、呆れながら仁矢は言った。

「酷い言い様だな。怪我でもしろっていうのか」
「……それよりも、だ。ジード。ジエル＝グラストは殺れたのか？」
「見た感じ死体は無いようですけど、どっかにあるんですか？」

そこに、九条、楠が話を打ち切り、入ってくる。
それに仁矢は、つまらなさそうな顔で、遠く離れた全壊した一つのビルを指差し、言った。

「あそこだ。悪いが、死体は、脳はもう残ってるかはわからないな。肉片ぐらいなら見つかるかもしれないが」
「……常識壊し(センティードコムン)を使ったのですか」

陰鬱な声のトーンで、遊動が聞いてくる。
常識壊し(センティードコムン)。その能力名に、反応して。

「まあな。あんまり使いたくは無かったんだが、仕方ない。今回は簡単に殺せる奴じゃなかった」
「しかし……」
「そう心配するな、遊動。大丈夫だ。幸いと言っていいかは分からないが、無線も燃えたし、アリサ……、リアにも聞こえていなかっただろう」
火向仁矢は、自らの真の能力、常識壊し(センティードコムン)を日本支部以外の使徒に知

られることを、極力隠すようにしている。
それは、常識壊しという、強大な能力を持つことが知られたら、自身の正義の城での格が上がってしまい、最悪、本部に異動されるのを恐れているからだ。
格が上がってしまえば、犯罪者を直接殺す仕事が減ってしまい、アノマーリアを殺すチャンスが極端に減ってしまうからだ。
だから、仁矢は一番動きやすい、隊長と言う格に留まる事を決めており、それ以上の格に上がることは望まない。だから、仁矢は日本支部の全ての人間に口止めを頼んでいるのだ。他の使徒たちも、仁矢のアノマーリアを殺す、という目的の為に、協力をしてくれている。
だから、アリサの誘いに乗るわけにも行かなかった。

「そういえば、フィア……、第二部隊の連中はどうした？」

そこで、仁矢が思い出したように言う。それに、心情愛が、安心させるような笑顔で、

「大丈夫ですよ。感情装填を全力で使いすぎてしまって脳へのダメージが酷かったのですが、私の能力で戻しました。今は、正義の城へと撤退させています。問題ありません。そういえば」

そう言った心情も、また何かを思い出したように言った。

「リアさんとスカージ支部長はどうしましたか？　途中、増援に来ていなければおかしいのですが……」
「！　確かになー。俺も、ゆうど……ストラから聞いたぜ？　まだ来てないとか、遅すぎじゃねぇか？」

心情の疑問に、木戸も困惑顔になる。そして、続けて九条、楠も、

困惑の表情で言った。

「確かにな。支部長とリアの能力を考えれば、ここまで時間がかかることはないだろう」

「それにぃー。さっきから無線いじっても全然繋がらないんですよねぇー」

「何だと？」

胸の近くのネクタイに仕込んである無線が通じない。到着が遅い。正義の使徒たちは、その状況の意味を理解し始めていて、寒気がした。それは即ち――――

「敵に襲撃された。この状況だとそう考えるんだろ？」

「「「っ！？」」」

声が、聞こえた。方向は、すぐ後ろ。それに驚き、身構え、正義の使徒たちは素早く振り返る。

「素早いなぁ、ホントに。同じ人間なのか？　動きが早すぎるっての」

そこには、誰よりも人間とは思えない、異常なる存在、最悪にして異常なアノマーリアがいた。まず、最初に異常だったのが、声だ。すぐ後ろから聞こえてきたはずなのに、仁矢たちより７０ｍは離れた後方にいたのだ。いや、最早そんな事はどうでもいいと思えるくらいに、目の前の男の異常さは際立っていた。五十は超えてるハズの年齢に一致しない、若々しい、銀髪の髪に、青い瞳の青年。そして青年であることをを強調するかのようなフードつきのチャックがついている半そでの服に、ジーパン。年齢の事も、異常ではあったが、”違うのだ”。

今、異常(アノマーリア)が現れた瞬間に、この場にいる正義の使徒全員は、雰囲気が異常だ、と感じた。
言葉にすると安く、馬鹿馬鹿しいことだが、本当に、雰囲気が異常であったのだ。
ジエル＝グラストの比ではない。今、歩いて、呼吸して、喋っている事自体が理解できない、というくらい、なんとも言えない異常すぎる雰囲気がにじみ出ていた。人を前にしてる筈なのに、目の前の人間が人間と言うのはおかしい、とも思える異常さだった。いっそ、目の前の人間が世界中の不可解で作られた何か、と説明されても信じかねないほどに。
そんな、世界で最悪であり異常である存在、アノマーリアに正義の使徒たちは、構えながらも、誰一人としてアノマーリアに襲い掛かる事が出来ずに動けなかった。
恐ろしさと異常さ。
それらを肌で直接感じた正義の使徒たちは、目の前の存在には、如何なる常識も通じないような、そして、寒気を軽く通り越す程の異常さを感じ、動けず、ただ、構えている事しか出来ずにいた。
そう。
恐ろしさなどよりも、憎悪の感情が圧倒的に上回っている、火向仁矢以外は――――――――
「アァァァノォォォォォマァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッ！！！！」
火向仁矢は、獣のように、理性をそのままブチ壊されたかのような大声を張り上げ、目の前の異常な存在の名を叫ぶ。
そして、近くにあったジエル＝グラストの念発火(フラマ)で焼け崩れたビルの破片、５０ｃｍほどの岩を思いきり自分の右足で蹴り飛ばす。

ガコォンッッ！！　という音が響く。
それは、ただの岩ではない。常識壊しによって、重力、力の向き、自らの脚力、それらの常識を最大限に変更した、最強の一撃。人間どころか、まともに当たれば富士山など一瞬で消し飛ばせる程の、常識知らずな一撃。それは、凄まじい速度で、アノマーリアを粉々にするべく、飛んでいく。向きの常識すらも変更された一撃は、決して外れる事はない。故に、アノマーリアに防ぐ術はなく、このまま体が破壊されて死ぬしかなかった。

しかし、そんな常識は目の前の異常に、通用するはずなど、なかった。

岩がアノマーリアの眼前まで迫った瞬間、触れればそれだけで腕が豆腐よりも脆く見えるかのようなレベルで壊れる筈の岩を、アノマーリアは戸惑うことなく、ポケットに手を突っ込んでいた両手の内、右手だけを出し、触れる。その時点で、アノマーリアの腕は、壊れるのは確定のハズだった。
しかし、壊れなかった。そして、あろうことか、それを軽く手で払う。
斜め上の燃えていたビルの一つに直撃し、ビルが、激しい轟音を立てながら、倒壊していく。

「ーーーーーーーーーー」

それを見た、火向仁矢は驚愕する。あの一撃を手で払っただけで防ぐなど、並大抵の事ではない。
そして、同じように他の正義の使徒たちも、仁矢と同等か、それ以上に驚愕し、表情を恐怖に染め上げる。それもそのはずだ。仁矢の能力を知っている物からすれば、あの一撃がただの一撃ではない事など、知っている。そして同時に、並大抵の事では、いや、世界中

の正義の使徒全員集めても、防げる一撃ではない事も。
そんな異常を生み出した男は、ただ、当たり前の事のように、軽い表情でいた。
そう。彼にとっては、当たり前の事だ。
自らの能力、”この世界で出来ることに限定し過程を無視した結果だけを発動する”絶対（アブソルト）を持つ彼にとっては、これは異常ではなく普通なのだ。
手で払うという動作を行えば、あらゆる過程を無視し、手で払うという結果を出力するのだから。
異常（アノマーリア）は、軽く、少し苦笑した表情で、言った。

「再会記念にいきなり顔面岩ころシュートなんて、随分恐ろしいことしてくれるなぁ、仁矢。しかし久しぶりに会っても、相変わらず血も繋がってない他人だってのに俺と顔が少し似てるなぁ。運命なのかなコレは」

その言葉に仁矢は、あっさりと、文字通りの必殺な筈の一撃をあしらわれた事に、内心では驚き、詳細が分からない、異常な能力に動揺しながらも、表情と声には出さず、怒りのみを出し、言った。

「そうだな。運命だ。俺がお前を殺す、そういう運命だ。また会えて、殺したいほどに嬉しいぜ、最悪の犯罪者、異常（アノマーリア）」
「ははっ、どいつもこいつも全く。俺にあったら殺すは絶対に言うんだな、哀しい哀しい。王城最……神童のスカージにもさっき再会していきなり殺すって言われたしなぁ。全く、嫌われちゃったもんだね、ホント」
「！　まさかっ、スカージ支部長達の無線が繋がらないのは……！？」

水並が、声に焦りを混ぜ、大きな声で言った。それに、アノマーリ

アは水並の方を向いて、少し笑って、

「あー。無線ね。ちょっと戦闘になってね、電撃飛ばした。多分、そん時の電流で壊れてるんじゃないのかなあ。いやぁ、悪いな。無線機って結構お金かかってそうだし、なんか罪悪感がちょっと来るね」

その一言で、正義の使徒たちは、一斉に動いた。恐怖より、怒りが打ち勝ったのだ。

「き、さまぁああ！！！」

九条が一瞬でアノマーリアの近くまで移動し、人間の限界を超えた、最大級の力を込めた、拳をアノマーリアの顔面へと、叩き込む。

「あっぶない」

しかし、それを軽く避けるアノマーリア。しかし、それだけには留まらない。

第一部隊、第三部隊の総勢200人もの使徒が、各々の能力を使い、アノマーリアへと向かっていく。

第一部隊は、第一部隊特有の、希少な能力を、第三部隊は、第三部隊特有の、接近戦向けの能力を、アノマーリアへと放つ。

そして、それらと同時、木戸は自らの能力は使う。

「幻想起動（ファンタシア）！！　幻想内容は”複数の能力の攻撃がアノマーリアへと全ＨＩＴする！”　幻想起動条件に”能力”を選択！」

これにより、正義の使徒たちの能力攻撃は、アノマーリアへと全てあたる事になった。最早、逃げ場はない。レーザーのようなもの、不可解な霧のようなもの、でかいこん棒のようなもの、巨大なランス。それら全てがアノマーリアへと向かう。
そして、
それなのに、アノマーリアは、ただ、ただ笑っていた。そして、アノマーリアが少し何か呟いた瞬間、その右腕に、歪な、縦幅３ｍはありそうな十字架の形をした銀色の塊が出現する。その十字架は、上の部分のアーム以外の３つのアームはすべて先が尖っていた。よく見ないとわからないが、十字架の全ての箇所は物を切れるように、鋭くなっている。そして、尖っていないアームの箇所は、長さ２ｍ、太さ５０ｃｍの太い鎖のチェーンが硬く縛られており、それの先端をアノマーリアが手に絡めるように握っている。

「はいよっと」

そして、その鎖を軽々と振るう。
そして、その十字架に能力、武器などがぶちあたる。
そして、異常な事が起こった。
それらが全て、”斬られた”のだ。
レーザーのようなものも、不可解な霧のようなものも、こんぼうのようなもの、ランスのようなもの。そしてその他にも大量の能力、武器の攻撃がアノマーリアに襲い掛かったにも関らず、その全てが斬られて、意味をなくした。
絶対（アブソルト）だ。
斬るために必要な全ての過程を壊し、触れた物全てを斬る、十字架となったのだ。
それは、例えどんなに特殊な能力を持とうが、触れた瞬間、如何なる物も斬れる。

「なっ！？」

能力をそのまま斬られた使徒たちは、唖然とする。そしてそんな使徒たちを見て、アノマーリアはニコリと歪んだ笑みを浮かべ、

「正当防衛って知ってるよね？　俺はあんたらに殺されそうになった。だから、殺すよ。まあ、死ぬのは怖いだろうけど、どんまいって事で納得してくれよ？」

そう言い、周囲の、主に接近戦をしていた第三部隊の使徒たちに向けて、思いきり鎖を、十字架を振るう。

「ぐっ！　皆、受けるな！　避けろっ！」

そう叫び、九条は十字架を何とか避けることが出来た。しかし。ズパパパパパッ！　という、綺麗すぎる何かが斬られた音がした。それは、第三部隊の正義の使徒達の何人かが、体の真ん中、腹の部分を綺麗に斬った音だった。

そう。今の十字架は、人間の限界を超えた、九条でも避けるのが辛いスピードだった。

恐らく、能力を使い、速度を上げたのだろう。

九条に及ばない使徒達では、避けることなど叶うはずもなかったのだ。

それに、戦闘では活躍できない、心情と遊動が駆け寄っていく。

「貴様ァァアアアアアアアアアアアア！！！」

とっくに絶命したと思われる仲間の使徒たちの無残な姿を見て、九条は頭に血が上り、叫ぶ。冷戦のクレイなどとは呼ぶことができない程に、激昂していた。

そして、思いきりアノマーリアに、凄まじい速度で飛び掛る。
しかし、それにも関らず、アノマーリアは九条をしっかり見据えて、十字架を振るう。
どんな効果や硬さがあっても絶対に斬る殺す十字架を。

「やめろクレイっっっ！！　……くそっ！　聞いてねえ！　頭に血が上りすぎてやがる！　……クソッタレがぁあああッ！」

仁矢が叫ぶが、九条は止まらない。仁矢は舌打ちし、即座に足元にあった、小石を蹴り上げる。
それは、力の向き、重力などの常識を変更した、先ほどの一撃。
ただし、狙うのはアノマーリアではなく、九条。
それは、アノマーリアに飛びかかる九条のわき腹に勢いよくぶち当たり、十字架の切っ先のコースをそれて、横にへと思いきり九条の体が、跳ねていく。やがて、地面に倒れ、気絶する。
副隊長の楠が、慌てて駆け寄っていく姿が見えた。

「へぇ。仲間に容赦ない事するなあ、あんた。あれ、俺にさっき飛ばした奴でしょ？　死んじゃってるんじゃないの？」

九条を仕留めそこなった事などどうでもいいかのように、気楽な口調でアノマーリアは言いながら、右腕に絡まっている鎖のチェーンを振るって、自らの元に十字架を引き寄せ、十字架を地面にゴトリと垂らす。
仁矢が九条を気絶させたのは、これ以上続けても九条が怒りに囚われるだけで無駄死にをする可能性が十分にあったからだ。殺意は、多ければ多いほど、その心に囚われて自滅をする、というのはよく漫画などであるが、それは実際には仁矢たちからしては違う。
殺意が多ければ多いほど、仁矢たちは犯罪者を、敵を殺すためにはどうすればいいのかを、犯罪者達が憎いからこそ必死で脳が本能的

に考えて、殺すための方法を幾つも無意識に考え、殺す。しかし、それは普通のレベルでの犯罪者の話だ。
目の前の、普通とは最もかけ離れた、最悪である異常（アノマーリア）に、それは通じない。
殺意が多く、幾ら考えても、殺せるどころか逆に殺されてしまうレベルの犯罪者。
だから、仁矢は九条を気絶させた。あのままにしても、絶対に九条は殺されるだけだったからだ。
仁矢は、歯を食いしばり、殺意を全身に込めながらも、出来る限り殺意を、世界で最も自分が憎む男へと抑えながら、口を開く。

「……威力はさっきのとは違う、怪我なんてしようがないレベルに抑えた。それよりも何の用だ、最悪（糞野郎）。俺に殺される為に来たか？
それとも、ジエル＝グラスト達の敵討ちって所か。どっちもお前らしくはねぇが、前者だったら最高だな」
「殺されるとか、面白いな。俺にそんな狂ったようなマゾ気はないよ？　まあ、ジエル達があんたらに殺されたのはさ、非情に残念で悔しくて憎らしくてたまらないけどさ。敵討ちもしたいなとは思ったけどな」

そうして、アノマーリアは本当に仲間が死んで悲しんでいるらしく、顔を少し俯かせた。
しかし、すぐに顔を上げると、普段の、軽く、何を考えているか読みきれない表情に戻り、少し笑いながら言った。
その爽快さが、嘘ではないのに、仲間を本気で心配していたのが嘘だったかのようだった。
そんな事すら、異常だった。

「ま！　人を恨んでも仕方ないしな。あんたらだって仕事だったんだし、しょうがないしょうがない。それに、ジエルのお陰で、あん

たらの戦闘のお陰で、天使(プラス)の器がほぼ確実に分かったしな。これは敵討ちなんて忘れられるほどにイイ事だ」

天使(プラス)。その単語に、仁矢とアノマーリア以外の全ての人間の顔に困惑が現れる。話が分からない、といった具合で。

しかし、その意味を知る仁矢は、驚愕の表情を露にする。

天使(プラス)が分かった。それは、アノマーリア達の、目的、恐らくは確実にまともではない目的を達成させることに、一つ近づいたと同じ。

「なんだとっ……！？　さっきので、何が分かる！？」

「そっか。仁矢達はあれを自覚してないのか。そりゃあ、まあそうだよなあ。知らないと分かるわけもないか」

そう言い、アノマーリアは一度目を閉じ、再び開く。

そして、言った。

「火向家が天使(プラス)の一族だなんて、知るわけがないよな」

「なん……だと……？」

仁矢は、アノマーリアが放った言葉に、ただ、ただ驚き、呟く。

そんな仁矢を無視しながら、アノマーリアは話を進める。

「元々な、あんたの血族全員を殺したのも、それに繋がってるんだよ。俺は十三年前、あんたとその妹の血の繋がった人間を殺した。俺への殺意が芽生えたと同時に、不思議には思っただろう？　なんでこんな理不尽に、俺の血族だけがピンポイントで殺されたんだ、とか」

そう。アノマーリアの言葉通り、仁矢は血の繋がった全ての人間を

殺された時から、強い殺意と、そして、強い疑惑を持った。普通の一家が、何故、世界的大犯罪者に殺される事になったのか、と理不尽に、思っていた。
しかし、仁矢の血族が、天使（プラス）の一族だったのなら、話は変わってくるかもしれない。

「なら、お前が俺と血が繋がった人間を殺したのはっ……！」
「そう。天使（プラス）絡みだよ。いやあ、あの時は苦労したぞ、本当に。五十年前にあんたの血族がばらけてから、探し出すのに何十年もかかってね。ようやく見つけたと思ったらそれらしい能力を使える奴は、一人もいない。しょうがなく、生かしておくと後々で色々面倒くさくもなりそうだったから、殺したんだ。でもまあ、子供はまだ後で能力が発言する可能性があったからな。当時、血族だった中で子供だったあんたと妹だけは殺さなかったって訳」

そう言い終わり、長話は疲れるな、と言いながらアノマーリアは頭を掻いた。
そのアノマーリアの言葉に、五十年前の事に、そんなくだらない理由で殺された事に怒りを隠せないでいたが、仁矢は、ある、別の事だけで、頭が一杯だった。それは。

「ま、さ……か……。天使（プラス）の器っていうのは……」

仁矢には、天使（プラス）の能力など、心当たりは無い。常識壊（センティードコムン）しと言う、人並み外れた強力すぎる能力を持ってはいるが、天使（プラス）の能力など、持ってはいない。しかし。
ならば、誰が今現在、天使（プラス）の器だと言えるのか――――？

「そう。火向愛理。あんたの妹こそが、現在において、天使（プラス）の器を

持つ人間なんだよ！」

信じたくない、信じがたい、信じられる訳が無い、それでいて、確信できてしまう答えが、アノマーリアの口から放たれる。
火向愛理が、天使（プラス）の器。
その事実に、仁矢の脳が、感情が、大きく揺さぶられた。

「く……そっ！」

火向仁矢の、嵐のジードの正義の使徒として掲げる正義は”愛理の世界を守る事”だ。
幼い頃、アノマーリアに親類全てを殺され、自分達の平和な世界（ばしょ）を壊され、愛理が哀しんだ時に、誓った事だ。
愛理の世界を、もう二度と壊させない為に、愛理の今の優しい平和な世界（ばしょ）を犯す可能性がある犯罪者（やつら）、犯そうとする全てを叩き潰し、愛理の世界（ばしょ）に必要な全ては守る。
そう、決めた。
しかし、今、此処に、かつて自分の、愛理の世界を壊した最悪の人間が、また、壊そうとしている。
その事実に、仁矢の心に、激しい怒りと殺意、いや、この世のありとあらゆる負の感情が、一気に押し寄せてくる。
そんな仁矢を楽しそうに見ながら、アノマーリアは、仁矢の感情を爆発させる言葉を、告げる。

「当然、あんたの妹、愛理は貰うよ。俺の、俺達の目的のためにな」
「こ、の……っ！　クソ、野郎がぁぁぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああっっっ！！！」
感情が、爆発する。負の、感情が。

九条に冷静になれと言っておいて、冷静になる事を、完全に放棄した。
しかし、最早そんな事はどうでもいい。
今、優先なのは目の前の最悪の人間を殺す事。
理性など、必要は無い。

「殺す……！　おまえだけは、絶対に……絶対に殺す！！　させねぇぞ……。二回も、愛理の世界（ばしょ）を壊させなんてさせるかよォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

獣、などでは言い表せない程の声で、吠える。
そして、敵を殺すため、最強とも言える能力を、開放する。
全ての常識を壊す、常識壊し（センティードコムン）を。
ありとあらゆる常識を変更して、最速すらを超えたかのような速さで、アノマーリアへと向かう。
水並が、木戸が、他の使徒達の制止の声が聞こえた気がしたが、関係ない。
そして、腕を思い切り、振る。その振る動作すら全く見えないレベルの速さの拳は、アノマーリアへの顔面へと向かう。
あたれば、顔面の骨が砕け散るどころか、頭がそのまま飛ぶであろう、壊せぬものなどない容赦ない常識なしの拳を。
そんな仁矢の拳の威力を知っているアノマーリアは、それにすらただ笑いながら、

「駄目だよなあ。そんなんじゃあ、そんな能力じゃあ、所詮過程じゃあ全然駄目なんだよなあ！！」

大きく吠えながら、アノマーリアは右手の鎖を振り回し、正面に十字架を立て、一瞬で防御の壁を作る。
あの速度で対応したのには、仁矢も少なからず異常さを垣間見たが、

そんなのは関係ない。
全てを壊す、この常識知らずの一撃に耐えられる物など、ある訳がない。
それなのに。
ガキィィンッ！

「なっ……！！」

仁矢の拳は、十字架を壊すどころか、傷一つもつけることができなかった。
それは――――。

「絶対（アブソルト）」

アノマーリアが、微笑しながら呟いた。

「それが、俺の能力。この世界で出来ることは、俺は全て過程を無視して結果として出力できる。物質で、十字架で攻撃を防ぐ。それは、あらゆる過程を無視して、全ての攻撃を防御できる。だから、あんたのそんな過程（こうげき）なんて効く筈が無いんだよ！！」

そう笑いながら言い、アノマーリアは鎖を操り、思いきり十字架を仁矢に振る。
四方向ある内の、下の部分のアームが仁矢の胸を、思いきり斬る。
血が、噴出す。その瞬間、バキィンッという音が響き、常識壊し（センティードコムン）で無くしている筈の痛覚が戻り、絶叫する。

「ぐっ、がぁあアアア

アアアアアっっっ！！？」

そして、再生、しない。回復力の常識を変更して、すぐに再生するはずなのに、再生する様子が、微塵も無い。

仁矢は、長らく味わってこなかったダメージを受け、膝から地面に崩れ落ちる。

「ジード隊長っ！？」

「ジードォオオオオオ！」

「ジードさんっ！！」

後ろから、水並や木戸、そして他の使徒たちの声が聴こえた。

アノマーリアは気軽な調子で、言った。

「俺の絶対（アブソルト）は、過程なんて関係なく平等だからな。斬るという結果だけが生み出されたから、その結果を妨げる要因の過程、能力は作用しない」

「く、そがっ……！　ふざけた能力、持ちやがって……！　がっ……！」

仁矢は、愛理への思いを糧に、立ち上がる。胸から血が、零れ落ちる。

立ち上がりながら、仁矢は悔しくも、腹立たしくも、目の前の男に適わない事を、認めていた。

五十年経って、圧倒的に強くなった筈なのに、目の前の最も憎むべき相手に全く適わないことに、どうしようもない怒りと、悔しさを、覚えた。

勝ち目など、ない。しかし、立ち上がらない訳にもいかない。なぜなら。

「愛理の世界(ばしょ)を、壊させなんかさせねぇっ……！　連れてかせなんか……させるかよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！」

吠える。力を振り絞って、アノマーリアへと向かっていく。後ろから、正義の使徒達の声が聞こえた。悲鳴のような、叫びのような。それを気にせず仁矢は突っ込み、殴りかかりアノマーリアは少し笑うと再び十字架を振ろうとして――――。

「はいはーい、ストップストップ」

突然一人の銀髪の少女が二人の攻撃の隙間に現れた。しかし、攻撃はもう止まらない。
確実に、仁矢とアノマーリアの全てを破壊する拳と、全てを斬る十字架は、あたる。

「なっ！」

どこかの学園の制服を着ていることから仁矢は、一般人か――！？
そう判断して、拳を引こうとするが、もう、間に合わない。
拳と十字架は、少女へと向かい――――。

”反れた”。

「な、に……！？」

その光景を見た、アノマーリア以外の全ての人間が、驚いた。
当たる筈の、二人の攻撃が、反れたのだ。
しかし、驚くべきことは、それではない。
”反らされた”のではなく”反れた”のだ。

仁矢は、確かに拳が当たりそうだった。しかし、途中でありえない事に少し地面のコンクリの残骸に足がバランスを奪われ、反れた。完全な、自分のミスだった。
アノマーリアは十字架を振るって、あろうことか、十字架に引っ張られ、直撃が反れた。十字架が、地面に突き刺さる。こちらもまた、完全な、自分のミスだった。
そんな不可解な現象が起きた事を、まるで何とも思っていないかのように突然現れた少女は、微笑を浮かべながら、アノマーリアに向けて言った。

「はいはーい、何やってるのよアノマ。火向仁矢（その人）殺したら駄目でしょーに。今回の用件は違うでしょ。全く、本当に世話が焼けるなあ」
「あははは。悪い、悪い。ノリ敵になんか殺さなくちゃいけない雰囲気だったんで」

そう言いながら、アノマーリアは鎖のチェーンを振る。すると、一瞬で十字架が消える。
それも驚くべき事だったが、仁矢にはどうでもよかった。そして、疑惑を少女にぶつける。

「お前は……誰だ？」

アノマーリアと気楽に喋っている事から、普通の一般人ではない事が分かったが、犯罪者でもない。仁矢は世界中の犯罪者の名前と容姿を一つの例外も無く覚えている。その中に、目の前の少女などいた記憶が無い。
その問いを受けて、少女は口を開く。だが、その答えは、少女の言葉を封じて、予想だにしない人物から帰ってきた。

「衣義姉（ころもねえ）さん！？」

それは、仁矢の部下、水並綾の声だった。その表情は驚きに染まっている。

「姉さん、だと……！？」

仁矢の表情も、使徒達の表情もまた、驚きに染まり、少女へと視線を浴びせる。

その視線に少女は答えるように、髪を軽く右手でとかしながら言った。

「はいはーい。久しぶり、綾。初めての人は始めまして。水並綾の義姉、衣（ころも）です。職業はプランメンバーです、なんてね。よろしくよろしく。いやーうちのジエル達やアノマが迷惑かけてホントにホントにゴメンねー正義の使徒の皆さん方」

「ごめんで済むか……。そいつらのせいで、何百人の人間が死んだと思ってる！　お前がイミナの、水並の義姉だか何だか知らないが、そいつの仲間だと言うなら、容赦はしないぞ」

「おっ、おー。怖い怖い。そんな怖い目と声音で言わないでよ。イケメンが台無しだよ？　まあ今日はもう帰るからさ。それで許してくれないかな？」

「ここで……退くって言うのか？」

その言葉に、衣は右手の人差し指を顎にあてながら、言った。

「うんうん。だって愛理ちゃんはまだぁ、天使（プラス）の能力に目覚めてないみたいだから今連れ去っても意味ないし、それに、君を殺しちゃったら大事な大事な天使（プラス）の器が自殺とかしかねなそうだからさあ。やること無いから退くしかない訳。とゆー訳なんだよ、んじゃ帰るよアノマー。綾もじゃあねえ」

「ま、待って義姉さん！　何で、何でアノマーリアと何か一緒に……！」

その言葉を聞いて、衣は何も答えず、変わりに今まで何も発さずにいたアノマーリアが、楽しそうに笑いながら、言った。

「酷い言われようだな、俺も。まあ慣れたけど。なに、簡単な事だ。衣と俺の目的が、ただ一致してるってだけの事だよ。だからいるんだ」

「目的って、まさか……！　義姉さんっ！？」

またしても水並の叫びに応答せず、衣はただ黙っているだけ。口に微笑を浮かべながら。

「ま、とりあえずは今回はコレで終わりだ。またね、正義の使徒達」

そう言いながら、衣の体に手を触れるアノマーリア。そして、その瞬間、二人の体は消えた。

恐らく、瞬間移動系の能力でも使ったのだろう。

「く、そっ……！　待て……っ！」

そう言った瞬間、仁矢の体が崩れ落ちる。

久しぶりに受けた大きなダメージで、意識が途絶えてゆく。

緊張感がとけ、一斉に正義の使徒達が、駆け寄る。

途絶えていく意識。そして、途絶えてゆく意識の中、仁矢は懐かしい、忌まわしい、過去を夢に見るような気が、した。

それは、火向仁矢の人生を大きく狂わせた日の夢。

意識を話したら絶対に夢に見てしまう、と思った仁矢は必死に意識を保とうとしたが、やがて抵抗むなしく、仁矢の意識が途絶える。

そして、思い出したくない、忌まわしい、最悪の過去が、今、思い返される。

第十二章　相対（後書き）

やっと話が見えてきた気がします・・・

第十三章　忌まわしい過去　そして、不安と恐怖（前書き）

またまた長いです。
駄文の上に長いとか最低ですよね、ホント。
読んでくれてる人には大感謝です。いや、もうソレ超えてるかな。
超大感謝？ですかね。
それはまぁいいか。
今回は仁矢の過去、そして水並がメインです。
……少し恋愛も混ぜてみたので、楽しんで貰えたら幸いです。

第十三章　忌まわしい過去　そして、不安と恐怖

火向仁矢は、とても恵まれていた。
優しい母と父。そして可愛い妹。それなりに大きな家。それなりにあるお金。莫大な家族の愛。
何から何まで十分すぎるほどあって、幸福だった。
１３年前までは――――

その日の遠足帰りの夕方、幼稚園生だった仁矢と愛理は二人で幼稚園のバスに、家の前まで送ってもらった。普通の二階建ての一軒家だった。

「あれぇ？　おかしいなぁ。仁矢くんと愛理ちゃんのお母さん、まだ出てきてないねぇ～」

普段ならバスが来た時間に家の前で迎えてくれる母の姿が、今日は無かった。少し疑問に思った幼稚園の先生が、不思議そうに言った。

「だいじょうぶです、先生。たぶん、お母さん達は仕事で忙しくて出るひまがないだけだと思いますから。だから、おろしてもらって大丈夫です」

仁矢と愛理の母と父は、家での仕事をしており、偶に仁矢と愛理のバスが来るのを忘れてしまう事があった。仕事内容は当時幼かった仁矢達には知る由も無いが、忙しかったのは間違いない。

「それじゃ、さようなら、せんせい」
「さようならー！せんせいっ」

それを知っていた仁矢は、そう言って、妹の愛理の手を引いて、先生に礼儀正しくお辞儀して、バスを出る。愛理も元気よく、さようならを言った。
先生が、手を振り返し、バスが発進して、やがて姿が見えなくなる。
それを見送って、家へ入ろうとした時、愛理がふと不安げに言った。

「でも、へんだねー、おにいちゃん。今日はしごとないって言ってたのに」
「うーん。きゅうに仕事がはいっちゃったんじゃないのかなぁ。なんの仕事かはわからないけど、けっこういそがしい仕事みたいだし」

そう言いながら、二人は家に入る。
不思議な事に、鍵が掛かっていなかった。
そして、ここから、二人にとっての悲劇は始まった。
ブシャァァッ！！　という、嫌な音が、家に入った瞬間、聞こえた。

「ぎゃぁあああああああああああああっ！？　やめ……、ゥゴッ、ぴギッ、ぷぎャ、ぴ、ぎ……あァツ、……ァッ！ァ、ァ、ァがッ……」

そして、次にバキン、ベキン、ボキキキッ！！　という音が響いた。
嫌な音だった。まるで、骨を余すところ無く潰した様な、音。

「い、いやっ……！　な、な、にこれぇっ……！？」

愛理が、断末魔と骨のすりつぶす様な音を聞いて、耳を塞いで目に涙を溜める。
しかし、そんな事よりも、仁矢は違う点に恐怖した。
苦しみ、叫ぶ、断末魔のような声にも恐怖したが、一番恐怖したのは声音だ。

あの声は、自分の父親の声ではないか――――？

「とうさんっ！？」

「お、おにいちゃんっ！？」

そう考えた瞬間、体が動いた。愛理の声が後ろから聞こえたが、足は止まらない。

走り、声のするほう、リビングへと向かう。

そして、見た。

文字通り、辺り一帯が血の海になっているリビングを。

「な……にっ、これ……！」

絶句する。仁矢は、目の前にある風景を現実として受け入れられないでいた。

「あれ。……こりゃ可愛いのが来たね。こいつらの息子かな？」

「っ！」

声が聞こえた。それは、リビングの奥。カーテンが掛かった、外へと繋がる窓ガラスの付近にいた。

夕方で少し暗く見えなかったが、目を凝らすと、見えた。

全身に返り血を浴びた、銀髪の男の姿が。

そんな姿の男に、恐怖を覚えたが、次に目に飛び込んできたものを見て、更に大きい恐怖によって上書きされた。

男の足元に、何か、塊があった。

肌色の肉のようなもの。そこから、白い硬そうなものが飛び出ていて、そこから血が溢れている。黒い毛の様な部分もあった。

まるで、人の肉のように――――

「ひっ！？」

それを幼くも理解した仁矢は、恐怖で後ずさる。
それを見た男は、不思議そうな顔に一瞬なったが、下のその肉の塊を見て、納得したような顔をすると、言った。

「成る程。これが怖いわけかあんた、いや、君は。いやあでもそんなに怖がっちゃ可哀想だよ？　だってこれ――――」

そう言いながら、その血だらけの肉塊を右手でひょいと躊躇いもせず、とって、前に突き出し、言った。

「君の、お父さんなんだから」

「――――」

その言葉の意味を、正しく飲み込めず、ただ、呆然とした。
そして、ゆっくりと、仁矢は目の前の肉塊を観察する。
それは、全ての骨が砕かれ、上手に折りたたまれ、ボールのような形をしている、肉の塊。
しかし、そのボールに、目と髪があった。
その目は、狂気に、恐怖に犯された目。そして、茶色の髪。
そして、仁矢はようやく分かった。

これは、全身の骨をくまなく折られ、皮膚を裂かれ、血を噴出して、ボールの形にまで潰された、父、火向義一（ひむかいぎいち）の死体だ、と――――。

「!?　おェっ!　ゥっ!　ゲボッ!　ゴプゥッ!　げェッ!?」
それを理解した瞬間、仁矢の全てが余すところ無く狂う感覚がし、その瞬間には、吐いていた。
その様子を見ながら男は、この歳でこんなん見てよく気絶しないもんだな、と適当に呟き、持っていた肉塊を、乱暴に床に放り捨てる。べちゃっという音がした。
そうしてる間も、仁矢は、吐き、吐きつくした。
どれくらいかは分からない。十秒だったか、一分以上だったか、十分以上だったか。
ただ、体から全てが抜け落ちた感覚がするほどに吐いたことだけは、分かった。
そして、吐きつくし、変わり果てた父の姿を見た仁矢は、涙と鼻水と汗と胃液にまみれながら、アノマーリアに問う。

「なんで、なんでこんな事を……。なん、で……っ!」
「なんで、ねえ。まあそれよりも、そう泣くなよ。子供とはいえ、男だろ?　君のお父さんは叫びはしたが泣きは最後までしなかったぞ?　お母さんもだ。こんなくだらん過程で泣くなよ。お父さんとお母さんを、見習え」
「!　そうだ……。お母さん、お母さんはどうしたっ……!?」
男の言葉で、母の存在を思い出し、仁矢は叫ぶ。
父が死んだ事で、今にも頭が可笑しくなりそうだった。母の安否を確認して、少しでも頭を落ち着かせたい、安心したい。そう思ったから、聞いた。
そんな仁矢の思考を見透かしたかのように、楽しそうな笑みを浮かべて、アノマーリアは、言った。
「そこにいるけど?　少し、面白い事になってるぞ」

右手の、人差し指をある場所に向ける。
それは、壁。何もない、普通の、壁。しかし、一つだけ異様な物があった
何かが、張りつけられている。
それは母親の、火向椎名（ひむかいしいな）だった。

両腕を横に広げ、その手のひらに、十字架が刺さっていた。
そして、そろえられた両足にも、十字架が刺さっていた。
全部で四本の、平均的な大きさの十字架。
刺された箇所から血が、壁から床へと伝う。

「なっ……！　おかあさんっ！」
「うっ……ぁ……仁、矢……。駄目、逃げて……」

返事が、あった。か細い、返事が。
死んではいなかった。しかし、確実に、体から生気が感じられない。
血が、足りていないのだ。
口から血を出し、汗を噴出し、その顔は苦痛と恐怖に囚われている。
そんな母親を見て、アノマーリアは口元に笑みを少し浮かべながら、
この場に似つかない、気軽な調子で言った。

「逃げて、か。漫画とかで見るとチンケに見えるモンだけど、実際に見ると相当に感動できるな。けどまあ、使いどころが間違ってるな。あんた達は殺すけど、あんたの息子は殺さないさ。だからまあ、心配しないでイイさ」

そう言い、男は右腕を振る。その手には、何時の間にか、平均的な、先が尖っている、十字架があった。

「やめっ―――――」

仁矢は言いかけたが、体は動いてくれなかった。情けなくも、恐怖に動きを封じられたのだ。
そして、十字架は、勢いよく。

グサリと、母の胸に、突き刺さった。

叫び、段々、叫ぶことすら出来なくなり、やがて、その体からは力が失われてゆく。
その光景を仁矢はただ、現実として受け入れられなかったが、すぐに、受け入れざるを得なくなった。
そして、仁矢は。

「あぁぁアアぁぁぁあぁアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァ
ァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
ァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
ァァァァァァァァァァァァアァァァァァッァァァァアッッッッ！
！！！」

壊れた。叫んだ。発狂した。泣いた。髪を、掻き毟った。
この時、仁矢の全ては、破綻し、全ては、変わった。
仁矢は血走った赤い目で目の前の男を見つめ、
「ころす……殺す！　おまえは……お前は、絶対、殺すっっっ！！」

！」

そして、走る。何か考えがあったわけではない。理性がなくなっていたから、考える事すら出来なくなっていただけ。
ただ、目の前の男を殺す事だけを、五歳の仁矢は、幼くも、思った。
殴りかかる。だが、当然だが体格さも全てにおいて、幼かった仁矢が適うはずもなく、適当に足で蹴られ、あしらわれる。
床に、崩れ落ちる。
床に崩れ落ちた仁矢を見ながら、男は本当に困ったかのような表情で、言った。

「参ったな。子供に暴力を振るなんて嫌なんだが。大人気ないし。殺す気はないんだから。それに、俺の相手する暇があったら、後ろの可愛い妹の相手をしてやったらどうかな」
「な――――！」

その言葉を聞き、仁矢の理性が、再び、戻る。
そして、後ろを向く。リビングの開かれた扉から、愛理がこちらを見つめている。
愛理の目は、変わり果てた父を見た。
愛理の目は、変わり果てた母を見た。
そして、血に染まった、母と父を殺したと男を見た。
そして、全てを幼くも理解し、愛理は。

「なに、これ……嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌
嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌
嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌
嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌
嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌
嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌

嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌――――」

そう繰り返し、叫び、壊れた。そして、泣きながら、目を開けたまま、床に崩れ落ちる。気絶したのだ。

「アァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアぁぁアアアっっつ！！！」

それを見て、一瞬戻った仁矢の理性は、脆く、砕けた。

そして、思った。ただ、一つの事だけを。

許さない。殺す。目の前の男を、殺す。母よりも、父よりも、惨たらしく。

全てを、ぶち壊し、殺したい。

そう願った瞬間、仁矢の体に何かが走った。

そして、その感覚に突き動かされるかのように、体を思いきり、男の方へと向け、再び走る。

そして、大きくジャンプして、身長差を縮め、顔面を殴ろうとする。

「懲りないな。俺も流石に何回も子供に暴力振るうのは精神的にもきついんだが」

そう言いながら、向かってきた仁矢を、軽く殴り飛ばそうと男はする。

だが。

ゴシャッ

「は……？」

何かが、潰れたような音がした。その音の正体を知って、男は、初めて驚愕した表情を見せる。
それは、男の右手が、丸ごと飛ばされた音だった。
大量の血が、手の切れ目から噴出す。
今、起こった事は、単純だった。
仁矢が、男に殴りかかり、男はそれを右手で防ごうとした。
しかし、防ぐどころか触れた途端、男の右手は、思いきりとんだ。
骨が折れる、などではなく、本当に、殴り飛ばされた。
しかしそんな普通の人間なら発狂しかねない程の傷を負っても、男は、叫び声すら上げない。
そして、殴ってきた仁矢を、普通に左腕で殴る。バランスを崩し、仁矢は床に這い蹲る。

（がっ……！？　なんだこれ……！　なんでこんなにダメージがっ……）

そして、今までに無い程に、最高の笑顔を見せて、血にまみれた顔で、笑いながら言った。
「いいね……いいね、君！　何だよその出鱈目な腕の壊し方ぁ！？　あの力の片鱗か！？　やばいな、最高にテンションが上がってきた！」
そう笑いながら、男は外へと繋がる窓へと近づく。何時の間にか、その右手は何事もなく、戻っていた。
そして、男が治った右手で軽く窓ガラスを触ると、一瞬にして砕けた。

「ま、て……！　逃げる気かっ」
その問いに男は、窓側の方へと背を向け、言った。楽しそうに。
「そうだな。今日は逃げるよ。もう、確信は出来たしね」
そして、男は後ろへと、飛ぶ。窓を出て、外へと。
「ま……てっっっ！！」
「じゃあね。仁矢」
「俺は、異常（アノマーリア）。次会うときを、楽しみにしてるぞ」
そう言った瞬間、外へ出たアノマーリアの体が、消えた。
「く、そ……」
それを確認した仁矢は、力なく、ただ、崩れ落ちた。

「……っ」
目を、覚ます。仁矢は、ベッドの上に、寝かされているようだった。
恐らく、第四部隊の部屋だろう。
ベッドからは、寝るときのベッドとは違う、病院的な匂いがした。
ベッドの周りには、学校の保健室の様にカーテンがしきりとしてあった。

毛布に包まれた体を、起こす。そして、自分の体を見る。
上半身は服がなく、胸には包帯が覆っている事に、気づいた。
アノマーリアの能力のせいで、普通の治療しか作用しなかったのだろう。
アノマーリアに。

「結局、見ちまったか」

幼い日の思い返したくない、最悪という言葉が最も相応しい過去。
仁矢の人生を狂わせた、過去。
それだけならまだよかった。
愛理の人生さえ、狂わなければ。
愛理はあの後から心を病んでしまい、まともに会話すらする事が出来なかった。
今は心は治ったが、あの日から五年は心が治らず、その間、学校にすら通えず、生きた屍となっていた。
全てはあの男のせい。
あの男さえ、いなければ。

「……馬鹿馬鹿しい」

そこまで考えて、仁矢は舌打ちし、吐き捨てた。
思い返しても、過去を変えるなど出来はしない。考えるだけ、無駄。
そう思い、少し喉が渇き、水でも飲もうかと立ち上がろうとした時、ようやく気づいた。
自分の毛布に、妹の愛理が椅子に座りながら寝そべっている事に。
その目には、涙の後のような物があった。

「……クソッ。何やってんだ俺は……」

また、愛理に哀しい思いをさせた。その事に、仁矢は自分を殴りたい衝動に激しく駆られる。

「ん、んんぅ……」

そう考え、一発本気で自分を殴ってやろうかと思った瞬間、可愛らしい声が聞こえた。
見ると、愛理が目を僅かに開けていた。

「起きたのか」
「っ！　兄さん！　体は、大丈夫なんですか！？」

仁矢が声を掛けると、急に寝ていたのが嘘だったかのように素早く起き、仁矢の体を案ずる。
その目は、涙が今にも溢れんばかりだった。

「……ああ、大丈夫だ。心配かけて、悪かった」
「無事なら……無事ならいいんです。　私、兄さんがもう起きないのかと思ったんですよ……？　よかったです……よかったっ……！」

泣き喚きながら、愛理が仁矢へと抱きついてきて、それを優しく抱き返す。涙が、皮膚と包帯に直接染みる。

「ああ。本当に……すまない。心配してくれて、ありがとう……」
「うぅっ……！　兄さん、兄さんっ……」

仁矢は、泣きじゃくる、世界で一番大切な少女を見て、誓った。
アノマーリアの言葉を、思い出して。

（見た様子、能力に何て目覚めてなさそうだな……。良かった。そ

んな能力なんて、こいつには必要ない。絶対に……愛理(こいつ)を奪わせなんてさせねぇぞ……。アノマーリアっ……！）

「それじゃあ、またな」
「はい。もう……無茶はしないでくださいね？」
「……分かってる」
「それじゃあ、お休みなさい、兄さん」

あの後、泣きつかれた愛理を寝かすため、４８階までやってきた仁矢（愛理の部屋は４８階の仁矢の自室の隣）。驚く事に、相当に寝ていたらしく廊下から見える外の景色は真っ暗で、星が出ていた。傷はもう大丈夫で、多少動くだけなら問題は無いらしく、あの後きた心情に動く許可を貰った。
そして、召集命令も。

「……行くか」

呟き、ネクタイを少しいじり、仁矢はエレベーターのある場所へと歩き出す。
５０階の、支部長室へと向かうために。

「……失礼します」

エレベータが開くと同時、支部長室へと入る。五十階の支部長室は、

エレベーターと直接繋がっている
からだ。
部屋は、社長室のようになっており、奥の正面には王城が座る支部長席がある。
その後ろは外の景色が見渡せるであろう、大きな窓があった。今は、満天の星空で輝いているのがよく見える。
部屋には、日本支部の隊長、副隊長クラスの使徒が、勢ぞろいしていた。
自身の隊の木戸と、水並もいた。
しかし、何人かいない者もいた。見渡す限り、王城と甲ノ宮とアリサがいない。ちなみに、期才が隊長の第六部隊と、榛原が隊長の第七部隊に副隊長はいない。二部隊共、副隊長という立場の人間がそれほど意味を成さないからだ。
甲ノ宮の部下で副隊長の天草がいたので、仁矢は聞いてみる。今は仕事中ではないので、使徒名ではなく本名で。

「甲ノ宮はどうした？　天草」
「心情隊長から聞いているでしょうが、甲ノ宮隊長は能力（センティメント）を使いすぎて、脳に損傷を負い、心情隊長に治癒してもらいました。それの反動で今は少し、自室では寝かせています」
「成る程な」

第四部隊隊長、心情愛（聖母のマリア）の有する能力は、『時間再生（レペティオン）』と言い、”触れた物、または生命の状態を２４時間以内にあった状態に戻す”能力だ。
それを応用すれば、健康的であった時間内が２４時間以内にあれば内面的なダメージだろうが外傷的なダメージだろうが、いくらでも回復出来る。
しかし、これとしても万能ではない。まず、時間を戻すと言うのは物質にならともかく、生命には相当な負荷が掛かるらしく、使うと

対象の身体が時間が戻るという異常な負荷に耐えれず、何分か、場合によっては何時間も昏倒してしまう。戻す前の状態と戻した後の状態の差が大きければ大きいほどに、昏倒の時間は増す。恐らく、甲ノ宮は相当に大きいダメージを受けたのだろう。
仁矢は、天草の話を聞くと、副隊長の遊動の横にいる心情に目線を合わせて、頭を下げ、言った。

「ありがとう、心情。甲ノ宮を助けてくれて」
「ううん、お礼なんていらないですよ。私は、第四部隊隊長として当然の事をしたまでです。それに、大事な大事な友達で、仲間ですからね。だから頭を上げてください」
「そうだったな……」

心情に言われて、仁矢はゆっくりと頭を上げる。
その様子を見て、第五部隊隊長の戦始終牙が、冷やかしたように言って来た。

「流石兄貴！　仲間想いでカッコイイぜぇ！」
「……普通の事だと思うけど。終牙はもう少し、仲間を思いやる努力をした方がいい。仁矢を見習って」

テンション高く言う戦始の言葉に、横にいた小柄な、右目が紫色の髪に隠れている無表情な少女が、呆れたように言う。
第五部隊副隊長の守凪玲愛（かみなぎれあ）だ。使徒名は創造のケネティクス。年齢は、１５歳という若さで、まだ中学三年生レベルだ。だが、本人曰く行っても意味がないらしく学校には通っていない。戦始とは昔からの付き合いらしく、正義の城にも一緒に入ってきた。
そんな玲愛の上司の隊長、戦始の一言を聞いて、仁矢は心の中で少し毒づく。
自分に対して。

何が仲間想いだ、と。

（俺は、確かにこいつらを本気で仲間と思ってるが、同時に心のどっかで、愛理の世界には欠かせない奴らだから、心配してるだけなんて腐った考えもありやがる……。そんな考えを少しでも持っちまう時点で俺は仲間想いなんかじゃねぇ。ただの、最低な野郎だ）

そう一瞬考えたが、すぐに馬鹿らしい、と考え、いない王城とアリサの事について、問おうと思った仁矢だったが、その思いを読んだかのように、一人の女が、答えた。

「王城支部長とアリサちゃんは、今ベッドで寝てる。愛ちゃんの能力がアノマーリアの能力のせいか効かなくて気絶はしてるけど、命に別状は無い。……加減されたみたいだね」

言ったのは、第七部隊隊長の、榛原。その口調は普段とあまり変わらないが、雰囲気はいつも仁矢に見せるだらしない物ではなく、真剣な、それでいて二人を襲撃したアノマーリアへの怒りが現れていた。

心情に呼応するように、他の使徒もまた、その事実に、雰囲気を変える。真剣な雰囲気へと。

「それで、こうして集められたって事は、何か話でもあるのか？」

その雰囲気の中、いつもとは同じ口調で、それでいていつもとは違う雰囲気で、木戸が言った。

それに、心情は頷き、答えた。

「いつもやってる仕事の報告と、まあ、その他諸々だね。……その他の方が今日はメインだけどね」

「はぁっ？　そりゃあどういう意味だぁ？　その他って――――んぐっ！？」
「あ、悪ぃ悪ぃ。まぁーまぁー。話ぃ黙って聞いとけや戦始。どんだけせっかちなんだお前は」
「てめぇ、期才！　俺に軽々しく触れてんじゃねぇぞ！！　その眼鏡ぇブチ壊してやろうか！？」
「終牙。話を黙って聞く。今のは、圧倒的に期才が正しい。それと、阿呆みたいな台詞を吐かない方がいい」

一人だけ場違いにも雰囲気が変わっていなかったらしい戦始が、問いかけた瞬間、横にいた期才が、右手で口を塞ごうとしたらしいが、手が狂って戦始の顎にぶつけてしまったらしく、戦始がキレてそれを副隊長の守凪が宥める。
一人だけ緊張感が無いらしく、まだ喚いている。

「そのー。報告、そろそろ聞きません？」
「そうだな。こんな事で時間を潰す訳にはいかん」

楠がおずおずと言い、九条もそれに賛同する。九条の顔は、心なしか、かなりの怒りに溢れていた。
部下を、アノマーリアによって何十人か殺されたのが相当にきているのだろう。
仁矢も、水並の方を少し一瞥し、言った。

「ああ。……詳しく知りたい事も、あるしな」
「……」

水並は、気まずげに少し目を逸らし、仁矢はそれを確認すると、すぐに榛原の方へと目を向けた。
他の使徒達も、同じように目を向ける。

そして、榛原は支部長席に置いてあったバインダーを取り、挟まった書類を見ながら、口を開く。

「まず、今回の詳細報告。Ａ級犯罪者であり十害（ディエロス）の一人でもあるジエル＝グラスト。そして、同じくＡ級犯罪者の小谷亮とバナムステファニーによる、黒地丘市で起こった、大量火炎。そして、小谷とバナムによる能力であわせて、死亡者はおよそ１０００。行方不明者はそれの数倍と見られ、黒地丘市の住民の９割が死亡した可能性が高いです。残っていた第一部隊、第二部隊、第三部隊の使徒達で直ちに始末をし、何とか事態を収拾しました。また、バナムとジエルの遺体は見つりませんでしたが、小谷亮の遺体はあったので情報収集のために回収しましたが、情報は全くと言っていい程見つかりませんでした」

「何だと！？　情報が見つからない？　榛原、お前の能力は使ったのか！？」

仁矢は、話の途中で割り込み、声を上げる。

戦始の様に、皆、仁矢の疑問を止めはしない。それは、全員が疑問に思い、信じられない事だったからだ。

犯罪者達の居場所や詳細など、様々な情報を調べる第七部隊隊長の榛原は、恐らく世界でも最高位の情報収集能力を持っている。

その能力は、『違法収集（イグアルメンテ）』。”触れた物や生命が持つ情報を知る”能力。簡単に言えば、剣や銃に触れれば、その種類や何で作られてるか、どう扱うか、誰が使った形跡があるか、まで隅々まで、知ることの出来る、とても便利な能力だ。そして、それは人の脳に通じる頭に触れれば、過去の記憶まで細かく正確に知る事が出来る。

そう。小谷の死体の頭に手を触れれば、何らかの情報は必ず手に入るはずなのだ。

そんな皆の考えを予想したのか、申し訳なさそうに榛原は言った。

「それが……、読み取ろうとして手に触れても、バキィンッっていう甲高い音が響いたと思ったら、全く記憶が探れないんだよ。身体の詳細も、他も、全部ね」
「アノマの能力か……」

なんとなく、そう思い、仁矢は呟く。
あれ程までに反則的な能力、絶対（アブソルト）を使えば、少し使い方を考えれば出来る可能性は高い。その使い方は分からないが、仁矢は確信していた。

「ごめんね……役に立てなくて」

榛原が、本当に悔しそうな表情で、皆に頭を下げる。
それに対し、仁矢は、内側で悔しがりながらも、榛原のこんな悔しそうな姿など見たくはない、と思い、表情をつくり、静かに言った。

「気にするな。どの道、あんな奴に大した情報は無いはずだ。ジエルの話からすると、奴はサポートメンバーらしいからな。重要な事は何も聞かされてない可能性も、十分にある」
「仁矢くん……ありがとう！　だから好きだよ――――ごふっ！」

仁矢の言葉に、少しは励まされたのか、空元気なのかは分からないが、思い切り元気よく仁矢へと抱きつこうとしてきたので、思い切り右頬を殴られる。
結構モロに入ったのか、痛かったらしく、大げさに床を転がる榛原。
それを見て木戸は、少し右目を引きつらせながら、言った。

「うっわ～……女にも容赦ねぇなオイ……。しかも仮にも年上だぞおい」
「良かった……。抱きつかれなくて……」

「んー？　何が良かったんですかね？　水並ちゃん？」
「なっ、なんでもないですっ！」
「んー？　あれじゃないの。大好きな仁矢君に触れないでーっ！って感じじゃないの？　いやぁ、それは私も気持ちはよく分かりますけどね」
「ち、ちち、違いますっ！　く、楠さんは、な、何言ってるんですか？！　い、今は大事な時なんですよ！　も、もっと真剣に……っ！」

いたずらっぽく笑う楠と顔を真っ赤に染める水並の会話を聞きながら、仁矢は軽くため息を吐いて、言った。

「落ち着け、水並。楠もだ。今は大事な時だ。あまり真剣さを失うなよ」

その言葉に、水並は、恥ずかしそうに頷き、楠は適当な返事をする。それを見て、遊動が始めて、喋る。隊長の心情に向けて。小声で。

（……あれは、本当に気づいていないんでしょうか？）
（ううん、気づいてると思いますよ。ただ、仁矢君は難しい子ですからね。以前、恋愛する気はない、なんて言ってた気がします）
（……苦労しますね。水並さんも、楠さんも、心情隊長も）
（あはは。気づかれちゃってましたか。そうだねえ、かなり苦労しそうです。まあ、諦めませんけどね♪）
（……隊長って結構アグレッシブですよね、見た目と違って）

それぞれの会話を繰り広げていると、榛原が床から頬を抑えて立ち上がる。

「いたあ……。それじゃあ、続けるね。とにかく、情報は小谷から

何もとれなかった。けど、王城支部長とアリサちゃん。そして風歌ちゃんと仁矢君の頭を覗いて、分かった事があるの。……ごめんね仁矢君。勝手に覗いちゃって」

申し訳なさげに言う榛原に、本当に大したことなさげに、軽く、構わない、と返す。

別に、覗かれて困る記憶がある訳でもない。過去の忌まわしい記憶も、ここにいる使徒ならば全員知っているのだから。

榛原はもう一度、ごめんねと言うと、再び報告をし始めた。

「そして、ジエル＝グラスト、小谷亮、バナム・ステファニーによる大量殺人事件は、終わりました。こちらに怪我人は何人か出ましたが、この件に関しては、死者は一人も出ませんでした。建物などの犯罪の傷跡はかなりのものですが、第五部隊によって修復を施され、最低でも二週間あれば全て直るとの事です。そして次に、その他の報告です」

そこで一呼吸を置き、言った。

「13年来のアノマーリア、出現についてです」

「「「っ……！」」」

アノマーリア。その名前に、皆、身を引き締める。

「世界で三人しかいないS級の世界的大犯罪者であり、正義の城が作られるきっかけにもなった五十年前のCLEAR（クリア）事件を起こした、最悪の男、アノマーリアですが、十三年前の……火向血族惨殺事件を機に、姿を見せなかったのですが、今日、黒地丘市に、現れました」

仁矢に気を使ってか、少し躊躇ったが、仁矢が構わない、とまた目で言ってきたので、躊躇いながらも事件名を口にし、語る榛原。皆、榛原の言葉を、真剣に、聞いている。

「奴は、我が日本支部の支部長、神童のスカージと、本部第七部隊隊長の電網のリアを行動不能にした後、ジエル＝グラストを始末した嵐のジードと、他の使徒の前に現れ、結果的に負傷者を出し、更に、第三部隊の使徒が、数十名殺されました」

「っ……」

その言葉に、九条が必死に怒りを隠して、右腕を震わせていた。当然だ。自分の隊の人間が数十名も殺されて、怒りを覚えない訳がない。

榛原は、続ける。

「そして、アノマーリアの計画、というのがジエル＝グラストの発言とあわせて、明確に分かりました。それは……」

「マジかよその話は……！」

「十万以上の殺害……ですか！？」

「神を、呼び出す……だと？　馬鹿げてる！」

「しかも、それを呼ぶために必要なのが、天使（プラス）と堕天（マイナス）使と呼ばれる人間で、その内一人が、愛理ちゃん！？」

「そしてジエルの様に危険なプランメンバーって言う奴らが後６人もいて、サポートメンバーっていう他の犯罪者も大勢アノマーリアについてるんですか……」

「……不味いですね」

「はっはぁ！　イイじゃねェのよ沢山殺せてよお！」
「馬鹿？　終牙。　そんな簡単に行くような件じゃない。今回は」
「そうだぜぇ。行動理由がイカれてる上に、あのアノマーリアだ。残りの六人のプランメンバーも、どんな奴らだがわかりゃしねぇ」

各々が、話を聞いて、それぞれの反応を返す。しかし、話を知っていた仁矢と、榛原以外に反応を全く出来ない者がいた。いや、出来なかったというより、信じられずに、呆然としていたと言った方が正しいかもしれない。その人物は。

「水並……」

仁矢が、静かに呼びかける。何を言っていいか、分からず。
そう。自分の部下であり、作戦隊長の、水並綾に。

「……」

水並は、黙る。顔を、うつむかせて。その様子は、さっき楠とじゃれ合っていた時とは、似ても似つかない。
その様子に構わず、戦始が声を上げる。

「そおだ！　てめぇ、確か姉貴がプランメンバーだったとか、アノマーリアと一緒にいたとか報告にあったな。そりゃ一体どういう――――」
「終牙」
「っ！　……悪い、なんでもねぇ」

戦始に、静かながらも、それ以上言うな、という意思を込めて、守凪が言う。
それに、戦始は素直に従う。基本的に人の言うことを聞かない戦始

だが、仁矢は勿論として、何故か守凪にも従う。昔からの知り合いだからだろうか。
それは今はいいとして、今ので場の雰囲気が少しだけ、悪い方向に硬くなってしまった。
正義の使徒の関係者が、犯罪者と接点があるという、事実に。
皆、水並を犯罪者と接点があるからといってどうしようとも思わないが、水並自身が、余計に表情を暗くさせてしまったので、余計、雰囲気が硬くなる。
そんな空気を振り払うように、榛原は。

「とにかく、今は現状維持。各自、警戒を怠らない事。以上、解散！」

その言葉に従うように、皆が一様にエレベーターへと向かってゆく。
途中、皆が、特に心情や楠が何かを言ってあげたそうな顔をしていたが、今はそっとしておこうと思ったのか、何も言わずに、皆、エレベーターへと乗っていく。そして、降りてゆく。
残ったのは、仁矢と、水並だけ。
顔を俯かせて、表情を暗くする水並。震えていた。正義の城の正装の上に、羽織っているセーターを少し揺らし、右腕に握る機械性の杖に、力を込めていた。
仁矢はいつもと変わらなくも、どこか優しさを混ぜた風に、言った。

「……話、聞かせてもらえるか？」
「……はい……」

「そこ、座っていいぞ」

「はい、ありがとうございます……」

自室の、ベッドの近くにあるソファーを指差し、仁矢が言い、それに素直に答え、右手に持つ機械性の杖を置き、ソファーへと座る。あの後、流石に支部長室に居座る訳にも行かず、仁矢の部屋へと場所を移した二人。

部屋の中の最新式の冷蔵庫から、炭酸飲料を二本ほど取り出しながら、（個室は随分な広さで、冷蔵庫もあり風呂もありキッチンからトイレまで普通の生活に必要な物は全てそろってる）水並を少し見る。

「……」

その顔は、仁矢の予想でしかないが、苦悩と後悔。そして恐怖の感情で埋め尽くされている気がした。

「ん。炭酸類、好きだったよな？」

「あ、ありがとうございます……」

仁矢が炭酸のペットボトルを、水並の座るソファーの手前に置かれているテーブルに置き、その向かいのソファーに、仁矢が座る。

炭酸が好きだった事を覚えてもらっていて嬉しいのか、少し飲んで一瞬だけ水並の顔が赤くなるが、すぐに元気の無い表情へと戻っていく。

そんな水並を見て、本題に入るのは酷だろうか、と思ったが、話を振る事にした。先延ばしにしていても、お互いにいい事などない。

「それで……、さっきから落ち着かないのは、あの衣という女の件か？」

その問いに、少しびくっと身体を震わせ、少し間を空けた後、静かに首を縦に振る。

「……義姉(ねえ)さんとか言ってたな……。……お前が正義の城に入った理由とも、何か関係があるのか？」

直感で、そう思った。水並の正義の城に入った理由は知らなかったが。

正義の使徒は、自分が正義の城に入った理由を自分から明かすことは、少ない。

別に皆、話したくない、という訳でもない。

ただ、わざわざ自分から話すだけの意味がないのだ。

正義の城に入った理由など、どうせ聞くまでも無く、殆どが重い過去や犯罪者による憎悪だ。聞かれれば答える使徒はたくさんいるだろうが、自分から話して話題にするほど、明るい話ではない。

衣は、その、確実に明るくは無いであろう話を、ぽつりと語り始める

「はい……。私が正義の城に二年前、入ったのは……衣義姉さんを探し出す為だったんです」

「探し出す……？　行方不明にでもなってたのか？」

「はい……。９年ほど前に、両親を事故で失った衣義姉さんを、お母さんとお父さんが引き取ったんですが、その１年後……、私の両親が事故に遭って死んでしまった日を境に８年前に姿を消しました」

「……そうか。だが、それがどうして正義の城に入るのと繋がったんだ？」

両親が死んだのは、第一部隊隊長として、家族の構成などは履歴書などを通して仁矢は知っている。両親が死んだ事も知っているが、事故死なら、犯罪者を憎む理由になど、なり得ない。

その疑問を解消する様に、水並は口を開く。

「そうですね。ただの行方不明だったのなら、正義の城に入ることも無かったです。けど、違ったんです」
「違った？」
「はい、義姉さんは……衣義姉さんは、自分から姿を消したんです。それも、犯罪者、不明（アンノウン）と一緒に……」
「アンノウンだと！？」

不明（アンノウン）。それは、アノマーリアと並ぶ、存在するだけで世界が混乱しかねない、犯罪者。アノマーリアを最も悪な犯罪者とするなら、最も恐ろしいのが、アンノウンだ。
思いがけない人名に、仁矢は声を上げる。

「アンノウンと、一緒にいたのを、見たんです。義姉さんがいなくなる直前に。その頃はまだ幼かったので、アンノウンなんていう犯罪者だとは知らなかったんですけどね」
「成る程……だからか。正義の城に入ったのは」
「はい。犯罪者を詳しく調べるのは、警察でも一緒ですが、正義の城は能力犯罪者をも調べる上に、能力者の情報部隊もいて、犯罪者を調べ上げる事に関しては、一流です。榛原さんみたいな人もいますしね。それに、S級犯罪者は正義の城が最も重点的に調べているとも聞きました。だから、正義の城（ここ）に来れば、何か義姉さんの事がわかるかも、と思って入隊したんです。怪我は確かにありましたが……私は幸い正義の城にとって役に立つ能力も持っていましたしね」
「だが……実際にはアンノウンではなくアノマーリアと行動を共にしていた。それが、一番お前の心を揺さぶった訳か」
「はい……。犯罪者に安心もなにもないとは思いますけど、アンノウンならまだ、安心できそうだったのに……アノマーリアといるという事は……」
「……犯罪を犯している可能性が、高い。そう、思っちまったのか」

それに、声には出さず、首を縦に振り、水並は答える。
水並の不安と恐怖。それは、衣が犯罪を犯している可能性。それも、殺人。
アンノウンは、ここ十年は活動していなくて、今はスペインにもいる可能性があるなどと囁かれている為、殺人などは犯していない。少なくとも、確認されてない。何よりも、アンノウンは異名の通り何を考えているか分からない犯罪者で、犯罪をした場所に、一枚のカードを残していく。カードは、この十年間見つかってはいない。衣がつまり八年前に姿を消していても、犯罪に加担している可能性は少なくなる。
しかし、アノマーリアは？
アノマーリアは、そんな分かりやすい犯罪の後など、普通の事だが残しはしない。そして、アンノウンやキリよりも、余程裏でコソコソと、殺すタイプなのだ。実際、まだ確認されていないアノマーリアが起こした事件もあるかもしれない。
つまり、アノマーリアと行動を共にしているというのは、殺人を犯している可能性が高い。最低でも、何か一つくらいは犯罪は起こしてしまっているだろう。
そして、軽い犯罪ならともかく。
人殺しは、今のこの世界では、どうなるのだったか？
何の為の、正義の城だったか？

「お前は……義姉さんを殺されるのに、怯えてるんだな」
「……はいっ……」

そう。仮に、衣が殺人を犯していたとしたら、正義の使徒としてやる事はただ一つ。
殺害。それは、身内だろうが、同じ正義の使徒だろうが、例外ではない。

その事実を知る水並は、肩を震わせながら、口を開く。顔は俯いていて表情は伺えないが、声の様子から、泣いている事が安易に想像できた。

「義姉さんが誰かを殺したなんて、考えたくないですっ……。絶対、そんな事はしない、って思いたいです……！　けど、アノマーリアと一緒に行動をしてるって事は、殺人を犯してしまっているかもって、考えちゃうんですっ……！　絶対、そんな事はない、義姉さんがそんな事する訳がないとも信じてるけど……、そう、考えてしまうんです！　最悪の可能性を、考えてしまうんです！　それで、義姉さんが殺される事まで、考えちゃうんです！　アノマーリアと、行動を共にしているってだけで……！　それだけで――――私はっっっ……！！！」

「大丈夫だ、水並」

「！？　火向君……？」

水並が思いを吐き出し、涙でぐちゃぐちゃになった顔で、顔を上げた瞬間、向かいのソファーに座っていた仁矢が、目の前まで来ていて、優しい言葉と同時に、水並を、強く、抱きしめる。水並の、オレンジ色の、綺麗な長い髪が、手に触れる。

突然の事に涙を流しながら呆然とする水並をよそに、仁矢が言った。

「大丈夫だ……、水並。だからもう、そんなに怯えるな。……不安になるのも、恐怖するのも、分かる。けど……そんなに悪い方向に考えるな」

「火向君……。けどっ……！」

「確かに殺してない確証なんてないし、仮にお前の義姉さんが殺人を犯していたら、俺たちとしては殺すしかない。俺も、犯罪者は憎いからな。けどな、よく考えてみろ。ありふれた台詞で悪いが、お

前の義姉さんは、本当に人を殺すような奴なのか？」
「ち、違いますっ……！　義姉さんはそんな人じゃあ……っ！」
「そうだよ。お前も、分かってる筈だ。。……血が繋がってないとはいえ、お前の身内、それも姉となる人間がそんな事をするようには、俺には思えない。それに、さっき少し話したが俺が少し凄んだだけで怯える、ただの、普通の女にしか見えなかった。だから、信じてやれ」
（それに……衣が消えるとき、衣は目的があるとかアノマーリアが言ってたが、その目的を、水並は知っているような素振りを見せた。それとも、何か関係があるんだろう。アノマーリアと手を組むのは。……いつか、聞いてみるか……）
「っ……！　はい……。有難うございます……火向君……。うっ……うぁあっ……」

水並は、泣き崩れる。仁矢に、抱きしめられながら。
その涙は、不安と恐怖から解き放たれ、安堵に、変わっていた。

「……あぅぅ」
「……その、何だ。悪かったな、水並。……抱きつく必要は、なかったかもしれん」

先ほどから何分か泣いていた水並だったが、泣きやみ、仁矢に渡されたハンカチで涙を拭い終わると、自分が仁矢に抱きしめられていた事を深く認識したのか、今は赤面しながらソファーに座って顔を両手で抑えている。
その反応を見て、今更ながら自分も少し恥ずかしい事をしてしまったなと思い、仁矢が同じソファーの隣に座りながら気まずげに言う。

（しかも、仮にも自分に好意を抱いている女の子にやっていい事じゃあないな……。水並の調子を戻すためだったとはいえ、少しやりすぎだったかもしれない）

そんな事を考えていると、両手を顔から振り払い水並が顔を赤くしながらも、視線を逸らしながら、遅い返答をする。

「い、いえ……。い、嫌ではなかったですから、だ、大丈夫です……。そ、その……それに……」

「？」

仁矢が疑問の表情をすると、水並が赤面しながらもぐっと仁矢の方を見て、言った。

「ひ、火向君に抱きしめてもらったお陰で……かなり、心が落ち着きましたし……、そ、その……き、気持ち良かったですから……」

言って、再び水並は少し顔を逸らす。

その様子を見て、仁矢は。

「……そ、そうか」

表情こそ普通だが、その顔には少し赤みが増していた。

そして、心の中では。

（か、可愛い……。これは……中々……。っていかんいかん。何を俺は考えている……）

心落ち着かず、心を安らげるため、机にあった炭酸もののジュース

をごくごくと飲む。

（ふぅ……少し落ち着いた。よくよく考えれば、水並はかなり可愛い方だった。動揺しても、仕方ないな）

「あっ……」

「？　どうした、水並」

そんな事を考えていると、隣に座っている水並が、さっきよりも一層顔を赤らめて、こちらを見ていたので、疑問に思って聞く。

すると、口ではなく、水並は右手の人差し指を、仁矢が飲んでいた、そして今持っている炭酸物のジュースに向ける。

（……まさか）

仁矢は、予想した。

そして、その予想が当たらないように、と願った。

しかし、その願いは、水並が放った言葉で、微塵もなく吹き飛ばされてしまった。

「そ、それ……私の、飲んでた、ほ、方です……。か、間接…キ、ス……。あぅうぅ……」

「……本当に、ごめんっっっ！！！」

その後、仁矢は、赤面する水並を部屋へと送った。

勿論、自分も赤面したままで。

その日、仁矢はこう、思った。

（俺は……女関係には、相当にヘタレなのかも知れないな……）

第十三章　忌まわしい過去　そして、不安と恐怖（後書き）

恋愛、ちょっと盛り込んでみました。
どうだったでしょうか？
下手なりに頑張ってみました。
次回はそこまでシリアスな話にはならない『予定』です。
正義の使徒の日常とかを盛り込めたらいいなと思ってます。
とは言ってもあくまで予定ですので、あまり期待はしないでくださいね……。
では、また。

主要登場人物紹介（善側）（前書き）

主要登場人物のまとめ表です。今までの話で出てきたことなどをまとめてあります。

見てくれてる人は、登場人物多くて訳わかんねーよこの野郎とか思ってる人が沢山いそうなので、書いてみました。
後で悪側も書くつもりです。
間違いがあったらこっそり修正してきます。

主要登場人物紹介（善側）

【正義の使徒】

【第一部隊】

異質な、戦闘に役立つ能力を持つ使徒が集められた戦闘専門部隊。接近戦や遠距離戦やサポートなど様々な事が出来る為、戦闘方法が様々あり、それを指揮する作戦隊長という立場の使徒もいる。また、日本支部の正義の城では最強の部隊。日本の第一部隊は、総勢で１００人と少ない。

名前：火向仁矢（ひむかい　じんや）
使徒名：嵐のジード
格：正義の城日本支部第一部隊隊長
年齢：１８歳
身長：１７６ｃｍ
誕生日：５月２０日
血液型：ＡＢ型
髪の色：金髪（染めていて、元の色は水色）
目の色：赤
能力：瞬間再生（レベネラシオン）→常識壊し（センティードコムン）
人物詳細：主人公。普段は冷静だが、犯罪者と対峙した時のみ、感情が非常に高ぶる。また、割とボケることもある。妹の火向愛理を大切に思っている（シスコン）。ルックスがよく、クール系のイケメンで、性格もいいのでモテる。また、他人からの好意に敏感。（本人は恋愛をする気はあまりない）幼い頃、妹の火向愛理以外の血が繋がった人間全てをアノマーリアに殺され、家族を殺し妹を悲しませたアノマーリア、そして犯罪者を激しく憎み、アノマーリアや犯罪者を殺すため、正義の城日本支部長の王城最（神童のスカージ）

との出会いをきっかけに、わずか五歳で正義の城に入る。それから、王城に鍛えられ、現在では第一部隊隊長になり、アリサ曰く最強とまで言われるレベルにまで成長する。また、王城によって神正学園にも通っており、現在三年生。戦闘方法は、”自身の脳と心臓以外の傷を再生させる”『瞬間再生(レヘネラシオン)』を利用し、服の中から身体の中まで入れた武器と、非常に優れた体術を使って、戦う。本来の能力は、”『自身』と、『触れた物』が持つ『常識』を変更する”『常識壊(センティード)し(コムン)』である（自分以外の生物の身体の常識は変更不可能）。『瞬間(レヘネ)再生(ラシオン)』もその能力の一部に過ぎない。その能力(ちから)は圧倒的であり、ジエル＝グラストとバナム・ステファニーを瞬殺する程。
しかし、本人曰くあまり使いたくないとの事。異性からの好意にはそれなりに敏感だが、気づかない振りをすることが多い。
また、正義の城本部に知られると、格上げをされて最低で本部に異動をされてしまい、アノマーリアを殺すためのチャンスが減る恐れがあるので、日本支部の人間以外には知らせないようにしており、日本支部の人間にも言わないように頼んでいる。自らの掲げた正義は、火向愛理の平和な世界を脅かすものは叩き潰し、必要な物は守り、愛理を悲しませたアノマーリアを殺す、というもの。

名前：木戸大河(きどたいが)
使徒名：幻想のシュードラ
格：正義の城日本支部第一部隊副隊長
年齢：１７歳
身長：１７４ｃｍ
誕生日：３月２０日
血液型：Ｂ型
髪の色：青色
目の色：黒色
能力：幻想起動(ファンタシア)
人物詳細：火向仁矢の親友。軽いノリで、エロくいつもチャラけて

る。しかし、犯罪者と対峙するときは、ちゃらけながらも、正義の使徒として相応しい程の殺意を犯罪者に向ける。神正学園にも通っており現在三年生で火向仁矢とは同じクラス。能力は、”思い描いた、可能だと思われる現象を発動させる”『幻想起動(ファンタシア)』。非常に便利な能力に聞こえるが、自分が目にしている『物』と『自分』で可能だと思われる現象のみしか発動できず、現象の発動はその場で不可能だと判断される現象は起こせなく、一度に一つの現象しか起こせなく、現象を一度発動して発動した現象が終わるか、破壊されてから時間にして十秒経たないと能力は再び発動できない、という条件があり、愛理曰く難しい能力。第一部隊の副隊長であるが、いつ正義の城に入ったのかは現時点では不明。また、正義の城に入ってることから犯罪者に対しての思う所はあるはずだが、現時点では不明。掲げる正義も現時点では不明。

名前：水並綾(みなみあや)
使徒名：聖強のイミナ
格：正義の城第一部隊作戦隊長
年齢：１７歳
身長：１５９ｃｍ
誕生日：７月２０日
血液型：Ａ型
髪の色：オレンジ色(ロング)
目の色：水色
能力：???
人物詳細：大人びていて、それでいて可愛らしさも持っている女の子らしい可愛い女の子。足に怪我をしており、右腕に機械性の杖をついている。正義の城のスーツの上に、セーターを羽織っている。優しく、気が利く。丁寧な物腰で喋り、同年代の仁矢と大河であっても仕事中以外ですら敬語で話す。学園には通える年齢なのだが、足の事もあり、通ってはいない。また、能力は持っているが、足の

怪我が何らかの理由で関係して、あまり使わず、現時点では不明。
基本的に義姉の衣を探すためだけに正義の城に入ったので、犯罪者を憎んではいるが他の使徒よりは控えめ。掲げる正義は現時点では不明。昔のとあることから、仁矢には少なからず、異性として好意を寄せている。

【第二部隊】
遠距離戦闘系の能力を持つ者が主に集められた戦闘専門部隊。犯罪者に気づかれないように遠距離から奇襲して殺すという先方を得意とする。日本の正義の城では、総勢２００人いる。

名前：甲ノ宮風歌（こうのみやふうか）
使徒名：憤怒のフィア
格：正義の城日本支部第二部隊隊長
年齢：１９歳
身長：１６４ｃｍ
誕生日：４月１８日
血液型：Ｂ型
髪の色：茶髪（髪型はツインテール）
目の色：黄色
能力：感情装填（センティメント）
人物詳細：気が強い、ツインテールの美少女。また、ツンデレ。プライドが高く自分より年下にも関わらず、隊長な上に最強とまで言われる仁矢にライバル心を燃やしている。（仁矢には何とも思われていない）
そのため、普段から仁矢には突っかかるが、仕事中には私情は挟まず、犯罪者を殺す為に仁矢とも共闘する。二丁、拳銃をいつも持っている。昔、たった一人の家族だった姉を殺した犯罪者アイラー・ステニバスを憎み、殺すため正義の城に入った。能力は”感情に応じて効果が変わるエネルギーを身体から出す”『感情装填（センティメント）』。例え

ば『殺意』の感情エネルギーを出せば、殺意を出した人物と、それに関連する全てを破壊するエネルギーとなる。身体全体からエネルギーを出す事は出来るが、身体全体からエネルギーを出すと、甲ノ宮の脳にダメージを与える危険性があるため、普段は身体の一部（主に手）から出してそこから銃弾として銃に詰めて撃つという使い方をしている。掲げる正義は、アイラーを殺すという一点のみ。

名前：天草回（あまくさかい）
使徒名：模倣のヌル
格：正義の城日本支部第二部隊副隊長
年齢：２６歳
身長：１８０ｃｍ
誕生日：１０月１日
血液型：Ａ型
髪の色：緑
目の色：バンダナで隠れているので不明
能力：？？？
人物詳細：目にバンダナを巻きつけている、色白の青年。バンダナを目につけていても、何故か見えるらしくちゃんと動ける。性格は、気が利き、人を立てるタイプで、甲ノ宮を副隊長として十分にサポートする。丁寧語で喋る。能力など、掲げる正義は現時点では不明。

【第三部隊】
接近戦闘系の能力を持つ物が主に集められた戦闘専門部隊。第二部隊の遠距離離奇襲が失敗した時に、正面から殺す仕事が多い。異質な能力を持つ者は少ないが、単純な力と速さが備わっている者が多い。日本の正義の城では総勢２５０人程いる。

名前：九条豪（くじょうごう）
使徒名：冷戦のクレイ

格：正義の城日本支部第三部隊隊長
年齢：３３歳
身長：１８７ｃｍ
誕生日：１２月１１日
血液型：Ａ型
髪の色：青
目の色：青
能力：規制解除（レグラシオン）
人物詳細：顔の、口を除いた右半分に包帯を覆っている、がたいが良く、鋭い目を放つ、見た目の怖い男。しかし、確かに声のトーンや見た目などは怖いものの、性格は優しく、他の隊員がミスをしたりすると、フォローなどもしてくれる。ただし、正義の使徒として、犯罪者には非情な殺意を向ける。能力は『規制解除（レグラシオン）』で、その効果は”自身に掛かった人間の限界（きせい）を壊す”というもの。その破壊力は、はてしない。回復能力にも作用する。掲げる正義など正義の使徒としての事は、現時点では不明。

名前：楠舞（くすのきまい）
使徒名：静観のロット
格：正義の城日本支部第三部隊副隊長
年齢：２１歳
身長：１５６ｃｍ
誕生日：１１月１１日
血液型：Ｏ型
髪の色：濃い青（髪型は後ろに束ねた、甲ノ宮とは違う風なツインテール）
目の色：濃い青
能力：自動殺人（アウトマティカメンテ）
人物詳細：後ろ髪の方をツインテールにして束ねている可愛らしい女性。２１歳ではあるが、比較的若く、学園生にも見間違えられる

ほど（ロリというわけではない）。性格は軽く、能天気。正義の使徒としての犯罪者に向ける殺意はあるにはあるが、口調は変わらない。結構な面食いで、仁矢を榛原の次くらいにプライベートではアプローチしている。ただ、それだけが好きなのではなく、昔のある件で好意を抱いた。能力は、”何十分か特定の人の様々な動きを見続ける事でその人の行動のパターンを読み取りその人に最も最適な行動を選択して自動で動く『自動殺人（アウトマティカメンテ）』。使い勝手がいい能力だが時間がかかるのが難。掲げる正義など、細かい事は現時点では不明。

【第四部隊】

犯罪者との戦闘で傷ついた負傷者を治す、医療専門部隊。前線には出ず、医療に専念する。日本の正義の城では総勢２００人ほどいる。

名前：心情愛（しんじょうあい）
使徒名：聖母のマリア
格：正義の城日本支部第四部隊隊長
年齢：１９歳
身長：１６２ｃｍ
誕生日：１２月１４日
血液型：Ａ型
髪の色：黒（長髪）
目の色：黒
能力：時間再生（レベティシオン）
人物詳細：黒髪の長髪の、優しい雰囲気のする美しい女性。去年、神正学園を卒業した。敬語と普通の言葉を混ぜて話す。同年代の甲ノ宮とは昔からの付き合いで、親友と言ってもいい程の仲。仁矢の事をある昔の一件で気に入っており、好意を寄せている。能力は、”『触れた物』または『生物』の状態を２４時間以内にあった状態に戻す”、『時間再生（レベティシオン）』。この能力を使えば、どんなにひどい状態だろうが２４時間以内に健康であった状態があれば、いくらでも戻

せる。欠点として、戻す前と後の差が大きいほど、生物に使った場合は長く昏倒してしまうという事。また、時間が止まった（死亡した）生物には使えない。犯罪者に対する思いや掲げる正義は不明。

名前：遊動街（ゆうどうがい）
使徒名：包吸のストラ
格：正義の城日本支部第四部隊副隊長
年齢：３２歳
身長：２１１ｃｍ
誕生日：１月１日
血液型：Ａ型
髪の色：包帯に隠れているので不明
目の色：濁った灰色
能力：？？？
人物詳細：全身に包帯を巻いている、大男。淀んだ口調で、喋る前に、「……」とつける。見た目とは裏腹に医療専門部隊のせいかかなり優しい。掲げる正義、犯罪者に思うところ、などは現時点では不明。

【第五部隊】
犯罪者と正義の使徒との戦闘で失われたものを修復したりして、犯罪の傷跡を消す専門の部隊。
犯罪者の死体の回収なども、この部隊がやる。
基本的には街の傷跡を修復する部隊なのだがそれなりに戦力のある部隊なので、前線にも度々参加する。
犯罪の傷跡を修復するという重要かつ大規模な部隊の為か、日本支部だけでも総勢５００人程いる。

名前：戦始終牙（せんじしゅうが）
使徒名：狂乱のボギー

格：正義の城日本支部第五部隊隊長
年齢：２３歳
身長：１７９ｃｍ
誕生日：４月１９日
血液型：Ｂ型
髪の色：薄い赤
目の色：薄い赤
能力：???
人物詳細：頭にバンダナをつけていて、髪がボザボサの、言葉遣いや風貌が荒々しい男。昔は仁矢に突っかかっていた様だがある一件を経て仁矢を慕い、兄貴と呼び、敬うようになる。非情に乱暴で、自己中心的で基本的には仁矢と玲愛の言う事しか聞かない。また、空気が読め無かったり仁矢と玲愛以外の使徒には少し仲間意識が薄い。玲愛とは昔からの知り合い。正義の城に入った理由や掲げる正義は不明。犯罪者に対しての思い入れも不明。

名前：守凪玲愛（かみなぎ れあ）
使徒名：創造のケネクティクス
格：正義の城日本支部第五部隊副隊長
年齢：１５歳
身長：１４９ｃｍ
誕生日：５月１日
血液型：ＡＢ型
髪の色：紫（ショートヘアーで右目が隠れてる）
目の色：紫
能力：???
人物詳細：紫色のショートヘアーの少女で、右目は髪で隠れている。淡々とした口調で、無表情で何を考えているのか読みづらい。たまに暴走する戦始を宥める事が多い。戦始とは昔からの付き合いだが、別に異性として意識した事はなく、親友感覚。正義の城に入った理

由や掲げる正義は不明。犯罪者に対しての思い入れも不明。

【第六部隊】

犯罪者の出現場所に正義の使徒を送り込む、言わば正義の使徒送検部隊。基本的に副隊長が必要ない部隊なので、隊長格しかいない。その代わり、正義の使徒を専用ヘリで送るという重要な仕事があるので、人数は多く、日本支部は総勢１０００人ほどいる。しかし、その殆どが仕事内容のせいか無能力者。世界の正義の城の二割の無能力者とは、第六部隊のことである。

名前：期才十（きさい じゅうじ）
使徒名：鬼才のバトラ
格：正義の城日本支部第六部隊隊長
年齢：２９歳
身長：１７７ｃｍ
誕生日：１１月１１日
血液型：ＡＢ型
髪の色：黒
目の色：黒
能力：無し
人物詳細：黒いボサボサの髪に、眼鏡をかけている、気だるげそうな男。マイペースな感じで喋る。何気に今年で三十路突入な事に怯えてる。歴代全正義の使徒初の、能力が無い隊長格。正義の城に入った理由、犯罪者に対しての思い、掲げる正義は現時点では不明。

【第七部隊】

犯罪者の居場所や、犯罪者の過去など、犯罪者の事に関してを調べる部隊。また、他の事に関してもある程度情報は調べている。その情報網は、警察以上。
日本支部の人数は、およそ６００人程。

第六部隊と同じく特に副隊長と言う格があまり意味を成さないので、副隊長はいない。

名前：榛原優香（はいばら ゆうか）
使徒名：遠収のメルト
格：正義の城日本支部第七部隊隊長
年齢：２２歳
身長：１６６ｃｍ
誕生日：２月１０日
血液型：Ｂ型
髪の色：桃色（長髪）
目の色：緑
能力：違法収集（イグアルメンテ）
人物詳細：長い桃色の髪の、スタイルのいい色気漂う女性。テンションが微妙に高い。仁矢をある一件以来心底愛していて、隙あらばアプローチしてくる。
能力は、”『触れた物』や『生命』が持つ情報を知る”『違法収集（イグアルメンテ）』。非情に使い勝手のいい能力で、最高位の情報収集能力。正義の城に入った理由や、犯罪者に対しての思い入れ、掲げる正義は不明。

名前：アリサ・ニーズ・フィアッカ
使徒名：電網のリア
格：正義の城スペイン本部第七部隊隊長
年齢：１８歳
身長：１６６ｃｍ
誕生日：４月２８日
血液型：Ａ型
髪の色：金髪（髪型はポニーテール）
目の色：黄色
能力：雷力行使（トゥルエノ）

人物詳細：金髪の、ポニーテールをした、可愛く、凛とした美少女。生真面目な性格。アノマーリアの始末の為、本部から送られてきたが、別件で仁矢を本部に引き込もうとも考えている様子で、本人はそっちの方を優先している様子。能力は、”自らの身体から電流を発生させる”『雷力行使（トゥルエノ）』。戦闘に使うことも、情報収集にも使えるが、どのようにして情報を収集するかは現時点では不明。掲げる正義、正義の城に入った理由、犯罪者に対しての思い入れも不明。

【支部長】

正義の城の、それぞれの支部の総隊長的な役割を持つ。基本的には全部隊に指示を飛ばしたりとするが、時に緊急のとき前線に出る事も偶にある。

名前：王城最（おうじょうさい）
使徒名：神童のスカージ
格：正義の城日本支部支部長
年齢：４５歳
身長：２０５ｃｍ
誕生日：１０月１９日
血液型：Ｏ型
髪の色：濃い赤（長髪）
目の色：濃い赤
能力：重力無視（グラベダド）

人物詳細：正義の城日本支部をまとめる、赤い長髪の、青年の様な若さを保つが、年齢は４０を超える。仁矢と愛理を引き取った張本人であり、仁矢と愛理に、親の様に接している。仁矢と同じく、過去にアノマーリアに大切な人を殺された事があり、アノマーリアを憎んでいる。能力は”自身と、触れた物の重力を操作する”『重力無視（グラベダド）』。掲げる正義、正義の城に入った理由などは不明。

【正義の使徒の関係者】

名前：火向愛理（ひむかい あいり）
格：火向仁矢の妹
年齢：１５歳
身長：１５５ｃｍ
誕生日：６月２３日
血液型：Ａ型
髪の色：水色《長髪でストレートロング》
目の色：赤
能力：天使（プラス）？
人物詳細：仁矢の妹で、大人しそうで、儚い感じのする美少女。現在神正学園の一年生。大体丁寧語で喋る。仁矢を兄として、心から愛して、尊敬している（ブラコン）。幼い頃にアノマーリアに両親を殺され、それから心が病んでしまい、五年間は学校さえ行けなかった。しかし、仁矢のお陰で、今は完全に心が元に戻っている。アノマーリア曰く、天使（プラス）の器があるらしい。しかし本人は能力も全く知らないらしく、目覚めてもいない様子。仁矢が犯罪者を殺す、正義の使徒になったのは構わないが、それで最近大好きな兄との時間がとれない事に少し寂しさを感じている。

主要登場人物紹介（悪側）（前書き）

はい、悪側追加です
今考えたら、悪側必要なくないか・・・？と思ったけどそんなのは気にしません。
それと、キャラのイラストを描いたりもしてみました。よかったら見てみてください。ｈｔｔｐ：／／２０７６．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ２１４１３／

主要登場人物紹介（悪側）

【犯罪者】

【Ｓ級犯罪者】

世界で三人しかいない、最も危険な犯罪者。現時点では3人しかいない。

存在するだけでこの世が混乱しかねない程。

それぞれを現す異名があり、その異名で呼ばれている。

名前：？？？

異名：異常（アノマーリア）

年齢：？？？（恐らく５０歳以上だが、見た目は仁矢と同じくらい）

身長：１７６ｃｍ

誕生日：？？？

血液型：？？？

髪の色：銀髪

目の色：青

能力：絶対（アブソルト）

人物詳細：『最悪』の犯罪者。見た目は普通の青年だが、実際は５０を超えている。服装などは普通だが、雰囲気が何とも言えない程に異常で、動いただけで世界が狂ってしまうんじゃないかとも思わせるほど。本人の口調も軽い若者のような感じだが、その一言一言が異常さをかもし出す。仁矢とよく似た髪質をしているが、本人曰く仁矢とは何の関係もないらしい。５０年前、正義の城が作られるきっかけとなったＣＬＥＡＲ事件を起こし、２０年ほど前に王城の恋人を殺し、１３年前に、火向一族惨殺事件を起こしてから姿を隠した。このように様々な残忍な事件を起こす、血も涙もない人間の様に見えるが、ジエルが殺されたのを知ったときは本当に哀しそう

にしていた。現在になって姿を見せ、仁矢や他の正義の使徒を圧倒した。神(ゼロ)を呼び出す、計画(プラン)を成功させるために、十万人以上の殺害を画策したり、天使(プラス)の器である愛理を狙っている。能力は、”この世界で出来る事に限定し、過程を壊した結果として出力する”『絶対(アブソルト)』。神(ゼロ)を呼び出すのは、あくまで過程のようで真の目的は不明。また、計画(プラン)を楽に遂行するために、プランメンバーという7人の強力な犯罪者とその他の沢山のサポートメンバーの犯罪者を集めている。

名前：???
異名：斬(キリ)
年齢：????
身長：????
誕生日：????
血液型：????
髪の色：黒と白が混ざったような色
目の色：黒
能力：????
人物詳細：『最低』の犯罪者。詳しい事は現時点では不明。

名前：???
異名：不明(アンノウン)
年齢：????（
身長：????
誕生日：????
血液型：????
髪の色：????
目の色：????
能力：????
人物詳細：『最恐』の犯罪者。今はスペインに潜んでいると予測さ

れている。ここ１０年は活動してなかったが、８年前に衣といるの水並にを確認された。詳しい事は現時点では不明。

【Ａ級犯罪者】

正義の使徒の介入が無ければ楽に国一つを壊せるであろう、という犯罪者達。

その中で、正義の城の介入があっても国を壊した経験のある、１０人を、十人の害悪者（ディエス・ディアブロス）といい、略して、十害（ディエロス）と呼ぶ。

名前：ジエル＝グラスト（本名ではない）
異名：プランメンバー、十人の害悪者（ディエス・ディアブロス）
年齢：２０代前半
身長：１７０ｃｍ
誕生日：？？？
血液型：ＡＢ型
髪の色：黒（顎を超え、首まで届くほどの前髪）
目の色：紫
能力：念発火（フラマ）

人物詳細：Ａ級犯罪者の中でも、最も危険と判断されている、国を壊した事もある、十人の害悪者（ディエス・ディアブロス）の一人。また、アノマーリアの計画（プラン）の要、プランメンバーでもある。顎まで届く前髪と、その隙間から覗く発狂したような紫色の目が特徴的。また、口を歪ませて笑う事が多い。口調に規則性がなく、一見イメージ通りの馬鹿な犯罪者に見えるが、その口調は、口調で動きを読むことができる正義の使徒を回避するために作っていたり、大量の武器を前に焦ることなく炎で処理したりと蜃気楼で敵を欺いたり、熱中症を誘発させたりと、冷静で、頭が少し回る。素の口調は少し乱暴なもの。有する能力は、仁矢曰くメジャーな『念発火（フラマ）』。ただし、そのレベルははてしないものでもあり、仁矢曰く、世界で最高位の念発火能力者の、アメリカのゴルパス支部長とやらも軽く上回るらしい。その能力を使い、

仁矢を燃やし殺したと思ったが、仁矢の『常識壊し』によってビルに叩きつけられ、下敷きになって肉塊すら残さず死亡した。また、計画(プラン)に何か思うところがあったようだが詳細は不明。

名前：アイラー・ステニバス
異名：プランメンバー、十人の害悪者(ディエス・ディアブロス)
年齢：？？？
身長：？？？
誕生日：？？？
血液型：？？？
髪の色：？？？
目の色：？？？
能力：？？？
人物詳細：甲ノ宮の姉を殺した人物で、プランメンバーであり、十人の害悪者(ディエス・ディアブロス)の一人。詳しい事は現時点では不明。

名前：小谷亮(こたにりょう)
異名：サポートメンバー
年齢：？？？
身長：１６７ｃｍ
誕生日：？？？
血液型：Ｂ型
髪の色：黒
目の色：黄色
能力：硬質変換(ドウレサ)
人物詳細：Ａ級犯罪者で、サポートメンバーの一人。見た目こそ普通だが、服装はタキシードという不自然かつ阿呆らしい格好をしている。語尾に「～思ってみたりするんだけど」とよくつける。有する能力は、”” 触れた物質の硬さを変更する『硬質変換(ドウレサ)』。その能力を使い、服の硬さを変更し九条の攻撃にすら耐えたが、性質は変

えられないらしく、爆弾の火で服の一部を燃やされ、そこを、『自動殺人（トマティカメンテ）』状態の楠に狙われ、重症を負い、最後は喉元に刀を突き刺され死亡した。

名前：バナム・ステファニー
異名：サポートメンバー
年齢：３０代以上
身長：１９８ｃｍ
誕生日：？？？？
血液型：？？？？
髪の色：茶色
目の色：？？？？（仮面を被ってるので不明）
能力：精神乱し（コラソン）
人物詳細：Ａ級犯罪者で、がたいのイイ大男。作業服に、へんてこな仮面をつけており、小谷と同様バカらしい格好。有する能力は、”自分を認識している者の知覚情報と視覚情報を狂わせる”、『精神乱し（コラソン）』。この能力を用いて、甲ノ宮を追い詰めたが、『感情装填（センティメント）』によって、敗れる。その後、自爆したかに見えたが、逃げ延びており、ジエルと合流したが、仁矢の『常識壊し（センティードコムン）』によって、ビルに叩きつけられた挙句に炎上して死ぬという悲惨な最期を遂げた。

【アノマーリアと協力する者】

名前：ラス・ウィディア
異名：プランリーダー
年齢：２０代
身長：１７８ｃｍ
誕生日：？？？？
血液型：？？？？
髪の色：薄い水色

目の色：薄い水色
能力：???
人物詳細：氷のように冷たい目と髪、そして色白の肌の男。ジエル＝グラストに、プランリーダーと呼ばれていた。詳しい事は現時点では不明。

名前：水並衣（みなみ ころも）
異名：プランメンバー
年齢：１８歳
身長：１６４ｃｍ
誕生日：1月１４日
血液型：Ｏ型
髪の色：銀髪（長髪）
目の色：銀
能力：???（持っているかも不明）
人物詳細：学園生でもないのに、学生用の冬服とスカートをはいている、長い銀髪の、水並の義姉。気楽なテンションで、アノマーリアを見ても、動じない。両親は死んでいて、９年ほど前に水並家の両親に引き取られたが、８年ほど前に水並の両親も死んでしまったときに、姿を消し、アンノウンと一緒にいたのが目撃されているが、今はアノマーリアと何故か行動し、プランメンバーとなっている。能力を有しているのかは不明。

第十四章　襲撃（前書き）

シリアス成分少なめです。

まあ、『少なめ』なだけですが……（苦笑）

第十四章　襲撃

「……」

午前7時。今日は、アノマーリアが出現した日の、翌日。

正義の城日本支部第一部隊隊長である、火向仁矢は、正義の使徒の正装（スーツ）に身を纏い、５０階の更に上にある、屋上に無言で佇んでいた。

その赤い瞳に映るのは、ジエル＝グラスト達によって、破壊されつくした、黒地丘市。

都会には珍しい自然は、跡形もなく焼け、建物も破壊され尽くしている。

建物や植物などは、第五部隊……犯罪の傷跡を修復する部隊でもある彼らが、今屋上（ここ）から見る限り、現在も尽力してくれているから、時間は掛かるといえど心配はないだろう。戦始と、神凪の姿も見える。警察の人間も動いている。

しかし。

（人は、生き返ることは出来ない……）

そう。今回の件で、黒地丘市は、多大な死亡者、行方不明者が出た。

いくら第五部隊と言えども、失った命は、戻す事は出来ない。

その元凶たる存在は、仁矢達、正義の使徒が始末したものの、それで死んだ者達が生き返るわけでもない。

その事実に、仁矢は苦虫を噛み潰したような顔をする。

（それに加え……問題なのは、アノマーリアの出現の事だ。俺の感想はともかく……あいつが再び現れた事によって、”またパニックが起こるかもしれない”）

Ｓ級（クラス）犯罪者の出現とは、それは即ち、世界の混乱に繋がる。
それは、Ｓ級（クラス）犯罪者の犯した罪は、それほどまでに、世界を揺るがしたものばかりだからだ。

例えば、アノマーリアの起こした事件では、代表的なものでは、世間ではＣＬＥＡＲ（クリア）事件と呼ばれるものがある。
これは、アノマーリアをＳ級（クラス）犯罪者と認定すると同時、正義の城の設立の原因ともなった程の、事件。
事件の詳細は、大まかに言えば、単純なものだった。

アノマーリアという一人の存在によって、”三つの国が消された”というもの。

文字通り、とある三つの国が、三日程で、この世界から滅んだのだ。
アノマーリアの手によって。
未だに滅ぼした理由は分からないが、これだけの事を、能力者が繁栄してきた頃にしたのだ。
超能力者の力を世界に示すのには、十分すぎる事件だった。

これによって、５０年前、正義の城の設立に、ＧＯサインが通った。
そして、この圧倒的な事件は、今においても、人々の頭に刻み込まれている。
それ程の事をした存在が、再び世界に現れたとなったら、どうなるかなど、言うまでもない。

（一時的なパニックは避けられないな……。昨日のジエル＝グラス

ト達の件も、世界に報道しなくてはならないからな……）

昨日の黒地丘市炎上事件は、未だに世界に全く報道されていない。昨日の黒地丘市の事件の事を認識できているのは、正義の城関係者と、警察関係者、そして、被害者達。これほどまでに、大きな事件だというのに、だ。

それは、本部に連絡した結果、報道させるのは、少し待て、という伝令を受けたからだ。

それに加え、正義の城のルールの一つに、『世界に無駄な混乱を与える者、正義に反する行動を取った者を、犯罪者と同じとして罰する』というものがあり、これは、マスコミも例に漏れず該当するので、マスコミ連中も流石に身の安全だけは惜しいらしく、全く正義の城の事には絡んでこないからだ。

とはいえ、これは一時的な安息であり、世界に報道したら、十中八九混乱は起こるだろう。

それに加え、アノマーリアの計画（プラン）。

下手をすれば、大量の人間が死ぬ。

そして、愛理の身も狙われている。

その事実を再確認し、これから起こり得る、最悪の事実を想像し、仁矢は歯噛みする。

そのとき。

「水並か」

「は、はい。ど、どうもおはようございますっ……」

足音……もとい、杖を突く音が聞こえたので、後ろを振り向く。
そこには、正義の城の正装を着た上に、セーターを着込む、水並の姿があった。
風で、その桃色の長い髪が揺れている。
やがて、杖をかつかつと突き、仁矢の横まで歩いてきて、並んだ。
何か言いたげに、こちらをちらちら頬を染めながら、見てくる。

「何だ？」

「あ、はいっ。えっと、その……げ、元気ですかっ？」

「……良くはないな。いきなりどうした。そんな世間話をするタイプだったか？　お前」

「そ、そうですか！　それなら、い、一緒にど、どこか出かけませんか！？」

「おい、ちょっと待て。何だその脈絡が全くない一方通行な会話は」

「そ、それじゃ、9時に一階のロビーで待ち合わせましょう！　愛理ちゃんも一緒にっ！」

「はっ？　おい、ちょっ……って行きやがった。……何なんだ？」

全く成立しない一方的な会話を持ちかけて、一方的に下の階まで降りる為の下の階に続く階段とエレベーターが設置されている、屋上の扉の中まで赤面しながら走り去っていく水並に、（ちなみに杖を突いているにも関らず物凄い速度だった）訳が分からない、といった調子で仁矢はため息を吐く。

そのとき。

「ぷ、ぶふはは……ふぶふぅっ……！」

「……」

変な、笑いを堪えているかのような声が、水並が入っていった屋上へと続く扉の中から聴こえた。

その声を聞いて、仁矢は、扉まで近づき、勢いよく開け放った。

中には、下の階まで続く階段と、三つのエレベーターがあり、水並はもう行ったのか、いない。

しかし。

「あ」

仁矢の隊の副隊長であり、親友でもある木戸大河が、扉の影に潜んで座っていた。

突然現れた仁矢に驚き、しまった、とでも言いそうな表情をしている。

そんな木戸を見て、仁矢は。

思いっきり扉に木戸を叩き付けた。

「ごっはぁあああああああああ！！！」

恐らくこいつがけし掛けたんだろうな、と確信はしていたが、問い詰めてものらりくらりかわされて余計に腹が立ちそうなので、とりあえずその一発だけですっきりしておき、倒れる木戸を傍目に、仁矢は中に設置してある会談を使って、下の階まで降りてゆく。

（まあ……仕事も今日は無いし、愛理とも最近時間がとれてなかったから、丁度いいか）

そんな訳で、午前９時。一階のロビーに、仁矢は佇んでいた。屋上も含めれば、系５０階まである正義の城。
１階は、普通の大企業の会社のロビーのような作りになっている。
付近には、受付嬢……もとい、第七部隊の隊員が、二名程、受付の場所に座っている。幾つか、座るためのソファーやテーブルが置いてあり、火向兄妹は、その中の一つに、腰掛けている。

仁矢は、流石に今日は正義の城のスーツではなく、白いシャツの上に、半そでの黒いジャケット。そして下はダメージジーンズという服装だ。
地球温暖化の進む半ばの五月では、正義の城の服は大変暑いので、幾分涼しげだ。

対する愛理も、当たり前だがいつもの制服ではなく、白いキャミソールの下にふりふりのスカートをはいている。

二人は、互いに向き合いながら、談笑していた。

「それにしても、兄さんと出かけるなんて、久しぶりですね」
「ああ、ここんとこ……ずっと忙しかったからな。時間とれなくて、悪かった」
「いえいえ、いいですよ。仕事ですから、仕方ないですし。何より、その分、今日は沢山付き合ってもらいますから。えへへっ」
「そうだな……。それと、その……何だ。似合ってるぞ、服。可愛い」
「！　ふふっ、ありがとうございますっ兄さん。兄さんも、格好いいですよ」
そう言って頬を少し染めながらはにかむ愛理に、吊られて仁矢も少し笑う。
やがて、しばらく兄妹の会話を楽しんで、5分を切った頃に、時計を見て、愛理が言った。
「それにしても……結構遅いですね、綾さんにしては」
「ああ、そうだな。あいつは9時に集まるといったら五分前にはいるか、最低でもきっかり9時にいる奴なんだがな」
「5分も遅れるなんて、綾さんにしては珍しいですね。何かあったんでしょうか？」
「す、すみません～！　遅れてしまいました～！」

「お、来たか。お前にしては遅かったな？　一体どうした……って……」

そこで、仁矢の言葉が止まった。

それは、初めて見る、水並の私服……正確に言えば、首筋から肩まで見えるセーターに、ショートパンツという水並の服に、少し見惚れたからでもあった（相変わらず右手に固定されている機械性の杖は外れていないが）。

が、一番の理由は、水並の後ろにいる、『奴等』の事が一番の原因だろう。

仁矢は、『奴等』……水並の後ろに佇む、二人を見て、うんざりしたような口調で言った。

「何でお前達が……」

そして、『奴等』の一人……というか、さっき仁矢に思い切り潰された、シャツに長ズボンという私服姿の木戸大河が、応じた。

「はっはっは。そりゃあ、俺がけしかけたんだ。俺が行かないわけ無いだろう？　可能性的に考えてさ」

「可能性的に……な。よく言う。まあそれはいいとして……アリサ。お前、体調はもういいのか」

「はい。問題はありません。お気遣い、有難うございます」

アリサ＝ニーズ＝フィアッカ。

本部から送られてきた、第七部隊隊長の、金色の長いポニーテール

の少女。今のメンバーでは、一人だけ正義の城のスーツに、スカートをはいている。

アノマーリアと相対し、王城最と共に敗れ、気絶していたが、今日の6時に意識が戻ったらしい（王城は未だに意識が戻っていない）。それ自体は、喜ばしい事だが……。

アリサの目的を思い出し、談笑する木戸と愛理を傍目に、小声で水並に仁矢は尋ねる。

（おい、水並。ちょっといいか）

（は、はいっ？　何でしょう？）

（大河の馬鹿は勝手に着いてきたのは分かるが……。アリサは、何で来たんだ？）

（あ、はい、ええと……確か、私が私服でロビーまで行く時、何処へ行くんですか、って呼び止められたんです。それで、火向君と愛理ちゃんと一緒に、出かけるって言ったら、私も行きますって言って着いてきたんです。そういう感じで……少し遅れてしまいました。すみません……）

（……そうなのか。分かった。まあ、時間は気にするな。たった五分だ。それに……あいつらのせいであって、お前のせいじゃないしな）

（……はいっ！　有難うございますっ……。あ、それと……その……）

（？　何だ）

（服……似合ってますか？　えと、その……はい）

（……はは。うん、似合ってるぞ。可愛いから安心しろ）

（っっっ！　あ、ありがとうございますっ……。う、嬉しいです……）

そして、続いて、アリサに、小声で、尋ねる。

（おい、まさかお前……俺を本部に引き込む為、一緒に行こうしてるんじゃないだろうな）

（はい。勘がいいですね。仰るとおりですよ。あなたと直接行動していた方が、引き込むチャンスもありますしね）

（……この前の勝負で、しばらくは勧誘とやらはしないと言わなかったか）

（ええ、言いましたね。その、”しばらくが立ったんですよ”。一日という、ね）

（屁理屈か）

（いえいえ。実際、期間は決めていなかったでしょう？　落ち度は、あなたにもありますよ。正義の使徒なら、駆け引きも必要とするべきです）

（ふん。まあいい。どっち道……俺は本部には行かないからな）

（言うのは自由ですよ、……お互い、ね）

お互いに言葉を交わし、仁矢は、皆に呼びかける。

「よし……。それじゃあ、行くか」

はい、おう、とそれぞれが応じ、外へと出ようとした。

「そ、その、ちょっと待ってくれませんか？」

「？　何だ、水並」

出ようとした時、水並が突然言った。

「その、風歌さんが来るので……少し、待ってもらえませんか？」

「甲ノ宮が？」

甲ノ宮風歌は、バナム・ステファニーとの戦いで、体に激しい損傷を受け、現在は心情の時間再生（レペティシオン）で、昏睡状態にある筈なのだが……。

その疑問に答えるように、水並は言った。

「はい。実はさっき起きた様で、体調はもう愛さんの能力で大丈夫だったようなんですけど……どうも、心の方が少し不安定だった気がしたので、ちょっと息抜きになればいいなあと思って、誘ったんです」

（成る程……。おそらく、アイラー・ステニバスの件で、だろうな

……）

「わかった。それじゃあ、しばらく待つか。皆、いいよな？」

仁矢の問いに、愛理とアリサが、「勿論です」と答え、二人で仲良くソファーに座って談笑を始める（二人は初対面なので、色々と話も多いのだろう）。

木戸は、「別にいいぜ～」といつもどおり気楽な調子で言った後、水並の近くまで寄り、にやにやしながら口に手を当てて、こそこそと話しはじめる。

（おいおい～。折角、仁矢と約束を取り付けたって言うのに、愛理ちゃんはともかく、アリサに甲ノ宮まで追加とは中々余裕じゃないか水並さ～ん？）

（う、うぅ……。し、しょうがないじゃないですかぁ……。アリサさんは勝手に付いて来ちゃうし、風歌ちゃんは元気なさそうで心配だったんですもん……。っていうか、そう言うならせめて、木戸君抜けてくださいよ……。木戸君居ると、余計な事までされそうで、心配なんですよぅ……）

（ひっでぇなあオイ！？　まあまあ、そこは俺の幻想起動（ファンタシア）に任せろって。１％を１００％に変えるこの能力……。水並の叶いそうにない０．１％未満、０％以上の恋も、１００％成就させてやるから！）

（そこまで言いますかっ！？　泣いちゃいますよぅ！？　と、というかそれが余計なんですよぅ！　木戸君は何も手出ししないでくださいっ。そ、そもそも、今回は元気が無い火向君を少しでも元気にする！という目的の筈ですっ）

（成る程な～。そんで仁矢を元気付けて着々と地道に仁矢の好感度をＧＥＴか。こいつはとんだ策士もいたもんだなあ。カックィーー！　惚れちゃいそうだぜ！　水並ぃぃぃ！）

（ち、違いますよぅ！　もー！）

「何をしてるんだあいつらは……？」

シンプルな黒のデザインの携帯を右手で操作しながら、ふと木戸と水並の方を見て、仁矢は言った。

こそこそと会話をしていた後、いきなり水並が顔を赤くして、左の杖が装着されてない方の手で、可愛らしくぽこすかと木戸を殴っている。

そんな水並を見て、仁矢は思う。

（可愛いな……）

表情があまり変わらず、無表情がデフォルトなこともあって、異性にも全く興味が無さそうだと誤解されがちだが、実際はそうでもない。

普通に、異性を可愛いとも思うし、少しはえろい事にも興味はある。

そこら辺は普通の青年と全く持って変わりない。

ただ、それを表情にはいつも出さないだけの話。

悪く言えば、ムッツリスケベなのだ。

殆ど表情にこそ出さないものの、僅かに口元を綻ばせる。

それに気づき、すぐに口元を直し、再び携帯の画面を見つめていると、バイブ音が鳴り、メールが来た。

返信者の名前は、『九条豪』。

「来たか」

先ほど、水並が甲ノ宮を誘ったと言って、同じように、昨日のアノマーリア襲来で、隊員を何十名か失った九条を思い出したのだ。甲ノ宮と同様、心に傷を負ったであろう九条を心配し、一緒に出かけないかを、メールで送ってみたのだ。勿論、副隊長の楠も一緒に、とメールして。

慣れた手つきで、携帯を操作し、メールを読む。

メールの内容は、以下のようなものだった。

『誘いは嬉しい。だが、すまない。俺は今、仕事が一件あるのだ。楠も同行する。だから、一緒に出かける事は出来そうにない。またいつか、機会があったら誘ってくれ』

「仕事……？　今日の分はもう無かった筈だが……。まあ、いいか」

遠まわしに、一人にしてくれという意味でも、あるかもしれない。そう思い、返信をしようと思い、送られてきたメールに再び目を通して、何行か下に、まだ文字があるらしく、スクロールできるようになっていたので、下にスクロールさせてみる。

そこには。

『最後に、気遣い感謝する。では、いずれまた』

「……バレてたか」

それを確認し、携帯をポケットにしまう。

そこへ。

「あっ、風歌さんっ。こっちですよ。こっちぃ～」

水並が、一つのエレベーターのあるほうへと、手を振る。

エレベーターの中から、甲ノ宮が歩いてくる。

やがて、仁矢たちの前までその茶色のツインテールを揺らしながら歩いてきて、何故か少し頬を染めながら、一言。

「……待たせたわね」

ほぼ部屋でも正義の城の服を着ている甲ノ宮だが、今は違う。

白いブラウス……スモックブラウスというのだろうか。それを上に、下は、ジーンズ。

その、いつもと違う新鮮で、可愛らしい姿に、皆が一瞬言葉を失う。

その沈黙を破ったのは、木戸だった。

「ひゃっほーぅ！　風歌さん可愛いぃいいいいいい！　是非、その香りを俺に嗅がせてぎゃふうううううううううううう！？」

満面の笑みで豪快に甲ノ宮目掛けて飛び掛る木戸に、ポーチから取り出した拳銃を出し、迷い無く木戸目掛けて撃ち、木戸が床に崩れ、悶絶する（殺意の弾丸ではなく、敵意の弾丸なので、威力は少なめ）。

そんな悶える木戸など当たり前の様に皆はスルーし、口々に、甲ノ宮の服を褒め称える。

「わー。とっても可愛いですね、甲ノ宮さん！」

「そ、そうかしら？　ありがとう、愛理。あなたも似合ってるわよ」

「うんうんっ。とっても似合ってるよ、風歌さん」

「これはこれは驚くほど似合いますね。素材がいいと、ここまで良くなるものなのでしょうか」

次々に褒める、愛理、水並、アリサに、甲ノ宮は少し照れながら、楽しく話している（アリサのは褒めているのか微妙だが）。

「……」

「おう？　どーしましたあ火向仁矢クゥン？」

「死んでろ」

「おぶぅっ！？」

仁矢が甲ノ宮の私服に少し見とれていたところに、もう復活してしまったらしい木戸が、気持ちの悪い笑みをにたにたと張り付かせながら、仁矢の腕にぺたぺたと触ってくるので、迷わず蹴った。

「てててて……。おま、本当マジやめて。俺がＭになったらどうする気だ」

「どうもしないな。気持ち悪さがランクアップするだけだ」
「ふふ～ん。今しがた、甲ノ宮の私服を舐めるようにして見ていた奴にそんな事を言われるとはなぁ？」
『えっ！？』
「ふむ……」
「んなっ……！　て、てめぇ何勝手な事言ってんだ！」
木戸の発言に、愛理と水並が、声を揃えて驚く。アリサは、意味ありげに何やら頷き、仁矢が珍しく慌てふためく。
そして、当の甲ノ宮本人は……。
「……引くわね」
「兄さん……」
「火向君……」
ドン引きしていた。おまけに二人も。
慌てて仁矢は弁解を始める。それと同時に、後で大河を常識壊し（センティードコムン）を使って全力で叩き潰そう、とも愛理にすら、変な目で見られた事に激しい怒りを覚えた仁矢は、思った。
「ち、違うっ！　べ、別に俺は変態（大河）のようにお前をいやらしい目で

見てた訳では全然ない！」

「ふぅん？　どうだか。なら一体、どういう目で、私を見ていた訳？」

「そ、それはっ……！」

「それは？」

言えない。

初めて見た、私服に、その可愛さに、目を奪われていたなど、死んでも言えない。

そんな事を言った瞬間、仁矢の精神は、恥ずかしさに一瞬で飲み込まれる事だろう。

だが。

それを言わないと、ド変態（木戸大河）と同じ格付けにされてしまう。

ならば。

それぐらいの恥ずかしさなど――――乗り越えるしかないッッッ！！

一瞬で判断した仁矢は、顔を赤く沸騰させながら、言った。

「お前の私服が、新鮮で可愛かったから目を奪われていたんだよっっっ！！！」

言った。

言ってしまった。

その瞬間。

「なっ、なななななにを……っ！？」

ボッという音が聞こえそうな程に、一瞬で甲ノ宮の顔が、赤く染まった。

そして。

ズガンッッッ！！！

「がっはあああああああああああッッッ！？」

「に、兄さーーーーんっ！？」

拳銃を仁矢に向け、思いっきり撃った。

エネルギーの塊が、勢いよく仁矢の腹へと直撃し、そのままロビーの壁にブチ当たる。バゴォンッ！　という轟音が響き、受付の第七部隊

の二人の女が、びくりと震える。甲ノ宮は、そのままズカズカと外へ出て行った。

愛理と水並が駆け寄ってきて、心配そうな顔で覗き込む。

「が……はっ」

「兄さんー！　大丈夫ですかっ！？」

「あ、あぁ……だ、大丈夫、だ……」

「いやっ大丈夫じゃないですよねぇ全然！？　声、掠れてますし！」

そう。全然大丈夫じゃなかった。

仁矢は、普段から常識壊し（センティードコムン）を使用していて、瞬間再生（レヘネラシオン）や、痛覚を遮断、他にも、身を守る為、様々な身体の常識（きのう）をいじっている。

だが、甲ノ宮の感情装填（センティメント）は、標的に放つと、無条件でその標的に関る全てを破壊してしまう。

何の感情を打ち込まれたのかはよく分からないが、それは、仁矢の構築していた能力を全て破壊し、直で腹に当たった結果、果てしないダメージが与えられた。無事な筈などない。

「ふ、ふふっ……」

だが、それにも関らず、仁矢は笑っていた。

それは何故か。

それは……。

（やった……。俺は、守ったんだ……。一発の弾丸と引き換えに、俺の変態と言うレッテルを剥がす事に、成功したんだ……。俺は、大事なものを守れた。だから俺は……勝ったんだ）

そのまま、仁矢はガクリと床に倒れた。

「に、兄さーーーーーーーーーーーーーーーーんっっっ！！？」

「あわ、わわあわわわっ！　だ、第四部隊呼ばなくちゃ！？」
倒れる仁矢に、慌てて、心配をする愛理と水並。それを見ながら、アリサは隣の木戸に向けて、言った。
「楽しいところですね……日本支部は。そういえば、私だけ服を褒めてもらっていませんね。これは不味い」
「正義の城のスーツをどうやって褒めちぎろというのだろうか？」
その後、何分かたってから、仁矢が気絶から目を覚まし、出かけるまで、２０分も掛かった。

仁矢たちがようやく出かけた頃、第三部隊隊長の九条と副隊長の楠は、正義の城がある所から、遠く離れた都市の、とある裏通りにいた。
周りには、太陽の光を遮断するように、建物が九条達を多い、近くには、裏通りならではの、青いゴミ箱がある。
裏通りとは言うものの、その道を直ぐ出た所は表通りで、人も、嫌になるほどの人数が居る筈で、誰かが入ってきてもおかしくは無い

筈なのに、その道には、九条と楠。そして、数人の隊員の男しかいない。

それは、道の外に、立ち入り禁止のテープが貼られているからだろう。

しかし、そのテープは警察の物とは違って、白い色。正義の城の、象徴の色。故に、正義の城を恐れるあまり、野次馬すら、テープの前に一人たりとも出はしない。

そもそも、何故テープを貼っているのだろうかという事だが、それは九条の足元の、それが原因だった。

「やー。それにしても、案外早く片付いちゃってよかったですね。九条隊長ー。ね？」

「うム……。そうだな」

足元を見て、その後ろに結ばれた青く、長いツインテールを揺らしながら、楠は言い、九条が静かに答える。

そこには、一人の男の死体。

出血は少なく、口からしか血が出てはいないが、瞳孔は完全に開き、脈は止まっており、完全に絶命している。

男の名は、害尾響（がいおひびき）。能力犯罪者で、指定危険度は、C級（クラス）の連続殺人能力犯罪者だ。

今回の仕事は、この男を殺す事で、先ほど、その仕事を終えたのだ。

「いや、それにしても文字通り瞬殺でしたね。害尾が能力出そうとした瞬間、九条隊長がすっごい速度で近づいて、思いっきり腹殴っ

て終りですもんね。内部圧迫とかそんな感じでお腹が耐えられなかったんですかね？」

「……ああ」

どこか、適当な感じで答える九条。彼の頭の中には一つのことが、占めていた。

仲間の、死。

死亡者がも当然出る正義の城だが、昨日まで、九条の率いる第三部隊の隊員は死亡者など出なかった。

初めての身内の死亡者。

それを体感して、九条の心は、それだけに囚われていた。

どうしたら死を防げたのか。どうしたら、このどうしようもない怒りを抑えられるのだろうか。

冷戦のクレイと呼ばれている癖に、少しも冷静さを保てなかった。

犯罪者を殺せば、多少は気も晴れるかと思い、本来警察に任せてもいいレベルの仕事を引き受け、殺したが、駄目だった。

怒りと、どうしようもないやるせなさは、全く頭から離れてはくれない。

それは、身内の隊員を失ったことのない、楠も同じ。

しかし、彼女は、明るく振舞い、何とか怒りを静めようとしている。

強い怒りは、犯罪者を滅ぼす力となるが、強すぎる怒りは、身を滅

ぼす力となる。
その事を、自分よりも余程理解している楠に、隊長失格だな、俺は、と心の中で自虐した。

「戻るぞ、皆」

『はいっ！』

九条の声に、楠達第三部隊は、威勢よく応じる。後の始末は、第五部隊がやってくれるので問題は無い。

音を鳴らしながら、正義の城の大型ヘリが近づいてきて、上から梯子を下ろす。
九条が梯子に手を掛けようとした、その瞬間。

ドカァァァァンッ！！

「なっ……！？」

ヘリが、突然音を立てて、爆発した。
炎を撒き散らしながら、裏通りまで、墜落して来る。

（まずいっ……！　あのまま裏通りに落ちたら、周囲の建物にも引火する……ッ！）

一瞬でそう判断した九条は、『規制解除（レグラシオン）』を発動した状態で、勢いよく、ヘリまでの５ｍの高さを飛んだ。

「ハァァッ！！」

そして、空中で動き、思い切り右腕を振り、ヘリの中を、前からむりやり壊してこじ開け、第七部隊の隊員の男を左腕だけで持つ。
そして、少し震える男に、少し何か言った後、左手を離した。
それを、第三部隊の、肉体強化系能力者３人で受け止める。
それを確認した九条は思い切り左足を振り、再び炎上して爆発寸前のヘリに勢いよく叩き込む。
「ハァァァァァァァァァアアアアアアアアアアアアアッ！！！」
瞬間。轟音を放ち、ヘリは空で爆発し、無数の残骸となって地上へと落ちていく。
それを確認した九条は、重力に身を任せ、地上に降り立つ。
そして、表通りに繋がる途中の道に鋭い眼差しを向けて、言った。
「いるのは分かっているぞ……犯罪者。出て来い……ッ！」
「っと……。やっぱりばれてもうてぇましたかぁ？　ぃやあ、流石に隊長格ともなると、違うもんでっせぇなー。ほぉんま怖い怖いィなぁ」
言葉に応じ、道の暗闇から、一人の男が、現れる。
シンプルな、スポーツトレーナーを着ていて、天然パーマの付け焼きつぼ以下の関西弁のような言葉と、開いているのか疑問に思うほどの細目が、特徴的だった。
男を見て、楠は呟く。
「あなたは、串中(くしうち)ね……！」

串中（くしうち）。
下の名前は不明。指定危険度Ａの犯罪者。未だ国を壊そうと動いた事はないものの、下手をすれば国一つを壊しかねないレベルの犯罪者。

「ー、そうやでぇい。わいが串中や。けどまぁ、ちょっと足りひんとこがあるなぁ」

そう言って、少し頭を掻きながら、にこにことした目を崩さずに、言った。

そして。

「『サポートメンバー』串中や」

「なっ！？」

そう言った瞬間、未だ遠くに離れていた串中が、九条と１ｃｍもない前に、存在していた。

その手には、銃。

笑い、楽しそうに口を歪め、串中は言う。

「よろしゅう、第三部隊隊長はん」

ズガァンッ！！

言葉と共に、引き金が引かれた――――。

第十五章　その名は（前書き）

更新遅れすぎですね・・・
見てくれた、数少ない方々、申し訳ありませんでした。
最近、忙しかったものでして。
これからは更新ペースを早くしていけたらと思います。

第十五章　その名は

ズガァンッ！

「隊長っ！！　避け――――」

楠の声が聴こえた。

銃声が響き、弾丸は九条へと吸い込まれていく。

それは、常人には決して避けられない距離で放たれた。否、動く事すらままならない。

この時点で、九条の命が呆気なく消えることなど、考えるまでも無く、決定していた。

しかし。

「！？」

それは、九条が普通の人間だったら、の話である。

『規制解除（レグラシオン）』の恩恵を得ている九条は、最早普通の人間と言うより、一人の人外とでも呼ぶべき存在だ。

九条は、その人間離れをした反射神経で、素早く銃弾を避ける。

そして、その避けた反動をいかし、身体を思い切り捻り、全力で拳を串中の銃へと叩き込む！

「っおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「！」

ガシャアンッという音が響き、銃が粉々に砕け散る。
そして、九条はそれだけに留まらず、空いたもう片方の拳で、素早く串中自身へ、叩き込む！
しかし。

「凄い力やなあ」

「！？」

しかし、拳を振るった瞬間、串中の姿は消え、声だけが後ろから聞こえた。
すかさず、九条は後ろを振り向く。
しかし、串中の姿は後ろにもなく、その姿を探そうと九条が辺りを見回そうとした瞬間。

ドスドスドスッ！！

音が、聞こえた。その音は、すぐ後ろから。
九条と楠は素早く、後ろを振り向く。
そこには。

「銃を生身の拳で潰すとか……呆れてまうわ。怖いわぁ」

貼り付けたような笑いを崩さない串中、そして……地面に倒れる、九条の部下の隊員達がいた。
隊員達は全員が、透明で腕ほどの長さのある剣とも呼べずナイフとも呼べないような、一つの歪な形の凶器に胸を貫かれて地面に固定されていた。
隊員達は、全員死んでいないようだが、そこからは多くの血が流れており、見た目だけでも危険な状況にある。

九条は、その様を見て、歯を思い切り食いしばった。そして。

「お、おぉおぉオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

叫び、勢い良く、拳を地面に叩き付けた。

「！？　ゲホッ、なんや……っ！？」

ゴシャアンッ、という音が鳴り響き、地面の土が大量に舞い上がり、それらがあまりにも強い拳の反動で粉々になり、無数の土となって、串中の目を眩ます、煙幕となった。

そして、土煙が漂う中で、九条は思い切り叫んだ。

「楠ぃ！　今すぐ傷ついた隊員を、まだ残っている隊員達で正義の城まで連れて行け！　そして、本部に連絡もしてくれ！」

「っ、了解です！　……行くよ、皆！」

九条の声に楠が応じ、楠の声に他隊員達が応じ、すぐさま倒れている隊員達を、慎重に迅速に、凶器が刺さった状態で持ち上げる。下手に凶器を抜けば、間違いなく大量の出血をし、死に至る可能性が格段に高くなるからだ。

そして、彼らは九条と、串中を残して、走ってゆく。

「……煙幕とは……随分古典的な手やなぁ。それだけに予想外で効果バツグンやったで？　あっさり逃がしてもうたわ」

煙が晴れ、二人の目線は交差する。
「……引っかかってくれて本当に有難い。引っかかってくれたお礼ついでに……こういうのは――――どうだッ！？」
瞬間、一瞬にして距離をつめ、拳を全力で串中に叩き込む。
が。
「無駄やなぁ。いくら速くても、いくら強くても、関係ないんや」
殴りかかった瞬間、串中の存在が一瞬にして移動、否、いつのまにか消失していた。
そして、声だけが、九条のすぐ背後から聞こえる。
「……ッ！」
声が聞こえた方向に素早く振り返る。
しかし。
（い、ないっ……！？）
「視力でも悪いんか？　何もあらへんとこを見て」
「な――――っ」
ドスッ！！
振り向き、思考した瞬間、また別の方向から声が聞こえ、その方向に振り向こうとした瞬間、鈍い音が響く。
その音は、串中の刃物が、九条の左腕に刺さった音だった。

刺さった箇所から、じわじわと血が滲み出る。

「ぐ、お、おおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

何を思ったか、九条は、思い切り声を上げ、左腕から刃物を抜く。刃物が外れたことによって、大量の血が噴出す。

だが、それも一瞬の事だった。

『規制解除（レグラシオン）』によって、九条の身体は人間を越える回復能力を持つ。わずか１０秒足らずで傷の殆どが塞がり、元の状態へと戻る。

「ほぉ……」

その様子を見て、いつのまにか姿を見せた串中が、興味深そうな声を漏らす。

「何や、本当に人間なんてやめとるんやなぁ。正直怖いで。そんな化け物みたいな能力（ちから）使われたら、わいの地味～な能力じゃ太刀打ちできへんで」

「よく言う……。お前の能力（ちから）があれば、俺の能力（ちから）の事なんて関係ないだろう……。その、自分の気配を完全に消す能力があればな……！」

その言葉を聞いて、わずかに串中の表情が変わったが、すぐにいつもどおりの貼り付けたような笑みを浮かべた。

「……流石にわかっとったか。そうや。わいの能力（ちから）は、『存在消失（デサパリシオン）』。何の事はない、ただ”自分の気配を完全に消すだけの能力”や。わいが消えたんやない。お前さんはわいが見えてはいるが、存在感

がなさすぎて、見えてないだけなんや」

「だけ、だと？　随分と謙虚な事だ。触れた物の硬質を変える奴に、聴覚と視覚を騙す奴に、世界最大の念発火を使う奴……。類は友を呼ぶとはよく言ったものだ。ロクな奴がいない」

そんな九条の皮肉を、全く気にすることもなく、串中は、軽く右手にいつの間にか握る歪な刃物を軽く振り回し、言った。
軽く、そして、重大な事を。

「それはありがとさん。でも、まぁ本当にまだわいの能力はマシなモンだと思うで？　”今、火向仁矢達のところに行っている奴に比べれば”」

唐突なその一言に、九条はそれだけで表情を激しく変化させる。

「！？　貴様、何を……っ！？」

「おっと。あかんな。わいらが襲撃したのは偶然って事に一応なってたんやった。……まあ、時期にわかるで。今は自分の心配をしとき」

その頃。東京の人通りの多い場所。
辺りには、人が沢山行き交っており、周りは様々な店や建物が並ぶ場所。
そこで、火向仁矢と木戸大河は、談笑する正義の城女性グループの後ろを歩きながら、話していた。

「それにしても、一体何処へ行く予定なんだ？　俺は出かけるとしか聞いてないんだが……」

「さあ？　俺は綾ちゃんに出かけに行くよう提案はしたが、場所は知らないからなぁ。まあ、付いてけば分かるんじゃね？」

「それもそうか。水並に限って変な所には行かないだろうし、まあそれでいいか」

などと、話していたその瞬間。

「……！？　皆、伏せろッ！」

「っ！？」

仁矢が突然叫び、それに従って皆が伏せ、甲ノ宮が愛理を伏せさせる。
街を行き交う人間が奇怪そうに仁矢達を見る。
そして。

ズガガガガガッ！！

銃声が響き、複数の弾丸が仁矢達目掛けて襲い掛かってきた。
その光景を見て、街を行き交う人間が悲鳴を叫び、仁矢達の周りか

ら逃げてゆく。
仁矢は、街の人間が逃げ終えたのを確認した瞬間、身体の中から血にまみれた刀を取り出す。
そして、全ての弾丸を一瞬の内にして切り裂く！

「イミナとシュードラは、愛理を連れて、遠くまで走れ！　そして正義の城に連絡をしろ！　周囲の住人避難の閃光弾も頼む！　甲ノ宮とリアは、俺と残って襲撃してきた馬鹿を見つけて、始末するぞ！」

「了解！」

弾丸を全弾無力化したのを確認すると、後ろで伏せていた皆に向けて仁矢が言う。
それは、一人の青年としてではなく、一人の正義の使徒としての、口調だった。
それぞれが仁矢の言葉に応じ、水並と木戸は愛理を連れて走り、甲ノ宮とリアが、警戒態勢をとり、能力を発動させる。

「『感情装填（センテイメント）』……ッ！」

「……『雷力行使（トゥルエノ）』」

甲ノ宮は二丁拳銃を手にとり、アリサが雷を身体に纏い、仁矢が刀を手に握りしめ、背中を寄せ合う。
少し離れた場所から、閃光の弾丸が放たれ、空を光で染める。住人避難用の弾丸である。イミナかシュードラのどちらかが発砲してくれたのだろう。
これで、付近の人間の事を気にする必要はない。

「俺達に場所が感づかれないという事は、相当に離れた場所から撃っている筈だ……。それだというのに、襲撃者は俺達を有り得ないほどに正確に狙い撃って来た。……間違いなく、Ｂより下のレベルの犯罪者ではありえない。……気をつけろ」

「そうですね。このレベルでの発砲が出来る犯罪者は……恐らく数えられるほどしかいないでしょう。舐めてかかると、こちらが死にますね。フィアさん、さっきの銃弾、どの方向から向かってきたか、正確に見えましたか？」

「ええ……。けど……ふざけてるわよ。あそこを見れば、わかる」

「！？　どういう事だ……！？」

甲ノ宮の指差す方向。それは、空だった。
信じられない、と言った表情の仁矢に、甲ノ宮はなにやら強い、負の感情が積もった声で言う。

「よく考えて見なさいよ、ジード。空から撃つのは確かに不可能よ。けど……”弾丸を操れる犯罪者なら、空から弾丸が撃たれたようにも見せれる”」

「まさかっ……！？」

「フィアさん、それはもしかして……」

弾丸を操ることが、可能な犯罪者。
それは、一人だけ、いる。
その名が、三人の頭に浮かぶ。
その名は――――

「……アイラー・ステニバスッ……！！」

甲ノ宮は、その名を叫ぶ。
自分の全てを狂わせた男の名を。
アイラー・ステニバスという名を、叫ぶ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1357p/

Justicia

2011年8月26日22時09分発行